

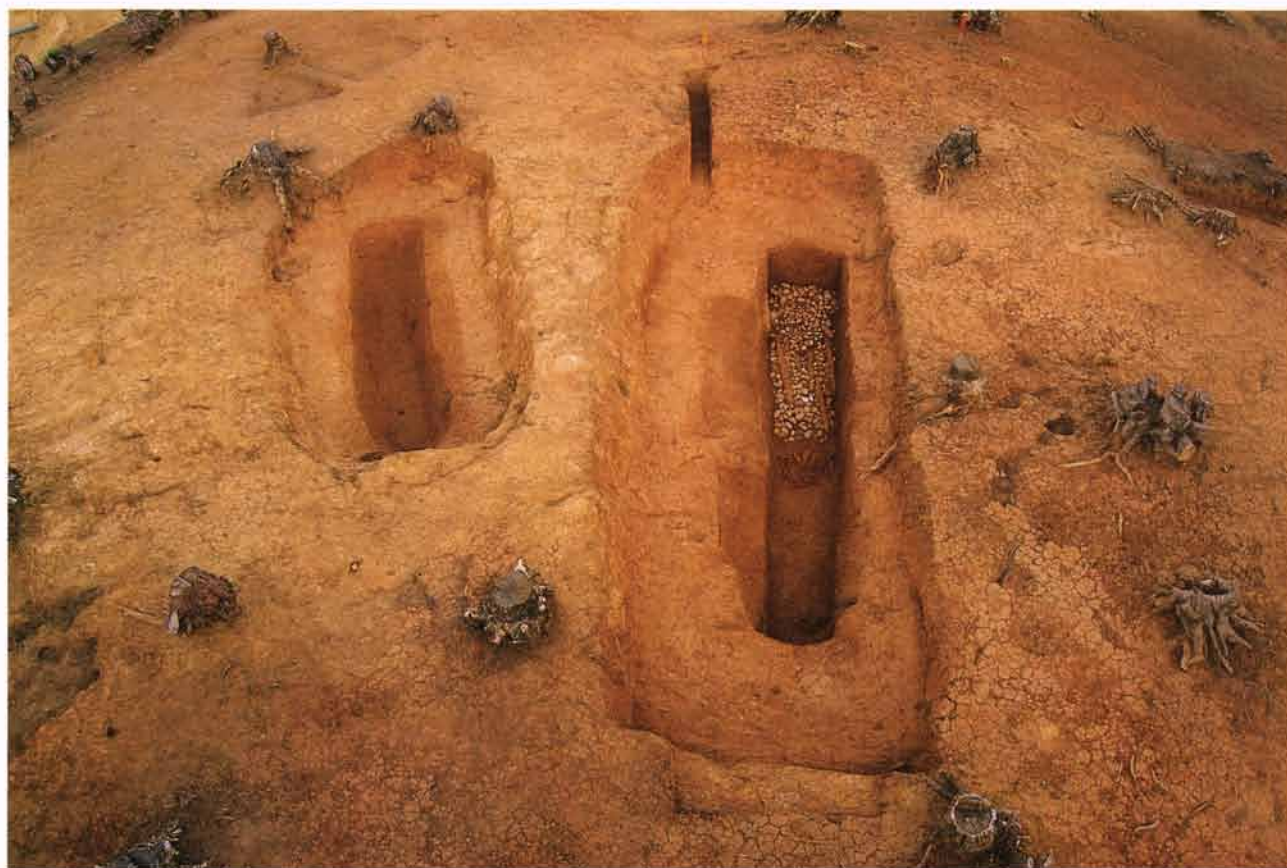
京都府埋蔵文化財情報

第 60 号

奈良岡北古墳群の発掘調査-----	増田 孝彦-----	1
平成 8 年度発掘調査事業予定-----	水谷 壽克-----	8
平成 7 年度京都府埋蔵文化財の調査-----	奥村清一郎-----	11
丹後蛭子山古墳の測量図を読む-----	奥村清一郎-----	16
中世土器の編年(下)-----	伊野 近富-----	26
ー平成 7 年度発掘調査略報ー-----		36
25. 石ヶ原古墳群	28. 内里八丁遺跡	
26. 引地城跡・南有路城跡	29. 棕ノ木遺跡	
27. 長岡京跡右京第511次		
資料紹介 近世京都・勤兵衛町出土の「乾山」-----	小池 寛-----	45
府内遺跡紹介 70. ニゴレ古墳-----		50
71. 二子山古墳-----		53
長岡京跡調査だより・57-----		55
財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧-----		58
センターの動向-----		59
受贈図書一覧-----		61

1996 年 6 月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



(1) 主体部検出状況



(2) 出土遺物（集合写真）

奈具岡北古墳群の発掘調査

増田孝彦

1. はじめに

奈具岡北古墳群は、丹後半島のほぼ中央部、竹野郡弥栄町溝谷に所在する。調査は、農林水産省近畿農政局が計画・推進している「丹後国営農地開発事業」の奈具岡団地造成工事に先立ち、同局の依頼を受け実施したものである。ここは弥生時代中期～後期の拠点集落として著名な、奈具遺跡・奈具岡遺跡が立地する丘陵の谷奥にあたる。造成予定地・その周辺では多くの調査が行われており、弥生時代中期後半の奈具墳墓群^(注1)や貼り石墓の一部が検出された奈具岡遺跡^(注2)、古墳時代前期の奈具古墳群^(注3)、古墳時代中期の溝谷古墳群^(注4)、7世紀前半の横穴式石室を内部主体とする奈具岡南5号墳^(注5)があり、弥生時代中期から古墳時代全期を通じて墳墓が築造され続けている。丘陵斜面・谷部では平成4年度に調査された、弥生時代中期の緑色凝灰岩製管玉・水晶製玉作り遺跡である奈具岡遺跡^(注6)、護岸板杭列やトチノミの灰汁抜き場が検出された奈具谷遺跡^(注7)がある。

奈具岡北古墳群(号墳名は調査時の仮称)は、当初、円墳を中心とした3基の古墳が調査予定となっていたが、地形測量の結果、1基の前方後円墳(1号墳)であることが分かった。また、これ以外にも造成予定地内に5基の古墳が存在し、このうち3基(2・6・7号墳)が今年度追加調査となった。この下方の斜面は水晶製玉作り工房および鉄器加工・ガラス玉製作が行なわれたと考えられる奈具岡遺跡、谷部では杭列・護岸板杭列を主とする遺構が検出された奈具谷遺跡となる。奈具岡遺跡・奈具谷遺跡は、広範囲になるので、過去の調査地との混同を避けるため整理を行う必要があり、次の機会に報告を行いたい。

現地調査は、奈具岡北古墳群・奈具岡遺跡・奈具谷遺跡を含め、平成7年5月2日～平成8年2月28日まで調査を実施した。以下に、奈具岡北古墳群の調査の概略を記す。

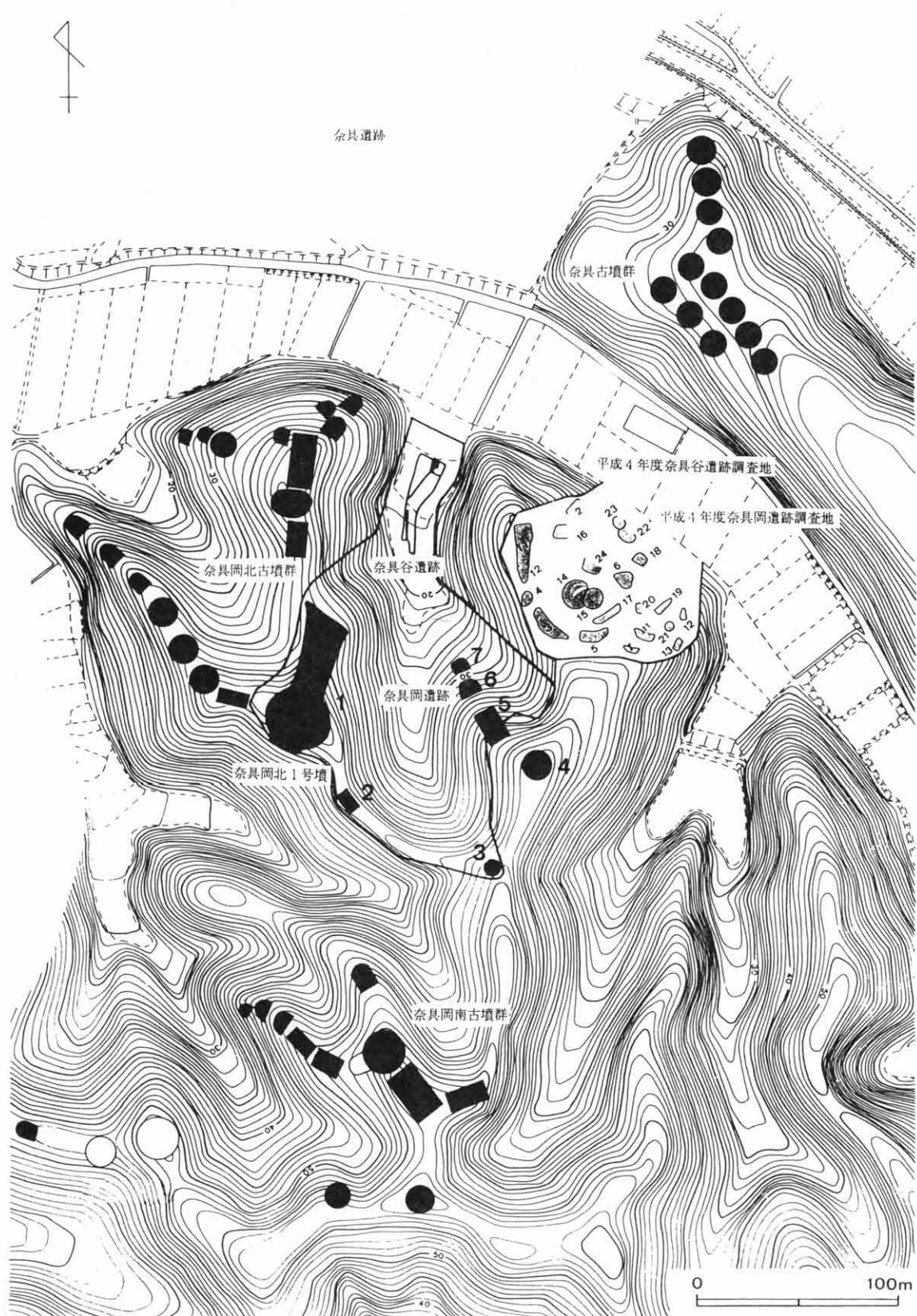
2. 調査概要

1号墳は、丘陵が3方向に分岐する標高45m付近に立地し、丘陵を削り出して墳形を整える。自然地形を最大限に利用しているためにややい



第1図 調査地及び周辺主要遺跡分布図(1/25,000)

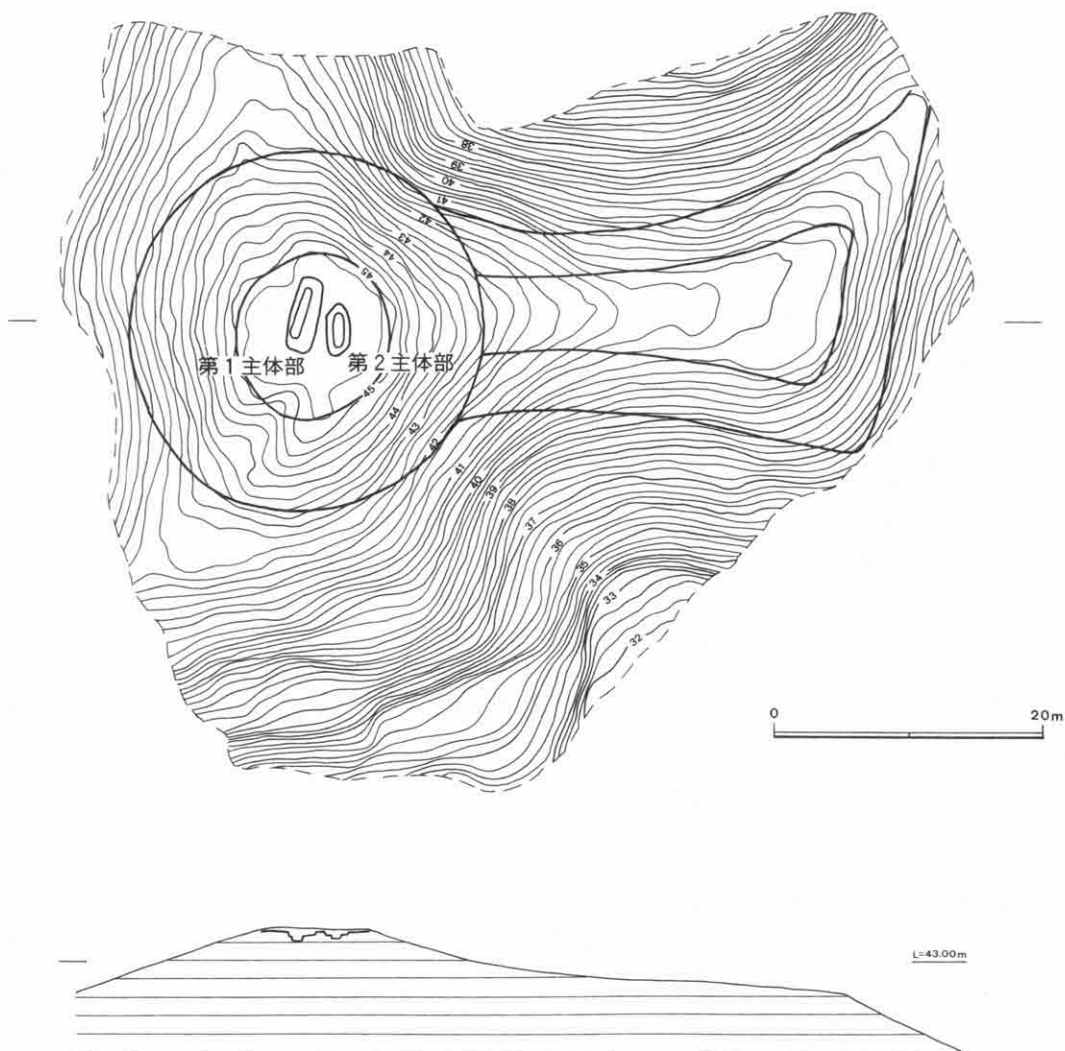
- | | | |
|----------|----------|----------|
| 1. 調査地 | 2. 奈具遺跡 | 3. 奈具墳墓群 |
| 4. 溝谷古墳群 | 5. 龍淵寺古墳 | 6. 丸山古墳 |



第2図 奈良岡北古墳群及び周辺遺跡分布図

びつであるが、南北に主軸を持つ全長60m、前方部幅26m、高さ約3.6m、後円部直径約27m・高さ約2.4mを測る。前方部北西側は丘陵と陸橋でつながり、葺石・埴輪などの外表施設はない。前方部西側は、明瞭な傾斜変換点が認められるが、東側は奈具岡遺跡の住居跡が存在しており、古墳築造時にはテラス状に残存していたようで、これを墳丘裾としたと考えられる。眼下の竹野川方向から見ると丘陵の最高所に位置するためかなり大きな前方後円墳に見える。

埋葬施設は、後円部の中央ではほぼ東西に主軸をとる墓壇2基を検出した。中心主体である第1主体部は、平面隅丸長方形を呈し、地山面から掘り込まれる素掘りのものである。検出面で長軸5.8m×短軸2.1mの墓壇規模を有し、木棺痕跡は墓壇を掘り下げる過程で検出した。木棺は、墓壇中央に安置され、長軸3.95m・短軸東側0.75m・西側0.46mの墓壇規模を有し、小口部分には段を残さない構造で、長側板が小口部分を挟む組合式箱形木棺と考えられる。東側から約1.8mは径8cm程度の楕円形の礫を敷き詰めている。遺骸埋葬部分のみ礫床とし、西側半分は仕切り板で区画し、矢束を納めている。この仕切板部分は溝状に段を残す。



第3図 奈具岡北1号墳地形図

第2主体部は、ややいびつな平面隅丸長方形を呈し、墓壙は、地山面から掘り込まれる素掘りのもので、長軸4m・短軸1.8mの規模を有する。木棺痕跡は、墓壙を掘り下げる過程で検出した。木棺は墓壙中央に安置され長軸2.8m・短軸0.7mの規模を有する。検討を要するが断面観察

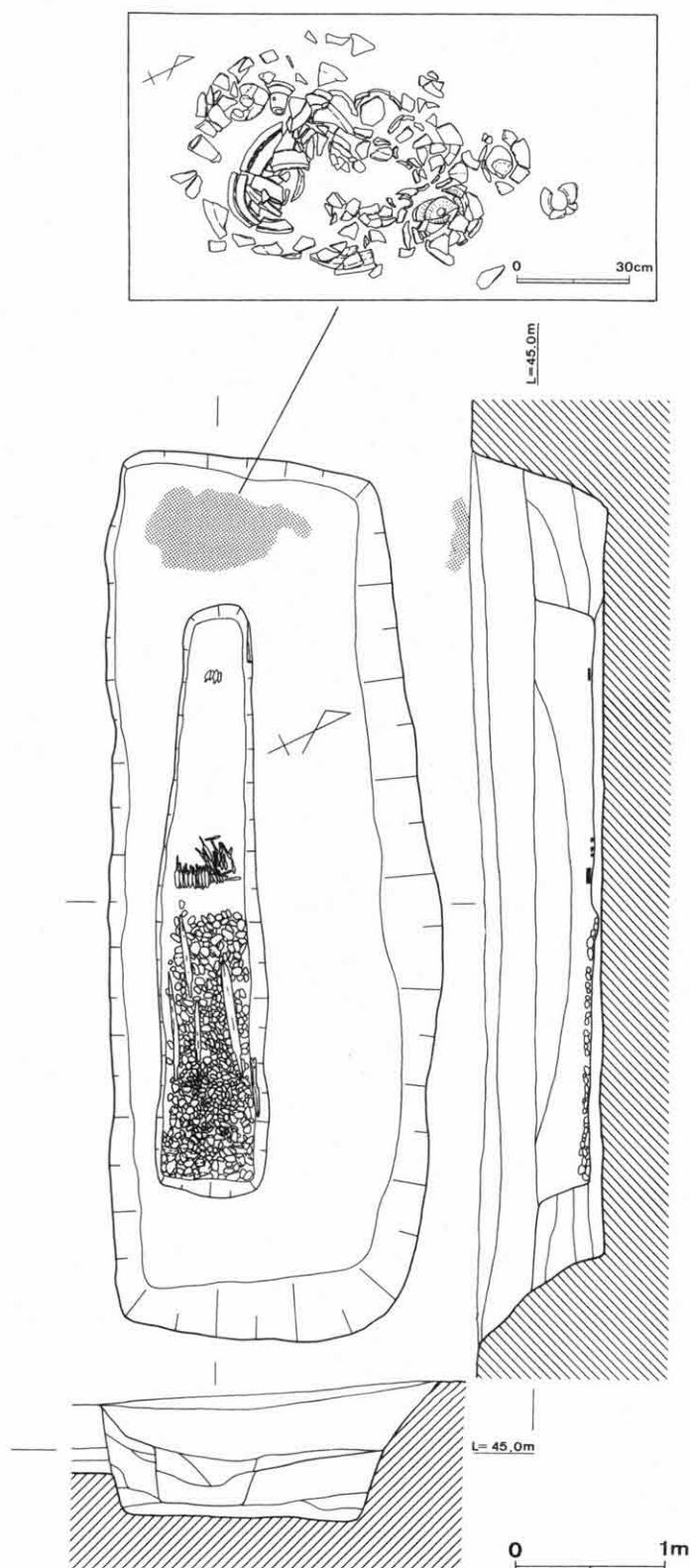
では、小口付近が舟底状を成している。第1・2主体部とも東枕である。

第1主体部からは、墓壙上での祭祀に伴うと考えられる陶質土器^(補注)12点(有蓋高杯2セット・無蓋高杯5・器台1・壺2)、土師器高杯3点、ミニチュア土器1点が破砕された状態で出土した。棺上からは鉄矛1点・石突1点が検出され、矛の全長は3.3mが復元される。棺内の礫床部分からは鉄剣4点・銅釦^{どうこう}2点が、礫床の西側部分からは容器に納められていたと考えられる鉄鏃53点、その周辺で刀子1点・不明鉄器3点が出土し、西端では鉄鏃8点が出土した。

第2主体部からは、墓壙上の祭祀に伴うと考えられる土師器高杯1点・小型丸底壺1点が出土し、棺上の遺物として鉄鏃4点が検出された。

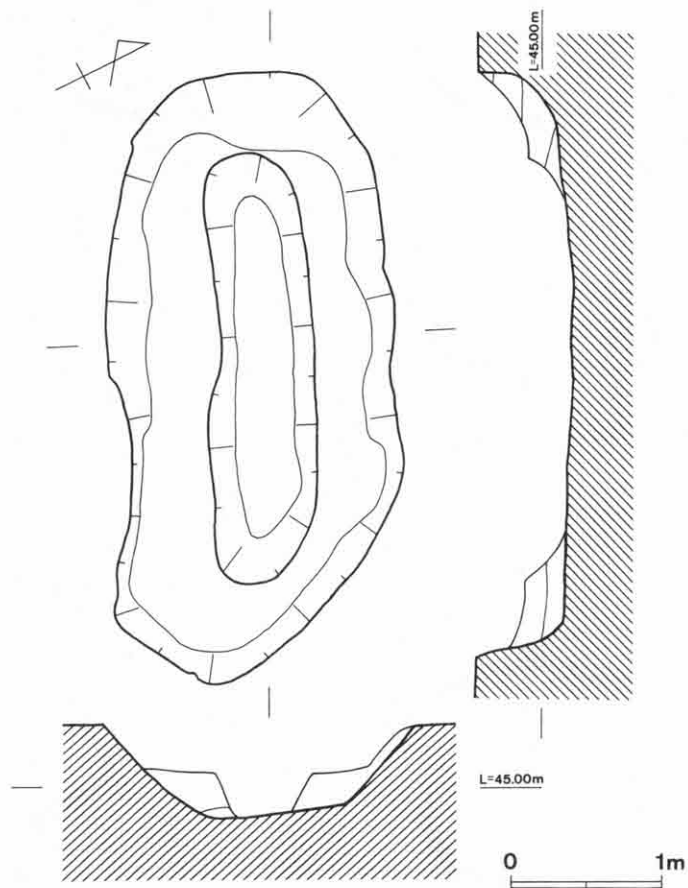
その他、前方部西側肩部付近より珠文鏡1面、後円部南東側裾付近より土師器高杯や棒状土製品、滑石製白玉も出土している。1号墳の築造時期については検討を要するが、5世紀前半と考えている。

2号墳は、1号墳の南東側に位置する。山道により墳丘が大きく削平されており、それに伴い埋葬施設も消失したようである。復元



第4図 1号墳第1主体部実測図

される規模は14m×8m、高さ約1.0mの方墳が推定される。遺物が出土していないため築造時期は不明である。代わって2号墳東側の丘陵稜線上より、弥生時代中期後半に位置づけられる墓壙1か所を検出した。墓壙は、平面隅丸長方形を呈し、地山面から二段に掘り込まれる。規模は長軸3.3m・短軸1.7mを測る。二段目は墓壙中央中位から掘り込まれ四周に段を残す形態をとる。検出面での規模は、長軸2.5m・短軸0.5mを測る。小口の段に側板を立てる構造で、長側板が小口部分を挟む組合式木棺と考えられる。墓壙上の遺物と考えられる高杯が出土した。



第5図 1号墳第2主体部実測図

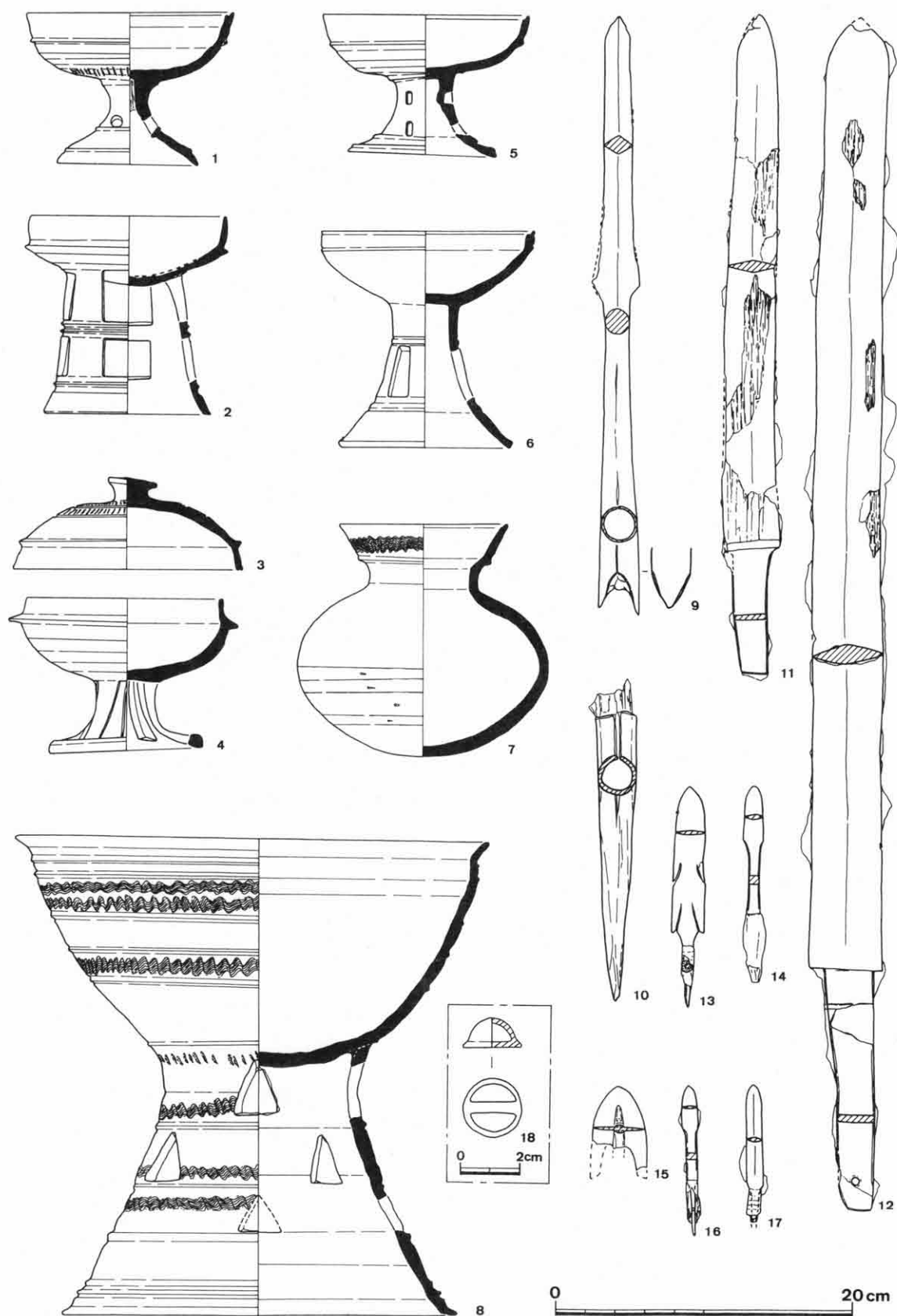
6・7号墳は、奈具岡遺跡を挟んだ東側の丘陵先端に位置し、丘陵稜線を削平し、舌状の平坦部を設けた階段状地形を呈する方墳である。墓壙は、6号墳では削平された平坦部中央よりやや南東寄りに設けられている。墓壙は、尾根に直交し平面隅丸長方形を呈する。墓壙は、地山面から掘り込まれる素掘りのもので、検出面で長軸3.3m×短軸1.7mの規模を有する。木棺痕跡は、墓壙を掘り下げる過程で検出した。検出面での規模は長軸2.5m・短軸1.0mを測る。組合式箱形木棺を納めていたと考えられる。墓壙内より弥生時代中期の甕1点・壺1点・水差し1点が出土した。

7号墳は、狭い平坦部に墓壙を穿ち、木棺を用いる。墓壙は、尾根に直交し平面隅丸長方形を呈し、地山面から二段に掘り込まれる。規模は長軸3.5m・短軸1.7mを測る。二段目は墓壙中央の中位から掘り込まれ四周に段を残す形態をとる。長軸2.8m×短軸0.6mの木棺規模を有し、小口部分には段を有さない構造で、長側板が小口部分を挟む組合式木棺と考えられる。棺内より切先を西に向けた鉄剣1点が出土した。土器類の出土は認められなかったが、周辺での調査成果等から前期古墳である可能性が高い。

7号墳は、狭い平坦部に墓壙を穿ち、木棺を用いる。墓壙は、尾根に直交し平面隅丸長方形を呈し、地山面から二段に掘り込まれる。規模は長軸3.5m・短軸1.7mを測る。二段目は墓壙中央の中位から掘り込まれ四周に段を残す形態をとる。長軸2.8m×短軸0.6mの木棺規模を有し、小口部分には段を有さない構造で、長側板が小口部分を挟む組合式木棺と考えられる。棺内より切先を西に向けた鉄剣1点が出土した。土器類の出土は認められなかったが、周辺での調査成果等から前期古墳である可能性が高い。

3. まとめ

今回の調査成果をまとめると、奈具岡北1号墳は、丹後の前方後円墳の変遷を知る上で重要な古墳となっただけでなく、古墳の築造・立地・形態についても多くの問題を提起した。丹後地域



第6図 1号墳出土遺物実測図

1~8. 陶質土器 9. 鉄鉾 10. 石突 11・12. 鉄剣 13~17. 鉄鏃 18. 銅釦

の前方後円墳の中では、もっとも数の少ない中規模クラス古墳の調査となった。外表施設として葺石・埴輪・段築を持たず、副葬品においても鏡・玉を持たず、多くの武器を副葬する特徴がある。この武器(鉄製品)に関しても同時期の古墳と比べると多い。

銅釦は弥生中期～後期に九州を中心にして6遺跡で11点が出土している。京都府では、綴喜郡田辺町田辺天神山遺跡^(注8)で出土しているが、いずれも大型であり、古墳時代出土のものは本例のみである。本例と同タイプのものとしては、中国甘肅省白草坡西周墓^(注9)からの出土例がある。

墓壙上面から出土した陶質土器は、出土例が少なく、日本海側では初の出土であり、その形態から慶尚南道地域で製作された可能性が高いが、充分検討し生産地を限定していく必要がある。

礫床を持つ木棺直葬墳は、京都府北部では園部町岸ヶ前2号墳、福知山市ヌクモ2号墳、綾部市奥大石1号墳、岩滝町日ノ内1・2・3号墳、大宮町左坂C-21号墳、弥栄町溝谷2・3号墳、丹後町八坂神社西古墳に例があり、5世紀初頭から前半に位置づけられている。

奈良岡北1号墳の時期は、畿内には渡来人による技術革新がもたらされ、中央集権的な政治体制が整備されていく。このような中で、丹後は畿内から最も大陸に近いという地の利を生かし、新時代の流れをいち早くつかんだものと思われる。陶質土器や銅釦は大陸との関係を直接示すものである。鉄製武器の多いことなどからすると、鉄生産と深く関わりを持った被葬者であった可能性も考えられる。

(ますだ・たかひこ＝当センター調査第2課調査第2係主任調査員)

注1 河野一隆「2. 奈良墳墓群・奈良古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注2 奥村清一郎・林日佐子「奈良岡遺跡第3次発掘調査報告書」(『弥栄町文化財調査報告』第4集 弥栄町教育委員会) 1986

注3 注1に同じ

注4 田代 弘ほか「(5)溝谷古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注5 増田孝彦「(3)奈良岡南古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第65冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995

注6 田代 弘ほか「(1)奈良岡遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第55冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注7 田代 弘ほか「(4)奈良谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994

注8 山田良三編『三山木弥生式遺跡発掘調査報告書』 京都府田辺町郷土史会・京都府立城南高等学校 1968、山田良三「三山木出土の異形青銅器」(『日本古文化論攷』 奈良県立橿原考古学研究所) 1970

注9 甘肅省博物館文物隊「甘肅靈台白草坡西周墓」(『考古学報』1977年第2期) 1977

補注 なお、すべてが陶質土器であるかについては、胎土分析結果を待って検討したい。

平成8年度発掘調査事業予定

水谷 壽 克

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターは、国・公社・公団及び府の開発事業等に伴う事前調査を実施している。年間事業は、京都府教育庁指導部文化財保護課が開発事業者と文化財保護法による協議を行なったうえ、当調査研究センターと調整を図り決定される。調査体制は、後掲する組織及び職員一覧のとおりである。

平成8年度に予定している事業件数は27件、遺跡調査箇所数は40遺跡を数える。開発行為では、道路建設に伴う調査が18件、庁舎・住宅建設・施設整備等に伴うものが6件、ほ場整備等に伴うものが3件である。また原因者別にみると、国・公社・公団関係の受託件数が8件で全体の約3割程度であるが、名神高速道路拡幅事業・国営農地開発事業・京都縦貫自動車道建設など大規模開発に伴うものが多く、事業費総額では約6割を占める。

今回特にその成果が期待されるものは、以下のとおりである。

丹後国営農地開発事業に伴う調査では、昨年度陶質土器・初期須恵器・銅釦・鉄鉾等が出土し、5世紀前半の前方後円墳と判明した奈具岡北1号墳が立地する丘陵尾根線上に位置する古墳群及び、弥生時代中期の水晶製玉作り遺跡として話題を呼んだ奈具岡遺跡の継続調査を行う。また、製鉄関係遺跡の黒部遺跡他の6遺跡の調査を実施する。

松ヶ崎遺跡は、弥生時代前期から中期にかけての集落遺跡で、多数の土器とともに石器・土錘・柱材・種子類などが出土している。また平遺跡は、段丘の砂丘上に営まれた遺跡で、昭和40年に実施された調査で縄文時代前期から晩期にかけての土器・石器が層位的に確認され、遺物包含層の厚さは4mに達し、11層に分類されている。これらの調査は道路改良事業に伴う事前調査で、遺跡の広がりや性格等を確認する目的で実施する。

浦入遺跡・浦入西古墳群は、東舞鶴東北部の浦入湾を臨む丘陵部と斜面地に立地している。舞鶴市教育委員会が浦入湾一帯の試掘調査・発掘調査を実施し、丘陵部には古墳群が、湾岸部には縄文時代から平安時代に至る集落遺跡があり、特に、平安時代には大規模な塩生産が行なわれていたこと等が明らかになっている。昨年度は湾口部の平均海拔0.8mの砂州に広がる嶋遺跡の調査を実施し、縄文時代から奈良時代にかけて断続的に営まれた集落遺跡であることが判明している。特に、弥生時代中期以前の汀線を現海面下1mで確認している。なお、これらの調査は、舞鶴火力発電所建設に伴う調査である。

京都縦貫自動車道(綾部・宮津道路)建設に伴う調査では、桑原口遺跡・今福9号墳・盛林寺裏山古墳・今福北城跡の調査を実施する。桑原口遺跡は、昨年度からの継続調査を実施する遺跡で、

付表 平成8年度事業一覧

番号	遺跡名	種別	所在地	調査予定期間	調査予定面積	調査原因
1	黒部遺跡	窯跡	弥栄町	4月～7月	2000m ²	農地開発
2	奈具岡北古墳群	古墳	弥栄町	4月～7月	2基	
3	奈具岡南古墳群	古墳	弥栄町	4月～7月	14基	
4	奈具岡遺跡	集落跡	弥栄町	4月～7月	5000m ²	
5	シミズ谷城跡	城跡	弥栄町	4月～7月	1000m ²	
6	天王山古墳群	古墳	久美浜町	4月～7月	5基	
7	平遺跡	集落跡	丹後町	8月～12月	1000m ²	道路建設
8	松ヶ崎遺跡	集落跡	網野町	4月～7月	1000m ²	道路建設
9	田辺城跡	城跡	舞鶴市	10月～12月	260m ²	庁舎建設
10	長岡京跡（外環）	都城跡	長岡京市	7月～12月	1300m ²	道路建設
11	浦入遺跡	集落跡	舞鶴市	4月～1月	5000m ²	施設建設
12	浦入西古墳群	古墳	舞鶴市	4月～1月	8基	
13	桑原口遺跡	集落跡	宮津市	4月～7月	300m ²	道路建設
14	今福9号墳	古墳	宮津市	6月～8月	1基	
15	今福北城跡	城跡	宮津市	8月～9月	100m ²	
16	盛林寺裏山古墳	古墳	宮津市	6月～9月	1基	
17	太田遺跡他	集落跡	亀岡市	4月～12月	1500m ²	ほ場整備
18	篠窯跡群	窯跡	亀岡市	4月～7月	1基	道路建設
19	長岡京跡	都城跡	向日市	4月～12月	1500m ²	住宅建設
20	中海道遺跡	集落跡	向日市	6月～10月	450m ²	道路建設
21	長岡京跡他	都城跡	向日市	1月～2月	350m ²	道路建設
22	長岡京跡（石見）	都城跡	長岡京市	4月～6月	280m ²	道路建設
23	長岡京跡	都城跡	大山崎町	11月～2月	750m ²	住宅建設
24	平安京跡	都城跡	京都市	10月～2月	1000m ²	庁舎建設
25	備前遺跡他	散布地	八幡市	6月～10月	1000m ²	道路建設
26	下植野南遺跡	集落跡	大山崎町	11月～2月	1000m ²	道路建設
27	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	4月～2月	3800m ²	道路建設
28	田辺城跡	城跡	田辺町	5月～9月	1300m ²	道路建設
29	興戸古墳群	古墳	田辺町	7月～9月	2基	
30	西隼上り遺跡	集落跡	宇治市	12月～2月	3400m ²	道路建設
31	鷺坂山遺跡他	散布地	城陽市	10月～2月	2000m ²	運動場建設
32	棕ノ木遺跡	集落跡	精華町	5月～9月	2000m ²	道路建設
33	柿添遺跡	集落跡	精華町	5月～9月	700m ²	道路建設
34	森垣内遺跡	散布地	精華町	10月～1月	480m ²	道路建設
35	五領池東瓦窯跡群	窯跡	木津町	5月～9月	3基	団地造成
36	木津城跡	城跡	木津町	9月～12月	1000m ²	
37	片山1号墳	古墳	木津町	9月～12月	1基	
38	長岡京跡左京第384次	都城跡	京都市	4月～9月	5680m ²	道路建設
39	長岡京跡左京第385次	都城跡	京都市	6月～2月	8720m ²	
整1	弓田遺跡	集落跡	木津町	4月～2月	整理	道路建設

弥生時代末から古墳時代後期にかけての集落跡の広がりや性格についての調査を行う。また、京都丹波道路篠インター拡幅に伴う篠窯跡群の調査では、昨年度末に窯体及び灰原を確認したマル山1号窯の継続調査を実施する。

内里八丁遺跡は、第2京阪道路建設に伴い平成2年度から継続して調査を実施している。弥生時代の水田遺構が検出された北西部では、中世・奈良時代・古墳時代後期・古墳時代前期の4時期の遺構面を検出しており、今年度も継続して遺跡の広がりを追求する。

備前遺跡は、摂南大学校地内の畑で竪穴式住居の断面が露呈し弥生土器片が出土していることから確認された遺跡である。柿添遺跡は、山手幹線建設に伴い調査を実施する予定で、北東方向に舌状に張り出す微高地に古墳時代後期・奈良時代・中世に至る3時期の集落跡が想定される。いずれも、府道新設に伴い遺跡が縦断されることから調査を実施し、遺跡の広がり等を確認する。

関西文化学術研究都市整備に伴う調査では、五領池東瓦窯跡群・木津城跡・片山1号墳の調査を実施する。瓦窯跡群は、平成5年度の試掘調査により、奈良時代の瓦窯3基の存在が確認されており、今年度面的調査を実施し、全貌を明らかにする。また、木津城跡は、比較的大規模な中世山城で、造成地にかかる部分に限り、調査を実施する。

長岡京跡関係では、名神高速道路拡幅事業に伴い、約50,000m²を対象として桂川パーキング建設地の調査を実施している。昨年度は左京南一条四坊四町及び三坊十三町の二町域約14,000m²の大規模な面的調査を実施し、東三坊大路・南一条大路等の条坊や一町四方の邸宅跡や宅地割りが明らかにされた。今年度は左京南一条三坊十三町及び二条四坊八町の調査を実施する。他に、府営住宅建設・道路建設に伴い5件の調査を実施する。また、平安京跡では、庁舎建設に伴い左京五条三坊の調査を実施する。

普及啓発事業では、機関誌『京都府埋蔵文化財情報』の刊行(年4回、第60～63号)、府民を対象とした研修会「埋蔵文化財セミナー」の開催(年3回)を行う。また平成7年度に京都府管内において実施された発掘調査の成果を一堂に展示する「第14回小さな展覧会」を、平成8年8月17日(土)から9月1日(日)まで向日市文化資料館で開催する予定である。

(みずたに・としかつ=当センター調査第1課課長補佐兼企画係長)

平成7年度京都府埋蔵文化財の調査

奥村清一郎

平成7年度内に京都府管内で届出・通知がなされた発掘調査は262件を数え、前年度に比べると37件の増となっている。このうち、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した調査は、別表に示したとおりである。以下、平成7年度に京都府管内で行われた発掘調査成果について、当調査研究センター実施分を中心に概観してみよう。

旧石器・縄文時代

大江町引地城跡下層から、縄文草創期に属する尖頭器2点と石斧1点の計3点の石器が出土した。由良川を眼下にのぞむ丘陵上に当該期の遺跡が存在したことは疑いないが、残念ながら中世城郭建設時に削平されたものと推測される。舞鶴市嶋遺跡は、砂嘴上に立地する遺跡で、縄文後期の土器・貝殻・有機物等を含む包含層が検出され、砂嘴の形成年代を窺い知る貴重な成果が得られた。このほか、大宮町奥大野遺跡からは縄文前期の押型文土器、向日市清水遺跡・加茂町恭仁京下層遺跡からは縄文晩期の土器片がそれぞれ採取されている。

弥生時代

集落遺跡のほか、墳墓・生産遺跡の調査が府内各地で実施され、多大な成果が得られた。

集落関係では、主に弥生後期から庄内式併行期にかけての竪穴住居・土坑・溝などの調査データが蓄積された。宮津市桑原口遺跡では、弥生後期から古墳前期にかけての時期に属する、円形住居1棟、方形住居3棟、掘立柱建物1棟が検出された。このうちの円形住居には、手焙り形土器が伴う。京北町上中太田遺跡では、弥生後期の円形住居1棟が検出されており、大堰川上流部に開けた周山盆地の開発が、弥生後期段階にはかなり進展していたことが明らかとなった。同じ大堰川の一支流である本梅川流域に開けた本梅盆地に所在する宮川遺跡では、弥生後期から古墳前期初頭に属する円形住居2棟、方形住居5棟のほか、丹波地域では初例となる八角形住居1棟が検出され、注目を集めた。向日市中海道遺跡でも、弥生後期の円形住居1棟、庄内式併行期の方形住居5棟、布留式併行期の方形住居1棟のほか、庄内式期の掘立柱建物1棟が検出された。このうちの掘立柱建物は、2間×2間の身舎の四面に廂を設け、北辺には階段を付設したもので、建物の周囲には、北辺の中央に陸橋部を掘り残した周溝を掘りめぐらす構造となっている。初現期の神殿遺構もしくは、有力者の住居とみられ、研究者の間でも評価は未だ定まっていない。砂嘴上の遺跡として先にとりあげた嶋遺跡では、弥生前期の土坑・ピット・焼土面等を検出した。

墳墓遺跡の調査例としては、大宮町左坂墳墓群、野田川町香具山城遺跡、京都市東土川遺跡、長岡京市神足遺跡、八幡市幸水遺跡などがある。左坂墳墓群では弥生後期の台状墓4基が見いだ

付表 平成7年度発掘調査地一覧表

番号	遺跡名	種別	所在地	担当者	調査期間	概要
1	黒部遺跡	生産跡	弥栄町	岡崎研一 柴 暁彦	4/11～7/11	登窯状炭窯 5 基以上。
2	奈具岡北古墳群・ 奈具岡遺跡・奈具 谷遺跡	古墳 集落跡 水田跡	弥栄町	増田孝彦 河野一隆 柴 暁彦	4/11～2/28	前方後円墳、陶質土器・初期須恵 器・銅釦・鏡出土。水晶製玉作り工 房・住居跡。杭列。
3	奈具岡南古墳群	古墳	弥栄町	河野一隆	4/11～5/26	古墳 2 基。
4	中原城跡	城跡	峰山町	村田和弘	5/23～7/5	焼土坑。
5	遠所古墳群	古墳	網野町	河野一隆	5/19～8/11	古墳 4 基。一部城跡に改変。
6	枯木谷遺跡	集落跡	大宮町	竹原一彦	9/18～11/29	掘立柱建物跡、溝。
7	左坂横穴群・墳墓 左坂古墳群 C 支群	横穴 墳墓 古墳	大宮町	竹原一彦 筒井崇史 (石崎善久)	4/17～8/8	横穴 1 基。弥生時代墳墓 1 基(主体 部13基)。古墳 8 基。
8	南谷古墳群	古墳	久美浜町	筒井崇史	7/17～10/20	古墳 2 基。
9	石ヶ原古墳群	古墳	丹後町	村田和弘	12/4～2/28	古墳 7 基。
10	竹野遺跡	集落跡	丹後町	村田和弘	7/17～10/13	弥生時代前期、壺出土。
11	引地城跡	城跡	大江町	筒井崇史	11/21～2/28	帯郭・土塁。
12	嶋遺跡	集落跡	舞鶴市	田代 弘	6/19～12/22	砂嘴上の集落跡。縄文時代～歴史時 代。
13	浦入遺跡	集落跡	舞鶴市	石井清司 黒坪一樹 大岩洋一	12/4～2/28	弥生時代～奈良時代の集落跡。
14	浦入西古墳群	古墳	舞鶴市	尾崎昌之	2/21～2/28	(地形測量)
15	池下城支城	城跡	舞鶴市	黒坪一樹	9/25～12/8	郭・堀切・経塚(火葬墓?)。
16	堀古墳	古墳	舞鶴市	大岩洋一	10/19～11/29	古墳の微候なし、火葬墓(経塚?)。
17	大俣城跡	城跡	舞鶴市	石井清司 大岩洋一	4/17～9/8	16世紀に築城された中世城郭跡。郭 群・堅堀・土塁。
18	桑原口古墳群	古墳	宮津市	尾崎昌之	6/15～7/12	遺構・遺物なし。
19	桑原口遺跡	集落跡	宮津市	石井清司 尾崎昌之	6/23～12/15	弥生時代後期～古墳時代の集落跡。
20	城山谷古墳群	古墳	宮津市	尾崎昌之	5/23～6/2	遺構・遺物なし。
21	小田大谷古墳	古墳	宮津市	尾崎昌之	6/5～6/8	遺構・遺物なし。
22	小田蛭子谷古墳	古墳	宮津市	黒坪一樹	6/7～6/21	遺構・遺物なし。
23	園部城跡	城跡	園部町	黒坪一樹	6/26～8/11	堀跡、杭列。
24	千代川遺跡	集落跡	亀岡市	野々口陽子	11/6～12/14	顕著な遺構なし、弥生土器・須恵 器・中世陶磁器。
25	宮川遺跡	集落跡	亀岡市	野々口陽子 (森 正)	5/9～8/11	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡。弥生 時代～中世の集落跡。古墳 1 基。
26	上中太田遺跡	散布地	京北町	石井清司 竹下士郎	10/19～12/22	竪穴式住居跡・掘立柱建物跡。弥生 時代～中世の集落跡。
27	篠窯跡群	窯跡	亀岡市	野々口陽子	1/23～2/28	登窯 1 基。
28	長岡京跡(L366)	都城跡	向日市	小池 寛 竹下士郎	4/24～12/22	東一坊坊間東小路と四条条間小路と の交差点付近の条坊遺構。
29	植物園北遺跡16次	集落跡	京都市	石尾政信	4/19～8/18	古墳時代前期の竪穴式住居跡。
30	中海道遺跡34次	集落跡	向日市	奈良康正	9/27～11/28	弥生時代後期の竪穴式住居跡。
31	長岡京跡(R498)	都城跡	長岡京市	引原茂治 奈良康正	6/5～12/22	掘立柱建物跡。溝・井戸。
32	長岡京跡(R511)	都城跡	長岡京市	石尾政信	10/20～2/28	古墳～平安時代の川跡。
33	内里八丁遺跡	集落跡	八幡市	森下 衛 八木厚之 (藤井 整)	4/20～2/28	奈良～中世の掘立柱建物跡。古墳時 代の竪穴式住居跡。

34	井尻遺跡	散布地	宇治市	八木厚之	10/26～1/12	近世の水田跡。
35	田辺城跡	城跡	田辺町	奈良康正	12/7～1/12	中世山城跡。
36	興戸宮ノ前遺跡	散布地	田辺町	伊賀高弘	8/17～12/18	堀切・土塁。
37	興戸古墳群	古墳	田辺町	引原茂治	1/8～1/12	(測量)
38	棕ノ木遺跡	散布地	精華町	伊賀高弘	11/20～2/28	弥生時代～中世の集落跡。
39	柿添遺跡	散布地	精華町	有井広幸	8/21～11/29	古墳時代前期の溝・土坑。
40	弓田遺跡	集落跡	木津町	橋本 稔	4/18～11/22	古墳時代後期の溝。埴輪片。奈良時代の井戸。
41	釜ヶ谷遺跡	散布地	木津町	有井広幸	4/17～8/21	奈良時代の溝。人形・土馬・カマド。
42	長岡京跡(L361)	都城跡	京都市	中川和哉 森島康雄	4/10～3/8	弥生～古墳時代の水田・溝・方形周溝墓。長岡京期の掘立柱建物跡・柵列・井戸・東三坊大路・二条条間北小路。中世の耕作関連の溝。
43	長岡京跡(L362)	都城跡	京都市	戸原和人 野島 永 (岸岡貴英)		
44	長岡京跡(L363)	都城跡	京都市	竹井治雄 岩松 保		

された。主体部は12基の木棺墓と1基の甕棺墓からなり、ガラス小玉・鉄鏃・鉈などの副葬品を伴う。香具山城遺跡・東土川遺跡・神足遺跡・幸水遺跡では弥生中期を中心とする時期の方形周溝墓が検出されている。このうち、東土川遺跡では、一辺の周溝を重ね合わせるように、各々切り合い関係をもって順次営まれた、5基の方形周溝墓が検出された。

生産遺跡としては、玉作り遺跡と水田跡に関する調査データが蓄積された。弥栄町奈具岡遺跡では、水晶製の玉作り工房に関係する遺構・遺物が豊富に見いだされ、注目を集めた。同遺跡では鉄片も多量に出土しており、弥生中期に属する大規模な生産遺跡の一部を掘り当てたものと推察される。水田跡の顕著な検出例としては、先にもふれた東土川遺跡がある。溝・大畦畔に画された水田域から150枚以上もの小区画水田が検出された。水田の平均面積は10.4㎡、弥生中期。弥栄町奈具谷遺跡では、谷水田の畦畔に伴うものと思われる弥生中期の縦横に整然と並ぶ杭列が検出された。

古墳時代

前期古墳の調査では、山城町椿井大塚山古墳の墳丘調査が特筆される。今年度は、後円部の後方にトレンチが設定され、いくつかの新知見が得られた。後円部後方をめぐる空濠部に設定されたトレンチでは、葺石を伴う墳丘斜面が新規に見つかり、この部分では3段に築成されていることが判明した。古墳本来のモデルプランについては諸説あり確定を見ていないが、少なくとも後円部の後方では、岡山大学による発掘調査で確認された葺石の基底より外側まで施工されていることが確かめられた。また、今回墳丘の断ち割り調査が行われ、後円部墳丘の大半が盛土工法によっていることが判明した。このほか、京都市黄金塚2号墳では、後円部をめぐる埴輪列が良好な状態で検出された。約110本の埴輪が延長約70mにわたって立て並べられた状態で見いだされた。全長約120m、後円部径約66mの規模で、築造年代は4世紀末から5世紀初頭頃のものとして判明した。

中期古墳関係では、弥栄町奈具岡北1号墳、園部町岸ヶ前2号墳、八幡市大芝古墳の調査が行われ、それぞれ貴重なデータが得られた。奈具岡北1号墳は、全長約60mの前方後円墳で、木棺直葬の主体部の内外から、銅釦・鉄剣・鉄鏃・鉄矛・石突・陶質土器・初期須恵器などの豊富な遺物が見いだされた。朝鮮半島との直接的な交流を窺わせる。築造年代は5世紀前半に求められる。岸ヶ前2号墳は、28.5m×18～19m程度の楕円形の現状を呈する古墳で、埴輪・葺石を伴う。主体部は、木棺直葬4基で、衝角付冑・短甲・鉄刀・鉄剣・玉類・埴輪などが出土した。古墳中期の園部盆地に成立した首長墓の一樣相をしめす好資料といえよう。大芝古墳は、南山城地域有数の前期古墳の一つである西車塚古墳の南方、東車塚古墳の西方で新規に確認された古墳である。L字状の周濠の一部が検出されたもので、一辺15～20mの方墳の隅部に相当するものと思われる。出土した埴輪・須恵器の型式から、5世紀後半に属すると推定され、東・西車塚古墳築造後の状況を知る貴重な資料が得られた。

後期古墳関係では、久美浜町南谷古墳群、福知山市牧正一古墳、長岡京市走田古墳群等を対象とする調査があった。南谷古墳群は、円墳8基で構成される古墳群で、内部主体は木棺直葬、群形成は6世紀前葉頃であることが明らかとなった。牧正一古墳は、福知山盆地最後の前方後円墳として広く知られている。今回発掘調査され、3基の横穴式石室を築いていることが明らかとなった。走田古墳群では、横穴式石室2基の調査が行われ、凝灰岩製組合式家形石棺、須恵質四注式陶棺などが出土した。7世紀初頭頃の築造と推定される。

生産遺跡関係では、木津町弓田遺跡で埴輪・土師器・須恵器の良好な資料が大量に検出され、生産遺跡の一画に相当すると評価される。幅6m、深さ1.5mの溝状遺構の内部から、完形品または完形近く復元できる埴輪・土器類がまとまって出土した。埴輪には、円筒のほか朝顔・蓋・盾・家・人物・馬などの形象埴輪が含まれる。川西編年Ⅴ期の埴輪窯が至近距離に存在したものと推察される。

歴史時代

都城跡、寺院跡、集落跡、生産遺跡、城郭跡などの調査が行われた。

加茂町恭仁宮跡では、宮の西限の確定を主たる目的とする調査が行われ、東西方向に走る大規模な素掘り溝が検出された。宮内中心部から西方へ導水する排水施設の一部とみられている。京都市長岡京跡左京第361・362・363次調査は、単年度で14,400㎡を測る大規模なトレンチ調査が実施されたもので、左京域での宅地班給の実態を解明する貴重な資料が得られた。特筆されるのは、左京南一条三坊十三町の宅地は、一町単位で班給されていることが判明したことである。宅地内の掘立柱建物は、一町区画の北東四分の一の範囲に整然と配置されていること、東南部は空地となっていること、甕を据えつけた施設や井戸を伴うことなどの事実が明らかとなった。三位以上の地位にいた貴族の邸宅跡と推定された。

北山城有数の白鳳寺院址として名高い京都市北白川廃寺では、塔跡基壇の再調査が行われ、基壇の規模は一辺14mを測ること、南北二辺に自然石を用いた階段を設けていること、基壇の中央には心礎の抜き取り痕と思われる窪みがあることなどが確かめられた。基壇の化粧は、創建当初

は瓦積みで後に積石積みに改修されていることが明らかとなった。

集落遺跡関係では、舞鶴市浦入遺跡、亀岡市宮川遺跡、八幡市内里八丁遺跡の各遺跡の調査を紹介しておく。浦入遺跡では、舞鶴湾を眼下に望む丘陵腹部を造成して営まれた竪穴住居群が検出された。方形住居の一辺と床面の一部が残存するもので、床面に鍛冶炉を設けた住居も見いだされている。7～8世紀に属する。宮川遺跡では、13世紀頃に属する掘立柱建物、土坑等の遺構に伴い中国製天目茶碗を含む土器類が検出された。中世山岳寺院金輪寺の山麓に栄えた中世村落の一画に相当する。内里八丁遺跡では、8～9世紀頃の掘立柱建物、竪穴住居、井戸のほか12世紀頃の掘立柱建物、井戸などが見つかっている。

生産遺跡としては、舞鶴市浦入遺跡の調査が特筆される。海拔数メートルの海辺に面する緩斜面から焼土面、支脚据え付け痕などの遺構に伴い大量の製塩土器片が検出された。

中世城郭跡の調査では、舞鶴市大俣城跡、綾部市嶋間城跡の調査でまとまった成果が得られた。大俣城跡では、城跡の中心部の全面調査が行われ、主郭とそれを取り囲むように配置された帯郭・虎口・竪堀・横堀・掘立柱建物などの遺構が確認され、小規模ながら中世末期(16世紀後半)の山城の全容を窺える好例として注目された。嶋間城も戦国末期に属する比較的小規模な山城で南北に並ぶ2つの郭を中心に縄張りされている。このうち、曲輪Ⅱと呼ばれている北側の一段低い曲輪の調査が行われ、掘立柱建物・柵列・土坑などの遺構に伴い16～17世紀に属する土器・陶磁器などが検出された。

近世城郭跡の調査例として、園部町園部城跡の調査がある。古絵図によると、中堀(南蓮池)と推定される地点においてトレンチ調査が行われ、堀の北肩と底面が確認された。埋土からは、中国製陶磁器・国産陶磁器・瓦などの18～19世紀に属する遺物が出土した。

(おくむら・せいいちろう＝当センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長)

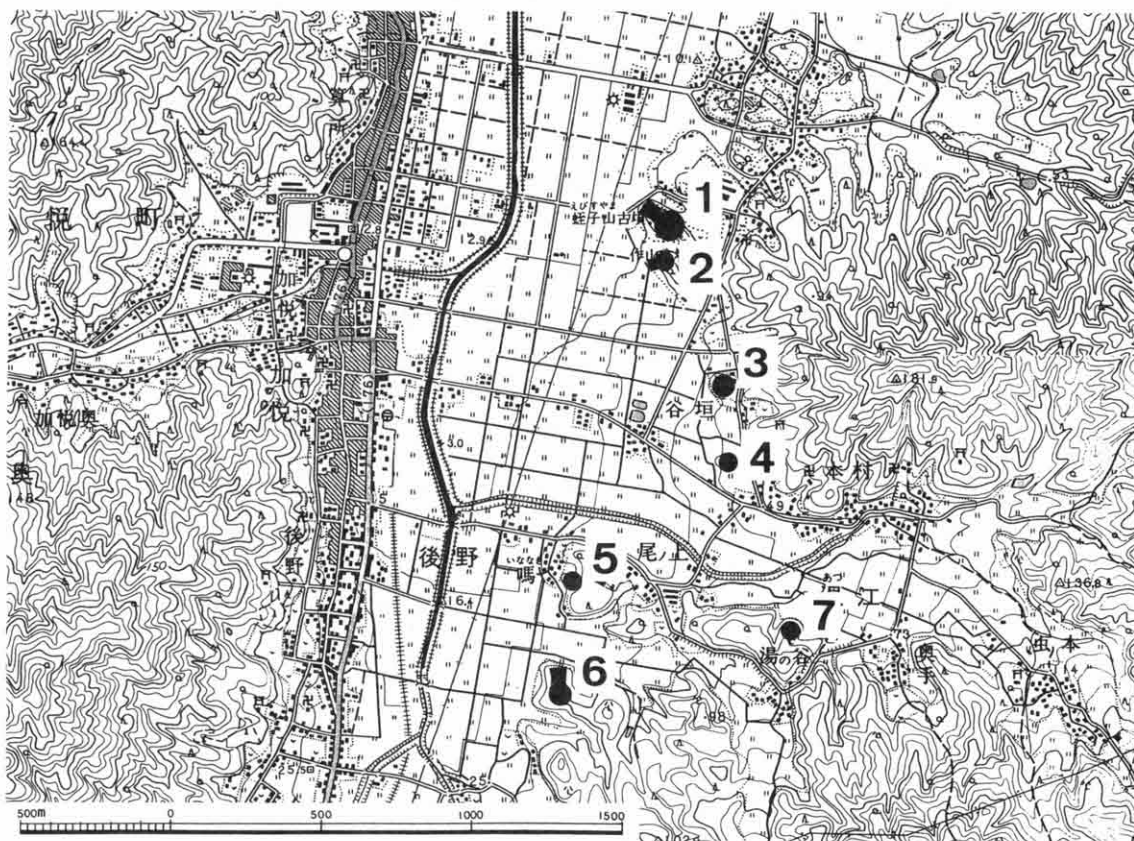
丹後蛭子山古墳の測量図を読む

奥村清一郎

1. はじめに

京都府の北部、丹後半島を中心とする地域に、網野銚子山古墳、神明山古墳、蛭子山古墳(蛭子山1号墳)の丹後3大古墳と称されている傑出した前方後円墳が存在する。このうち、網野銚子山古墳と神明山古墳は、全長200m前後を測る大王墓級の巨大古墳で、日本海沿岸諸地域を見わたしても、最大規模を誇っている。

この丹後3大古墳については、多くの研究者に周知されているが、その意味するところについては、未だ十分に解明されていない。私も以前からこの点に興味を寄せ、神明山古墳^(注1)と網野銚子山古墳^(注2)の墳形をとり上げて、モデルプランの移動・共有現象を通して地域政権の性格の一端を明らかにしてみたことがある。小稿は、これら前2稿の続編ともいべきもので、残る1基となっ



第1図 加悦谷の主要古墳

- | | | | | |
|-----------|-----------|-----------|-----------|----------|
| 1. 蛭子山1号墳 | 2. 作山1号墳 | 3. 温江丸山古墳 | 4. 温江大塚古墳 | 5. 七面山古墳 |
| 6. 白米山古墳 | 7. 鳴谷東1号墳 | | | |

た蛭子山古墳をとり上げ、古墳本来の姿を確定した上で、モデルプランとその系統を比較研究しようとするものである。

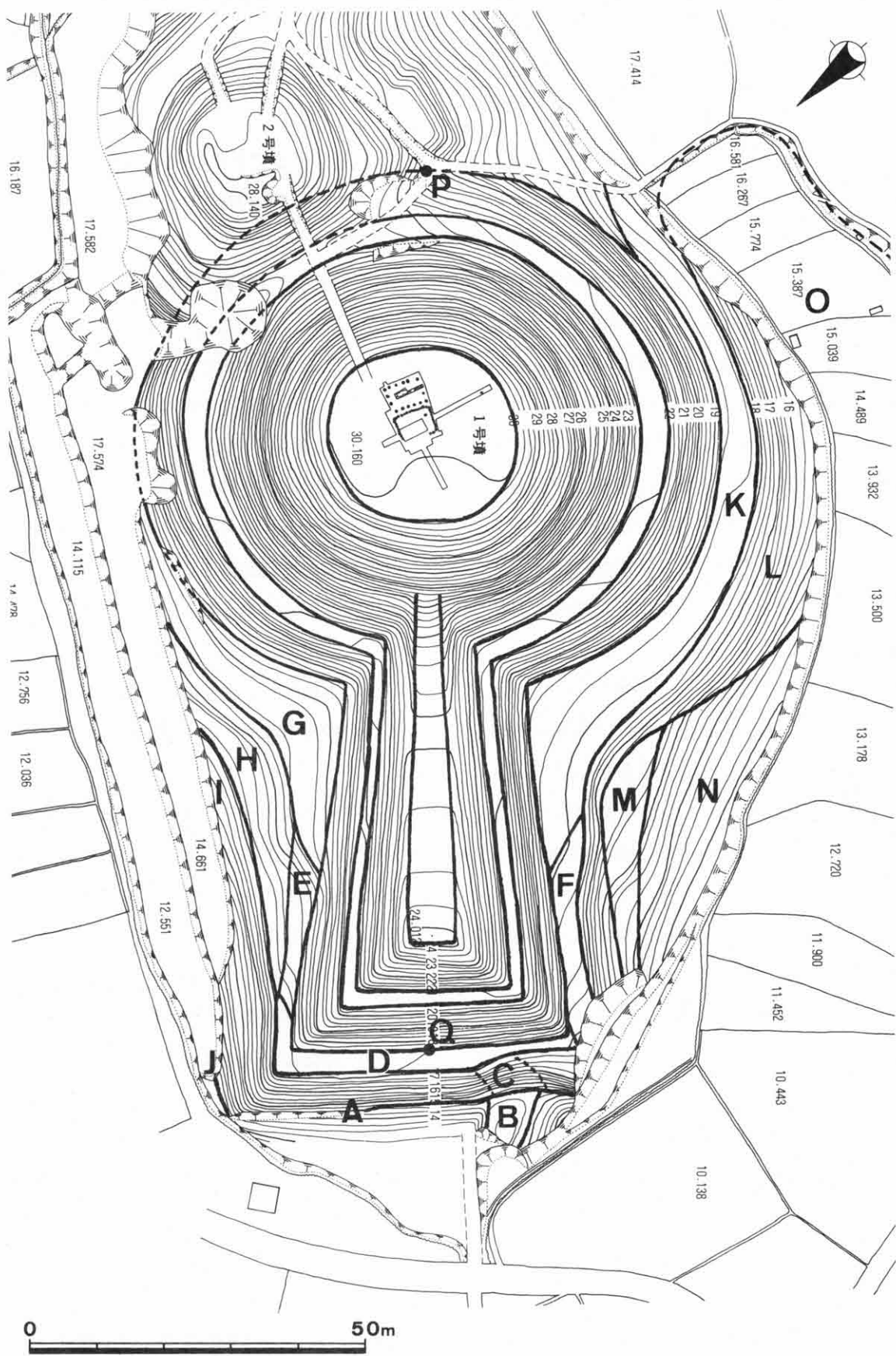
2. 周辺地形の分析

古墳およびその周辺地形は、今さというまでもなく、古墳時代までさかのぼる土木工事の跡、つまり遺構である。ただし、その土木工事の全容を解明するには、その後の土地利用が軽微であること、および精度の高い測量がなされていることが前提条件となる。

第2図は、加悦町教育委員会が作成された蛭子山古墳の測量図^(注3)に、傾斜変換線を書き込んだものである。まず手始めに前方部前面の地形をみてみることにする。A線は、標高14.75m等高線付近を、古墳の主軸と直交する方向に走る傾斜変換線である。北東側は崖によって失われているが、直線的に進んだ後、大きく折れ曲がり、J線と接続するものと推定復原できる。南西側では、陸橋部状地形Bの上面と接続し、やや屈曲しながら南西方向に進み、やがて崖面に吸収される。陸橋部状地形Bは、A線以下の斜面の整形を行った際に、人為的に削り残してでき上がった地形とみられ、古墳に至る道の一部残存状況をしめすものと考えられる。Bの南東方向では、A線およびその上方の等高線は、連続的に湾入している。この等高線の連続的湾入部Cは、陸橋部状地形Bの整形と一連の工事で削り込まれた可能性が高いと推察される。おそらく陸橋部状地形Bと平坦面Dとを結ぶ、斜面を斜めに上る道の跡と考えられる。平坦面Dは、前方部の前面に設けられた幅約3mを測る整った平坦面である。北東部では、ほぼ直角に折れ曲がり、スロープ状遺構Eと接続する。一方、南西部は、等高線の連続的湾入部との接続のため、幅を減少し、前方部の左隅部でスロープ状遺構Fと接続している。

つぎに古墳の右側面の状況を検討してみる。平坦面Dと接続するスロープ状遺構Eは、前方部の右側面の前半部、延長約20m間の側面に設けられた斜面で、その間の高低差約1.5mを測る通路状遺構である。このスロープ状遺構の上端は、くびれ部付近に設けられたテラス状遺構Gと接続している。このテラス状遺構Gは、詳細に観察すると幅も一定していないし、平坦面をなさず、北方に下がるゆるやかな斜面をなしていることがわかる。こうしてみると、古墳の右側面に展開する、D—E—Gの3面は、一見したところ墳丘をめぐる一つの連続する平坦面のようにも見えるが、詳細に観察すると、平面形、傾斜角、傾斜方向ともに異なる別個の3面であることがわかる。G・E面の下方には、幅約8m、高低差約1.5mを測る緩斜面Hがめぐり、さらにその下方には、比較的急傾斜の斜面Iがめぐり、斜面Iの下端はJ線であるが、残存部は極めて少なく、本来の動向を類推するのは極めてむづかしい。

左側面の場合、前方部の中央部から左隅部にかけて残存長約30m、幅3m前後を測るスロープ状遺構Fが設けられ、くびれ部から後円部左側面にかけては、テラス状遺構Kがめぐり、細かくみると、スロープ状遺構Fと平坦面Dとの接続の仕方が右隅部とは異なり、D面は左隅部で終熄し、スロープ状遺構Fの側面にとりつく。スロープ状遺構Fの西端は削平を受けていて確証はないが、C地点の南西部での等高線の張り出し具合などからみて、このスロープ状遺構Fは、D



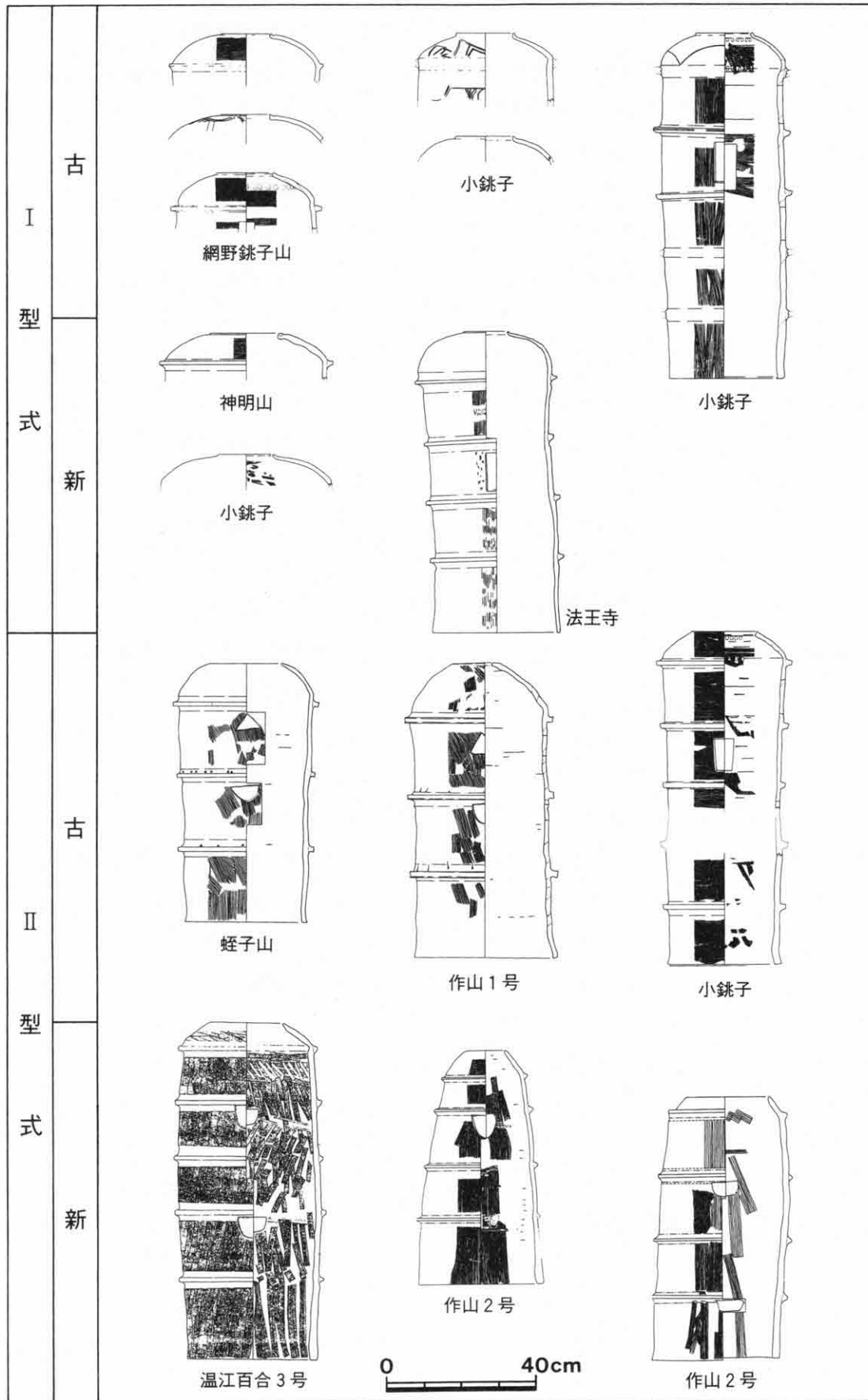
第2図 蛭子山古墳周辺の地形分類

面と接続した後もさらに西方へ延び、稜上を下がる道状をなしていたものと推測される。テラス状遺構Kは、後円部の側面で幅5m前後、くびれ部付近で幅約14mを測り、一定の幅で墳丘の外周をめぐるわけではなく、傾斜方向もG面と同様墳丘から外方へ向かってゆるやかに下がる斜面となっている。後円部の左側面から後方へ回りこんだところで輪郭は不明瞭となる。この部分についても崖面によって削られていて確証はないが、工事の省略というよりむしろ、古墳に通じる道の一部残存状況をしめすものと考えられる。こうしてみると、D—F—Kとつづく3面は、右側面のD—E—G面と同様、幅員、傾斜角、傾斜方向ともに異なる別個の3面であることがわかる。

K・F面の南西側には、L・M・Nの3つの斜面が展開し、さらにその南方には谷状地形Oが存在する。斜面Lは前方後円形を呈する斜面である。3段築成の古墳とみた場合の第1段目の墳丘斜面に相当するが、検討は後にゆずる。斜面Mは、E面・F面と類似のスロープ状を呈する緩斜面である。細かく観察すると3面の平坦面と斜面に分類され、傾斜方向はF面とほぼ同じである。道か。L・N面の下端は山林と水田との境の崖となっていて旧状は失われている。谷状地形Oも、谷水田となっていて、谷状地形OとL・N面との接続の仕方についても明らかでない。ただし、墳丘に盛りつける土砂を、直近高位の適所から運搬したと仮定するなら、このO点付近は、墳丘盛土の土取り場の跡である可能性が高い。また、そう見た場合、第2図に破線でしめしたとおり谷状地形Oの上端は、L面の上端と連続するものと推定復原できる。

以上に述べた地形分類案にもとづき、蛭子山古墳の墳形を復原してみる。従来の通説では、後円部・前方部ともに3段築成の古墳とされてきた。この通説にしたがえば、G—E—D—F—Kの一見連続している5面の平坦面・緩斜面が第1段目の段築平坦面ということになる。しかし、これらの5面は、上述のとおり、幅、傾斜方向、傾斜角ともに異なっており、同一面を指向した一連のテラスとは認め難い。L面についても前方後円形にめぐっているが、細かくみると斜面の幅と傾斜角が各部で異なっており、墳丘の斜面とみるにはかなり無理があるように思われる。前方部の前面についても、B—Cを経由してD面に至る道の存在を想定した場合、D面とA線との間の斜面についても墳丘外の造作によるものとみることができる。

以上の検討の結果、蛭子山古墳の墳丘は、P点とQ点とを結ぶ線の中軸線とする、2段築成の前方後円墳として設計・築造されたものであることが明らかとなった。上記のとおり、地形分類の上AからOまでのアルファベットを付して略述した各部の地形は、いずれも古墳時代までさかのぼりうる地形であることは間違いない。これはむしろ一般的な古墳のあり方であって、墳丘基底が直ちに旧地形、旧地表と接していて、墳丘の外周部に一切人工の跡がない古墳は、存在し得ないと考えられる。J—A線およびL面の動向などは、くずれてはいるものの、前方後円墳状を呈している。しかし、先にも検討したとおり、これらの地形は、いずれも平野部からの古墳本体の外観を整えるとともに墳丘盛土を採掘した、古墳外周部の造作工事の跡、いわゆる基壇あるいはエプロンなどと称されている遺構とみるのが妥当と考える。このほか、D・E・F・M面およびK面の南東端部については、工事用道路を兼ねた連絡通路として、B・C面については、連絡



第3図 壺形埴輪の編年

通路あるいは古墳完成後の参道として、○については墳丘築成用の土砂採掘地として、それぞれ整備・選定されたものと考えられる。

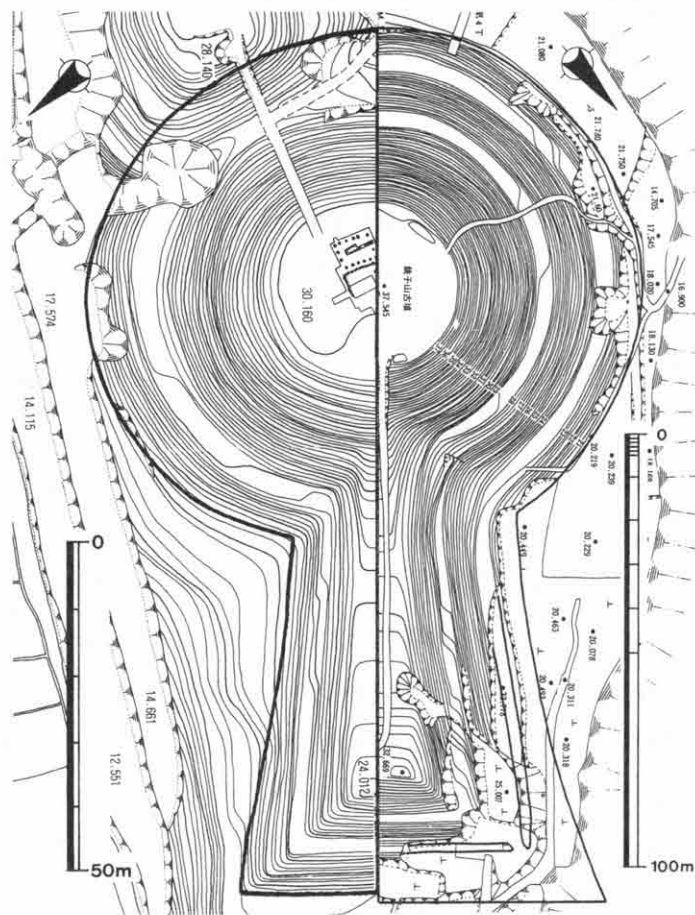
古墳の平面規模は、全長130m、後円部径78m(主軸方向)×86.5m(主軸に直交する方向)、前方部長(全長から後円部短径を差し引いたもの)52m、くびれ部幅26.4m、前方部幅42m、後円部頂部平坦面径26m(主軸方向)×28m(主軸に直交する方向)を測る。高さは、後円部が11.5m、前方部が7mあり、墳頂部の高低差は約6mを測る。

3. 網野銚子山古墳との比較検討

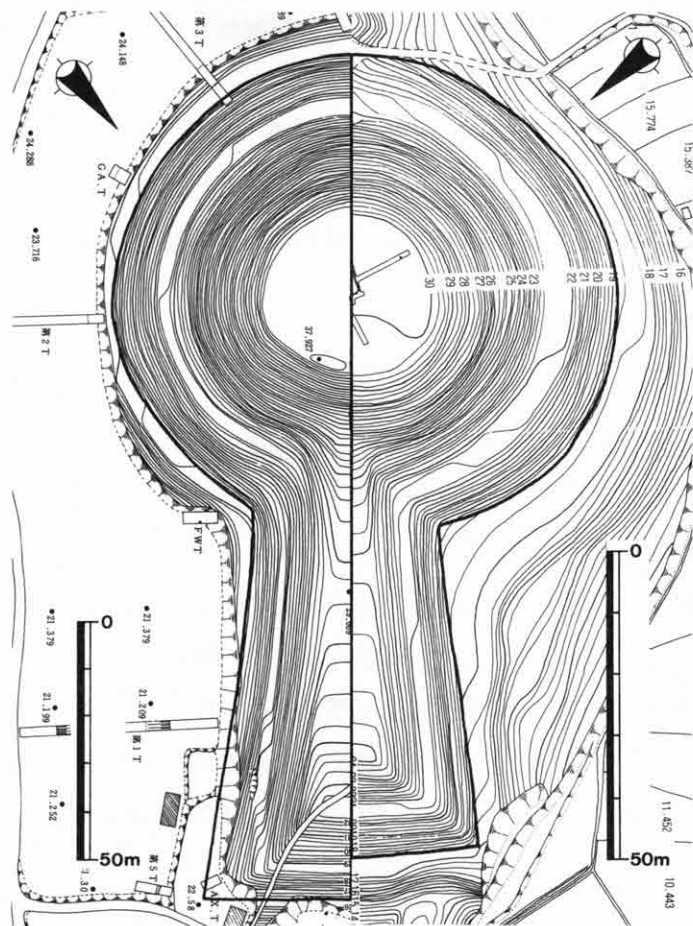
私はかつて網野銚子山古墳の墳丘の築造規格について検討を加え、墳丘基底の平面形については西殿塚古墳と、墳頂部の形状については箸墓古墳との類似性をそれぞれ指摘し、「(前略)網野銚子山古墳は、丹後地域に出現した初代の王墓であるとともに、最古の畿内系古墳である(後略)」と評価したことがある。その際、丹後地域の主要古墳に散見する壺形埴輪の編年についても少しふれ、「(前略)口縁部の整形の簡略化および段数の省略化の流れからみて、網野銚子山古墳出土品→小銚子塚・法王寺・神明山古墳出土品→蛭子山1号・作山1号墳出土品→作山2号墳出土品の順に変遷した(後略)」と述べた。この考えを図示したのが第3図で、口縁端部が短頸壺形を呈するものをⅠ型式、無頸壺形を呈するものをⅡ型式とし、それぞれ古相・新相に分類してみた。

詳細については別稿にゆずり、上記の年代観を再検証する意味においても、壺形埴輪を共有する蛭子山古墳・網野銚子山古墳両者の墳丘を比較検討してみることにする。

さきに墳形を確定した蛭子山古墳の後円部径(主軸方向)を100とした場合の前方部各部の比率(指数)は、前方部長66.7、前方部幅53.8、くびれ部幅33.8という値をしめしている。これに対し、網野銚子山古墳の前方部各部の指数は、前方部長が68.1、前方部幅が87.4、くびれ部幅が52.9という値になっている。前方部長指数については、網野銚子山古墳が1.4ポイント大きいのみで、ほぼ等しいとみてよい。前方部幅指数は、網野銚子山古墳の87.4に対して蛭子



第4図 蛭子山古墳(左)と網野銚子山古墳(右)



第5図 蛭子山古墳(右)と網野鉾子山古墳(左)

上の上段墳丘と蛭子山古墳とを比較してみることとする。網野鉾子山古墳の上段墳丘の規模は、全長176m、後円部径97m、前方部幅64m、くびれ部幅42mを測り、後円部径を100とした場合の前方部各部の指数は、前方部長81.4、前方部幅66、くびれ部幅43.3である。前方部長にして14.7ポイント、前方部幅で12.2ポイント、くびれ部幅で9.5ポイントそれぞれ網野鉾子山古墳の方が大きい値を示している。第5図は、網野鉾子山古墳の上段墳丘と蛭子山古墳の墳丘基底を比較検討するため、両者の測量図を縮尺調整して半断面図を突合したものである。前方部前端線が若干のくい違いをみせてはいるものの、幅のとり方や側縁から隅部にかけての角度設定の仕方など、全体として見た場合の相似度はかなり高いことがうかがえる。

つぎに、墳頂部の形状について比較してみよう。私はかつて網野鉾子山古墳の墳形を検討した際、墳頂部の仕上げ方の特徴として、次の2点を指摘した。まず第1に、後円部をめぐる等高線は、墳頂部近くでは正円形にめぐるが、標高33.25m等高線以下標高29.75m等高線までの等高線が、前方部側にコの字状に張り出している点を挙げる。この等高線の突出部は、後円部頂と前方部頂とをつなぐスロープ状遺構に伴うもので、前方部が未発達な段階の前方後円墳に認められる徴候であるが、網野鉾子山古墳の場合、後円部径と墳丘主軸線との交点—私のいう後円部と前方部との境目—よりも前方部寄りの位置まで極端に突出させるのが特徴である。

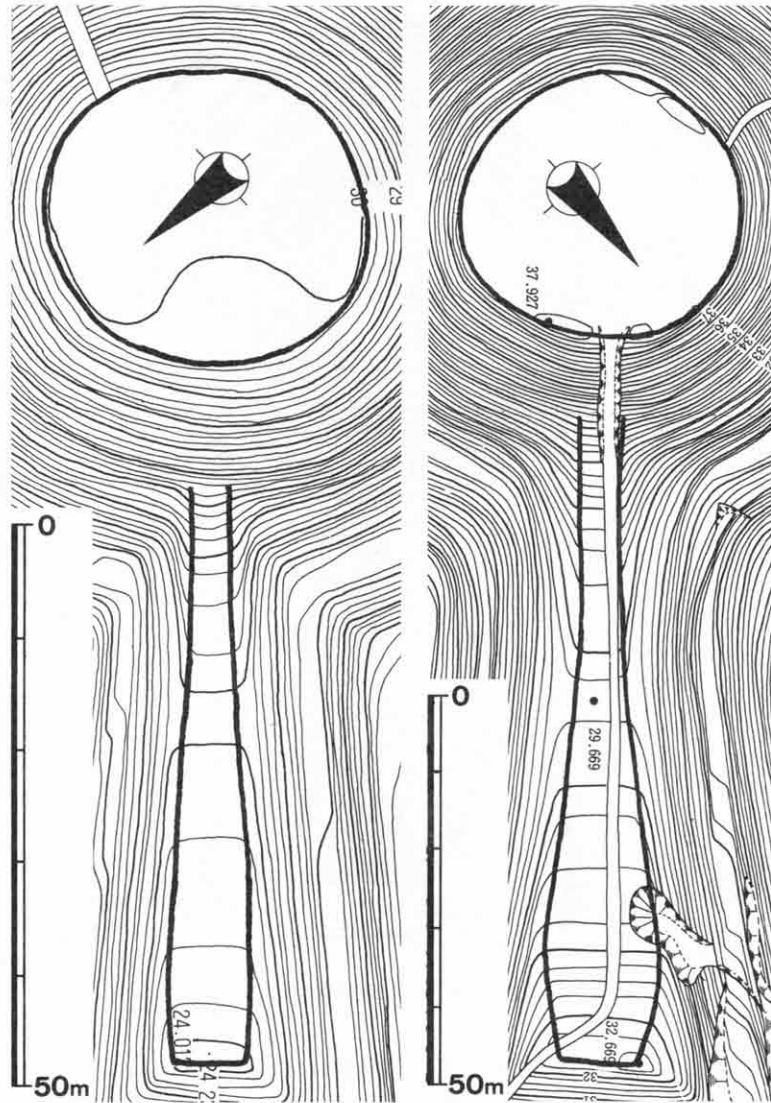
第2に、墳頂部に純然たる平坦面を形作るのは、後円部頂のみで、前方部には頂部平坦面、方

山古墳53.8で、33.6ポイント差で網野鉾子山古墳が幅広となっている。くびれ部幅指数についても、19.1ポイント差で網野鉾子山古墳の方が太くくびれている。第4図は両者の後円部径を縮尺調整して同大にした実測図を半截して突合したものである。前方部前端線および前方部前面の段築平坦面の位置などがうまく重なる反面、前方部の幅のとり方に明確な開きが生じていることがわかる。

ところで網野鉾子山古墳は、基底部は西殿塚タイプのバチ形の前方部だが、2段目以上の墳丘は、等高線を見捨ててまで柄鏡形の細長い前方部に仕上げている。つまり、バチ形と柄鏡形の二つのタイプの前方部が同じ墳丘に同居しているのである。そこで、網野鉾子山古墳の2段目以上

形壇等の施設を設けない点を指摘しうる。つまり、前方部頂には主軸と直交する方向に走る一本の稜線があり、この稜線と後円部の頂部平坦面との間は、中間点付近に鞍部を設けた細長いスロープ状に仕上げている。同様な墳頂部の起伏を見せる古墳の例として、箸墓古墳を挙げ、箸墓古墳と同様の側面観に仕上げ、しかも築成に要する土量の削減をねらって墳頂部の幅を狭小化したのではないかと推論した。

この推論の当否はともかくとして、網野鉾子山古墳の墳頂部に関して指摘した二つの特徴は、蛭子山古墳にも当てはめることができる。後円部をめぐる等高線のうち、標高25.25m等高線以下標高23m等高線までの等高線を連続的に

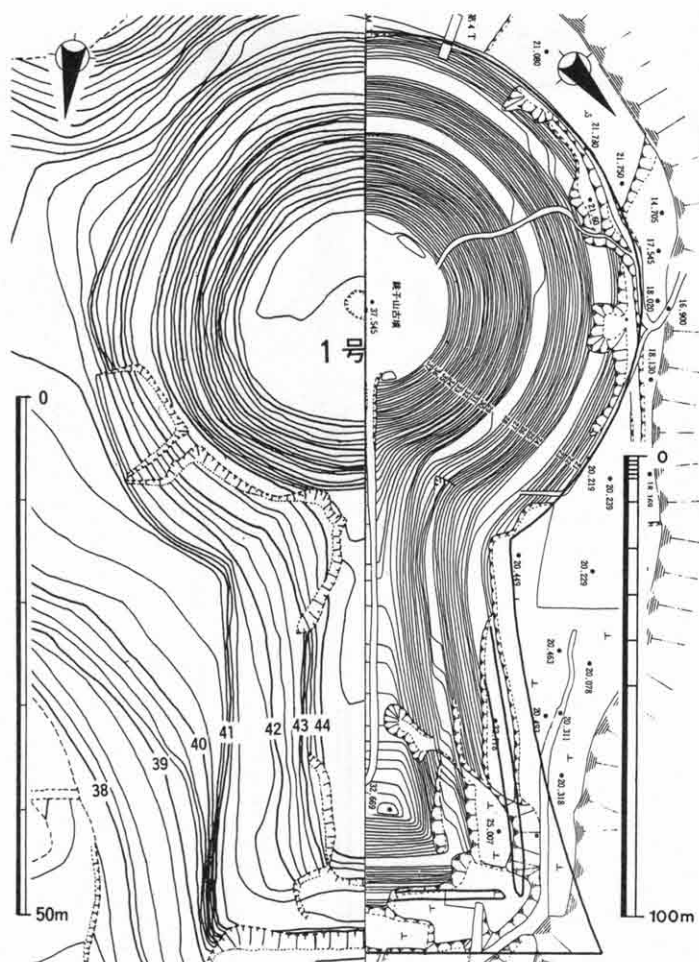


第6図 蛭子山古墳(左)と網野鉾子山古墳(右)の墳頂部

に突出させる点や、前方部の頂部には、主軸と直交する方向に走る短かい稜があるのみで、その稜と後円部頂とをつなぐなだらかな細長いスロープを形成している点、そのスロープの鞍部は、墳丘主軸と後円部径との交点(前方部の起点)より前方部寄りの位置にある点などの諸特徴は、いずれも網野鉾子山古墳と共通している。

第6図は、上記の検討を図示するため、蛭子山古墳と網野鉾子山古墳の実測図から墳頂部付近のみを抽出し、稜線を太線で強調したものである。後円部頂部平坦面の広さや、前方部頂部の外郭線の平面形など、細かな部分での相異点は認められるものの、全体の起伏の状況など相似度は極めて高いと考えられる。

以上にみてきたように、蛭子山古墳の墳丘は、網野鉾子山古墳の墳丘基底、上段墳丘の基底、墳頂部の起伏の各部分との間において、決定的とはいえないまでも、ある程度の類似性を認めることができた。すなわち、蛭子山古墳の墳丘は、網野鉾子山古墳をモデルプランとし、これを約3分の2に縮小したものを基本に段数を減らすとともに前方部の幅を狭小化してできあがったも



第7図 白米山古墳(左)と網野鉾子山古墳(右)

のか、または網野鉾子山古墳の上段墳丘2段分をとり出してモデルプランとし、これを約80%(後円部)に縮小したものである可能性が高いと考えられる。

4. おわりに

古墳時代の丹後地域に成立した地域政権を、広域首長権と在地首長権の上下2階層に大別して整理する考えを提示してみたい。

より上位にランクされる広域首長権は、網野鉾子山古墳をもって成立する。丹後では最古にして最大の前方後円墳で、完成された畿内の前期型大王墓にみられる諸要素を完備した姿で福田川の河口部に出現する。流域面積が狭小で経済的基盤の脆弱な、したがって前代からつづく大集落や首長墓系譜

の存在しない、いわば空白地に突発的に出現するのは、北の海を目ざした大和政権の意思を体现する、外来系の首長権であったことを物語るのであろう。既存の政治経済的基盤に立却しない立地条件は、被葬者が既存の地域政権を超越した存在であったことを意味するものと考えられる。

網野鉾子山古墳の後に広域首長権を継承したのは神明山古墳である。河川流域は異なるが、海路によって結ばれた一墳墓地を移動させた一縦系列の首長墓系譜が想定される。日本海に直面していること、可耕地が狭いこと、前代の首長墓がないことなどは、網野鉾子山古墳と共通している。神明山古墳の後、広域首長権を継承したのは黒部鉾子山古墳である。前代に比べて著しく規模を縮小している。これは、より下位にランクされる在地首長権の伸張現象と表裏一体をなすもので、広域首長権そのものが変質・弱体化を余儀なくされたものと推察される。この三代目の黒部鉾子山古墳をもって広域首長権は終熄する。

一方、広域首長の傘下にあって、小地域を掌握していたのが在地首長層である。弥生時代以来の農業生産性を基盤に成長を遂げた、いわば地元生え抜きの首長権である。方形台状墓、方形貼石墓などの方形墓を築きつづけていた階層で、古墳前期後半期に至って、川上谷川、竹野川、野田川の各流域の小地域において前方後円墳の築造を開始する。それらの前方後円墳は、網野鉾子山古墳との政治的諸関係を背景に営まれたもので、墳形・段築・埴輪・葺石・内部構造・棺・副

葬品などの畿内型前期古墳を構成する諸要素の一部を導入するものが多い。さきに検討した蛭子山古墳は、加悦谷に成立した在地首長の墓と評価される。従来加悦谷最古の前方後円墳といわれてきた白米山古墳の墳丘^(注7)について、今回再検討した結果、第7図に示めたとおり、網野銚子山古墳との相似度は極めて高いことが判明した。築造年代についても、蛭子山古墳と同時期またはやや遅れて成立したものと推察されよう。

以上に略述したとおり、丹後の古墳のあり方は、重層する上下2階層の首長権が同時併存する支配構造の存在を表すものと考えた。ひとくちに丹後3大古墳といっても、網野銚子山・神明山両古墳と蛭子山古墳とは質的に異なる2者であると考え、両者を併列関係ではなく上下関係に位置づけてみる視点を提案してみた。なお、網野銚子山古墳を原点とする、前方後円墳の系統や各首長墓の編年観等、詳細については稿を改めることとしたい。

末筆ながら、蛭子山古墳の精密な測量を実施された佐藤晃一氏に敬意を表するとともに、日頃の御教示に対し、厚くお礼申し上げる次第である。

(おくむら・せいいちろう＝当センター調査第2課課長補佐兼調査第3係長)

注1 奥村清一郎「丹後半島の大型前方後円墳―その築造原理を探る―」(『京都府埋蔵文化財論集』2

(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 平成3年

注2 奥村清一郎「網野銚子山古墳を考える」(『京都考古』78 京都考古刊行会) 平成7年

注3 佐藤晃一「蛭子山古墳発掘調査概要」(『加悦町文化財調査概要』4 加悦町教育委員会) 昭和60年

注4 この形は、朝顔形埴輪の分割成形の過程で成立したものと考えられる。円筒形を呈していないのは明らかであり、丹後型円筒埴輪と呼ぶのは不適切である。

注5 注2文献10ページ。

注6 図中の埴輪実測図は、下記の文献から転載した。

三浦 到・林 和廣「銚子山古墳・小銚子古墳発掘調査概要」(『京都府網野町文化財調査報告』5 網野町教育委員会) 昭和62年

佐藤晃一・辻川哲朗「加悦町のはにわ―丹後地域におけるはにわの成立と展開―」(『加悦町古墳公園はにわ資料館研究報告』1 加悦町古墳公園はにわ資料館) 平成5年

注7 佐藤晃一「国指定史跡蛭子山古墳Ⅱ発掘調査概要報告」(『加悦町文化財調査概要』8 加悦町教育委員会) 平成元年

中世土器の編年(下)

伊野近富

1. はじめに

今回は、京都府南部(山城)の編年を提示したい。この地域については、平安京を擁しており、その資料を中心に研究が行なわれている。筆者も1980年の内膳町報告^(注1)や「かわらけ考」^(注2)をはじめとして、いくつかの論考を発表した。

さて、本稿ではあまり研究発表がされていない平安京以外の山城地域について、資料提示をすることとしたい。

2. 研究史

山城の地は次の5つに分けることができる。1・2は北山城の西部と東部である。3は乙訓地域、4は宇治地域、5は木津地域である。

1・2はいわゆる洛中の近隣であり、かつ、洛中に供給された土器は、北山城の洛外の地で生産されたものが多く、平安京～中世京都の編年を適用することができる。

乙訓地域 1985年に百瀬正恒は11世紀～15世紀の編年表を公表している。ここでは、乙訓特有の土師器皿に注目している。岩崎 誠は長岡京市勝龍寺城跡の資料を元に、中世後期までひろげた編年表を公表している^(注4)。また、山中 章は『向日市史』で向日市域における11世紀～14世紀の土器についておおまかな編年を試みている。1991年に『長岡京市史』では長岡京市域における中世の主要な遺跡の概説のなかで、資料提示を行なっている。1994年に小森俊寛は乙訓地域の概要をまとめた^(注5)。小森によると、「平安時代後半期から鎌倉時代の、皿を主体とする土師器の食器類は平安京形といえる形態を呈するものと、在地形と見られる、2種類に大きく区分できる」とした。これらは、基本的にはてづくねであり、なで仕上げの前段階に内面にはけ目調整が加えられているが、なで消されている。しかし、なで消されていない個体も多いと指摘している。平安京形は各時代を通じて一定量が出土するとした。在地形は12世紀から出土するもので、「口縁端部を外反気味あるいは尖り気味に処理した」もので、これは、「乙訓の南側に隣接する北摂の三島地域から出土する土師器の皿類に」形が近似している印象もあるが、「胎土などは異なるようである」とし、「この形式の土師器の皿類が在地産の主体的なものと理解」した。1994年に中井淳史は「畿内土器様相の中世的特質」^(注6)のなかで、この地域の土器について概観し、基本的な供膳具形態は、大小2法量の土師器皿Aと瓦器碗B・皿Aという構成であり、これは遅くとも12世紀後半には確立したとした。1995年に百瀬正恒は『概説 中世の土器・陶磁器』^(注7)のなかで11～16世紀

の編年を提示した。

宇治地域 宇治市教育委員会の調査によって資料が蓄積されつつある。まとめたものとしては、前述した中井によれば「京都地域との相違点として、器形が遅れて変化する点、椀形態における瓦器の比率が高く、土師器椀がわずかししか見られない点、量的には少ないが、皿形態の一角に瓦器皿が見出だせる点など」があげられるとした。百瀬によると「京都と南山城の土師器の手法・形態を歴史的にみると、土師器の流通圏が異なり、土器作りの集団も相互に関係を持っていないことがわかる」とした。

木津地域 この地は地理的にみても、歴史的にみても大和に強く影響された地域として捉えることができる。資料的にはあまりそろっていないが、中世後期の木津遺跡などは奈良市内の出土状況とほとんど変わらない。

3. 編年の基準資料

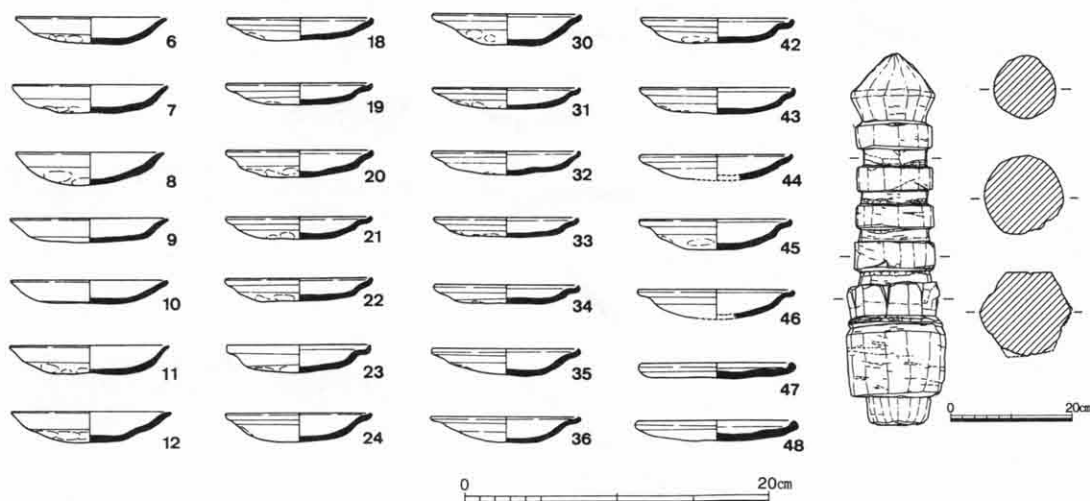
それでは、編年に必要な基準資料を提示したい。年代観は平安京の土師器皿編年を援用したものである。

(1) 西陣町遺跡^(注8)(長岡京市天神)

この遺跡は、長岡京右京五条三坊の地に相当する。ここでは平安時代の墳墓S X13002(方形のマウンドは南北2.6m、東西2.5mで、その周囲に0.9mの周溝がある。)が検出された。この南側の溝底に土師器皿40枚以上、西側の溝に凝灰岩製宝塔の一部、および銅製品(銅銭)が出土した。

土師器皿はAタイプの小皿(1~12)(口径9.4~10.6cm)と、Bタイプ(ての字状口縁)の小皿(37~46)(口径8.9~10.8cm)の小皿、およびCタイプ(いわゆるコースター型)の小皿(47・48)(口径9.8~10.1cm)の3種類が出土した。これらの皿はそのほとんどが正位置に置かれていた。凝灰岩製の宝塔の一部は、全長62cm、最大幅16.4cmで、相輪部と思われる。

土師器皿Aタイプは平安京出土のものとは相違し、一段なでであるが、BタイプやCタイプの



第1図 西陣町遺跡墳墓S X13002出土遺物実測図



第2図 平等院洲浜出土遺物実測図

形状からいえば、洛外原型に限りなく近く、11世紀中葉に相当する。

(2) 平等院^(注9) (宇治市宇治)

藤原頼通が建立した平等院は、平安時代後期を代表する建築物である。平成2年度から毎年発掘調査

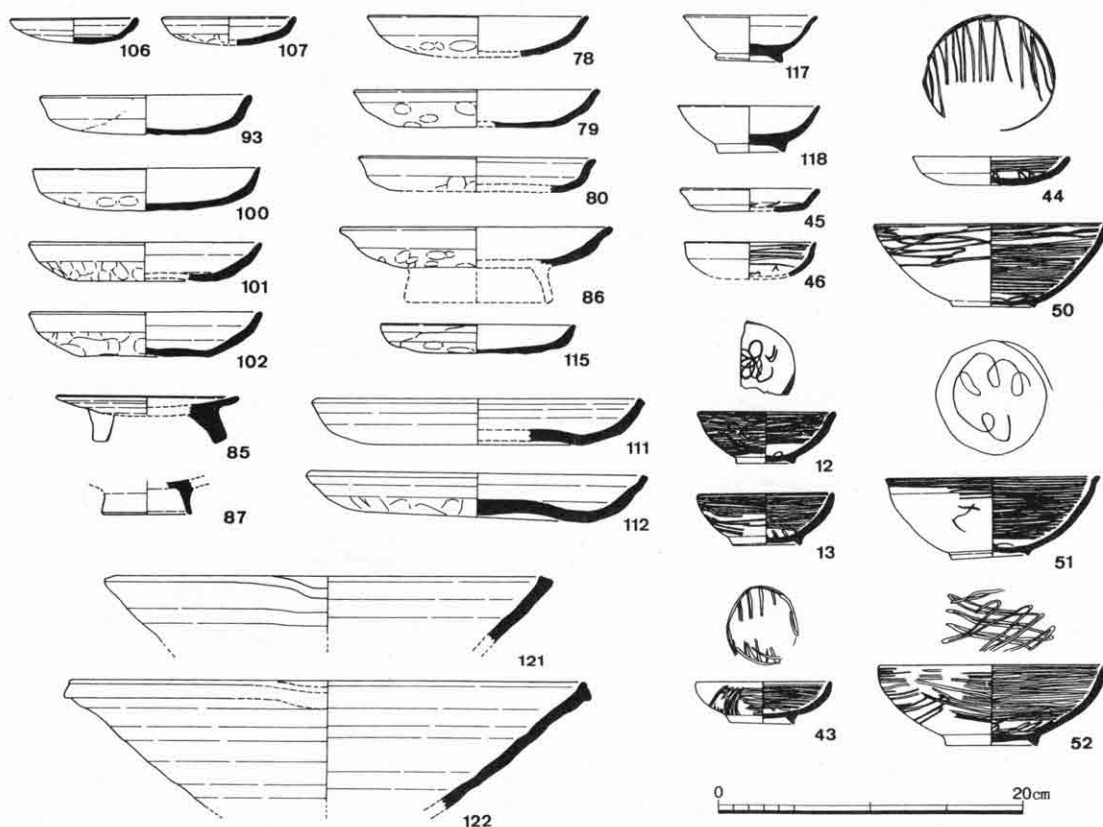
が行なわれており、徐々に平安時代の庭園の実像が明らかになっている。

今回は、平安時代の洲浜上で出土した土師器皿を紹介する。1は口径10.3cmのBタイプの皿である。口縁部に油煤の痕跡があり、これは通常このタイプにはないことである。2は口径15.6cmをはかるAタイプの大皿で、口縁部二段なでである。

(3) 長法寺本堂基壇^(注10) (長岡京市長法寺)

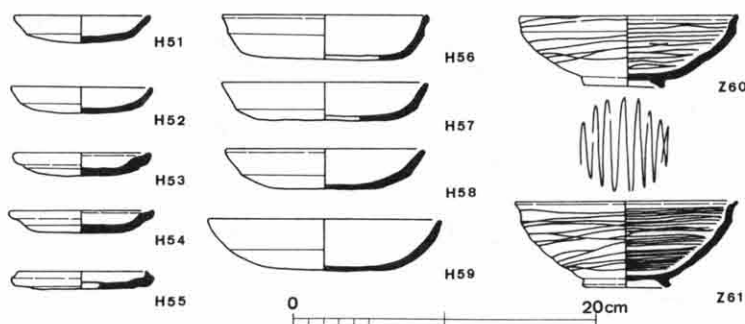
現長法寺本堂の地下遺構が3時期にわたって検出された。この中層では12世紀の遺物が大量に出土し、遺構の状況としては、基壇北半部を中心に焼土や炭層を検出した。

土師器皿は口径8~10cmの小皿と、口径13~16cmの大皿の2法量がある。ほとんどは口縁部が一段なで、洛外模倣型ではなく、在地産と思われる。115は口縁部二段なで、洛外模倣型Aタイプである。特殊な製品として三足の盤85や、口径22cmの超大皿111・112、及び高台付皿86・87などがある。灰釉系小碗117・118は、畿内での出土は珍しいものである。瓦器皿44・46は底部と口縁部との境が明確でないもの44、屈折が明確なもの45、口縁部を外反させるもの46の3種が



第3図 長法寺本堂基壇出土遺物実測図

ある。瓦器小碗は、大和型のもの12と楠葉型13と、浅手のもの43の3種がある。瓦器碗は大和型のもの51と楠葉型のもの52の2種がある。須恵器鉢は東播系のもので、森田稔分類では第2期第1段階から第2段階で、12世紀中葉～13世紀初頭に相当する。



第4図 宇治市街遺跡S K 200出土遺物実測図

(4) 宇治市街^(注11)S K 200(宇治市宇治)

宇治市街出土の土器は、土師器皿と瓦器碗である。土師器皿はAタイプ模倣51・52の小皿と、大皿56～59、Bタイプ53・54の小皿と、いわゆるコースター型のCタイプ55がある。Bタイプは11世紀末～12世紀初頭である。

瓦器碗は大和型の60・61がある。Aタイプは一段なでで外反させるものである。これは、川越編年のI-C～II-A段階に相当する。これらは、11世紀後半～12世紀前半に比定される。

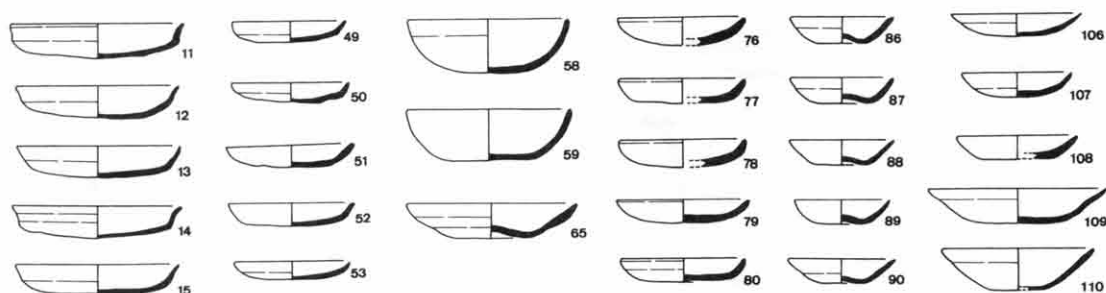
以上のことから、11世紀末～12世紀初頭頃を中心とした遺物と思われる。

(5) 長岡京跡右京第411次^(注12)S E 41110(長岡京市天神一丁目)

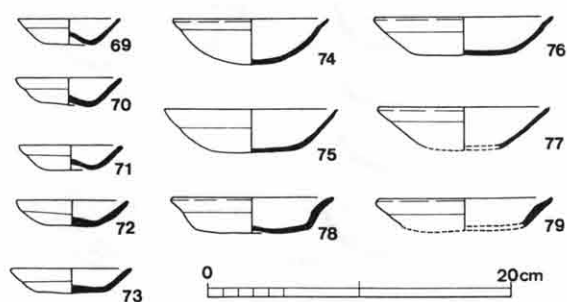
平安時代の墳墓遺跡である西陣町遺跡の東方約200mにある遺跡である。緩やかに北西から南東に広がる扇状地に位置する。ここで報告するS E 41110は直径約2.2mの素掘り井戸である。この中から大量の土師器皿が出土した。

土師器皿11～15、49～53は、洛中で出土するDタイプの模倣型である。小森はこれを「在地形」と把握している。58・59は洛外原型G aタイプの模倣で、65は大和原型の模倣である。以上が褐色系である。以下は灰白色系である。75～80はDタイプの模倣型より厚手の小皿である。86～90は洛外原型G bタイプそのもの、もしくは模倣型である。106～108は在地系か。109・110は洛外原型G aタイプの模倣と思われるが、109は扁平であり、これらの土器群の中でもっとも新しい様相のものである。

以上の土器群は14世紀中葉を中心とする時期である。



第5図 長岡京跡右京第411次S E 41110出土遺物実測図(S=1/4)



第6図 三室戸寺子院1トレンチ西壁土層断面土器溜まり出土遺物実測図

(6) 三室戸寺子院1トレンチ西壁土層断面
土器溜まり^(注13)(宇治市菟道奥の池)

当該地は、かつての三室戸寺の寺域内に当たると。この資料は壁面崩落時に偶然検出された土器群で、土師器皿10数枚と羽釜小片1点がある。この内小皿4枚(69~72)と中皿(74・75)は入れ子のように重なって出土した。

灰白色系の土師器皿69~71は洛外原型G bタイプそのもの、もしくはその模倣型である。

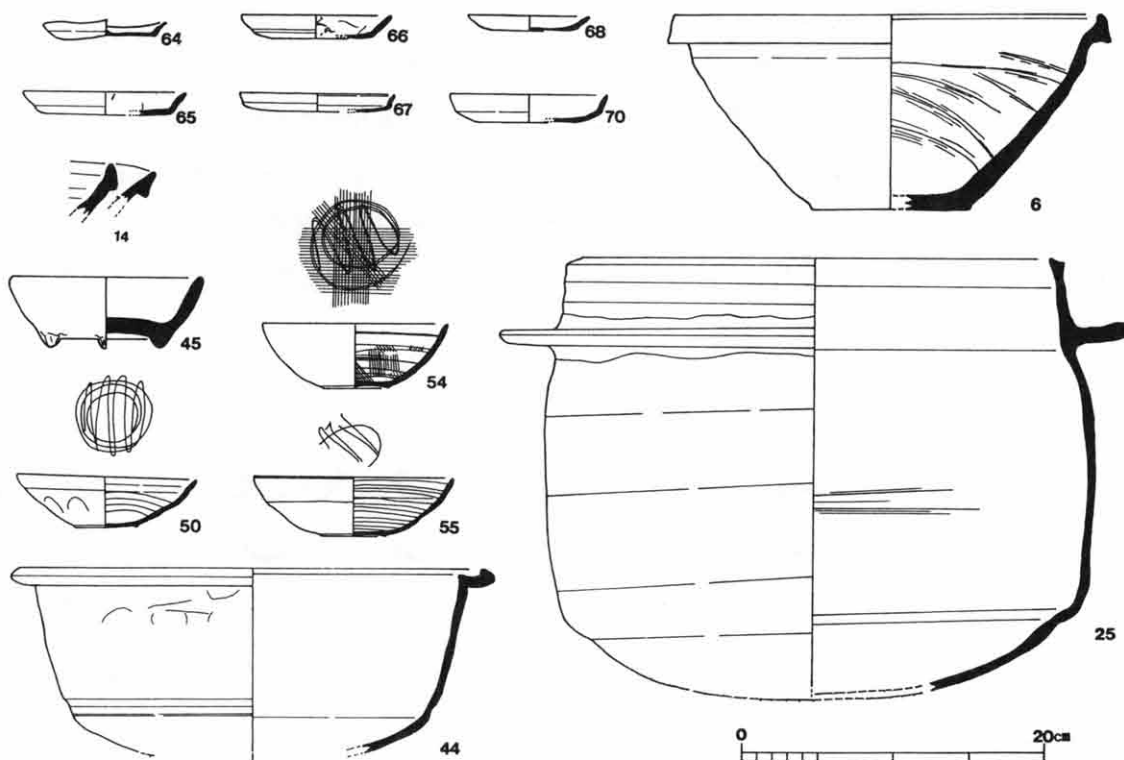
72はG aタイプそのもの、もしくはその模倣型である。74~77は洛外原型G a-2タイプそのもの、もしくはその模倣型である。褐色系の78・79は洛外原型J bタイプの模倣型である。

これらは14世紀中葉~後葉に相当する。

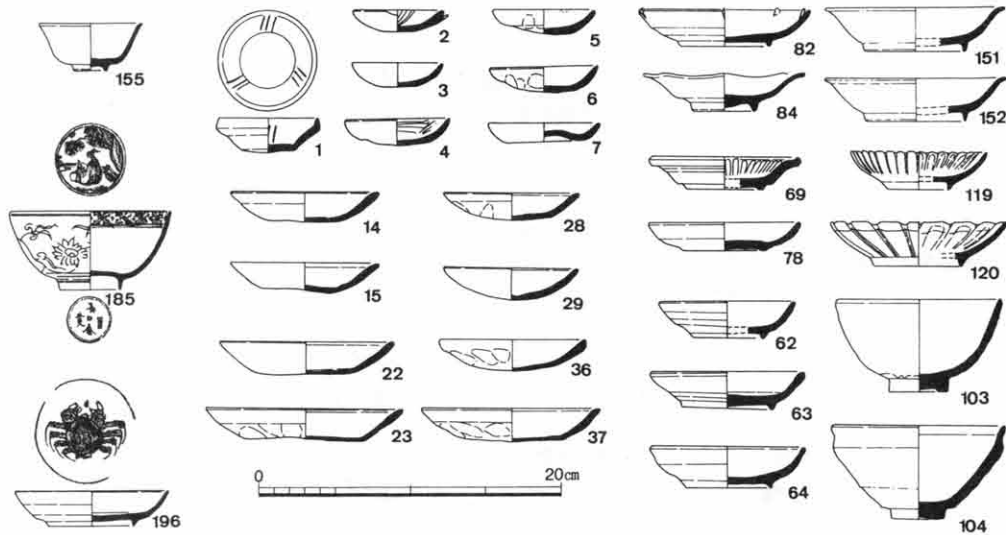
(7) 神足遺跡^(注14)(長岡京市東神足2丁目)

神足遺跡は、長岡丘陵から桂川方面へ続く洪積段丘の東縁部に位置している。井戸S E 1001は外径4.2mの不整円形で、井戸枠は検出されなかった。

ここから多量の土器が出土した。大半は瓦器である。土師器皿64~68・70は、口縁部を強く外反させたもので、洛中で出土するDタイプの模倣型である。小森の言う「在地形」である。わたしは元来は楠葉原型であって、それが、乙訓地域の主流になった形式と考えている。



第7図 神足遺跡S E 1001出土遺物実測図



第8図 勝龍寺城跡出土遺物実測図

瓦器碗49・50・54は、丹波原型(もしくはその模倣型)49や、和泉原型(もしくはその模倣型)のもの50、楠葉原型(もしくはその模倣型)54の3種がある。いずれも内面のミガキは粗雑化し、高台もほとんど退化しているので、13世紀末葉を中心とする一群である。瓦器四足香炉45は、底部はヘラおこしで未調整、外面はヨコナデである。瓦器羽釜25は鋤柄分類の河内・摂津型である。瓦器鍋44は山城型である。須恵器鉢6・14は東播磨系のもので、森田分類第3期第2段階である。

これらの土器群は13世紀末葉～14世紀中葉頃と思われる。

(8) 勝龍寺城跡^(注15)(長岡京市)

勝龍寺城跡は、神足遺跡とはほぼ重複する位置にある。戦国時代末期になると細川藤孝・忠興父子の居城となり、京都の玄関口を牛耳る重要な地点となった。

土師器皿14・15・21・22は洛外原型もしくは模倣型で、16世紀後葉～17世紀初頭のものである。28・29・35・36は平底ではなく丸みを帯びたもので、これはこの地域の特色か17世紀の新しいタイプか即断できない。以上の中皿と小皿以外に2～7の更に小さい皿(お手塩・こじゅう)がある。このタイプは16世紀から出土量を増すものである。1はその形態から播磨鉢を模倣したものではなかろうか。

瀬戸は丸皿62～64、折り縁皿69、菊皿119・120、丸碗103、天目茶碗104などがある。中国製陶磁器は白磁皿151・152のような端反りタイプや小碗155などがある。染め付け碗185や皿196もある。これらは16世紀後半を中心としている。

4. 山城地域の編年

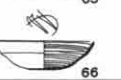
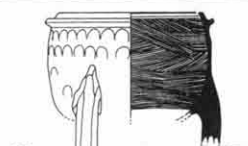
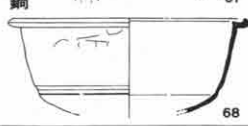
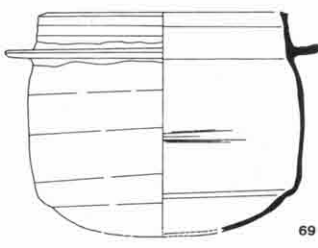
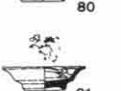
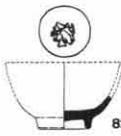
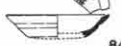
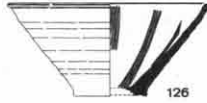
山城地域の編年をする際、今回提示した資料だけでは足りないなので、他の遺構出土資料も加味して考察したい。編年の基準としたものは、洛外産土師器皿である。

山城地域の11～16世紀の土器群は6期に分けることができる。

1期は洛外原型A・Bタイプ(模倣型)・同Cタイプが出土する。現状では資料が限られ、Bタ

付表 京都府南部(山城)の中世土器編年表

	乙訓	宇治・八幡	木津
1	洛外模倣型A 同B 同C 3 5 7 4 6 8	洛外模倣型B 同A 1 2 9 12 10 13 同C 15 11 16	
2	17 台付皿 20 18 19 21	洛外模倣型A 在地 22 26 23 27 Dタイプ模倣型 24 台付皿 25 28	
3		三室戸寺子院SK03 洛外模倣型A 洛外模倣型J 36 40 37 41 38 42 Dタイプ模倣型 39 43	
4	Dタイプ模倣型 洛外模倣型Ga-1 洛外模倣型Gb 洛外模倣型J 45 48 51 46 49 52 47 50 53 大和型模倣型	54 58 55 59 56 洛外模倣型Ga-2 57 60 61	在地 瓦器かなえ 62 63
5			大和型模倣型 在地 72 76 73 77 74 75 洛外模倣型Ia 78 79
6	(お手塩) 洛外模倣型Ia・Ib 88 93 89 94 90 95 91 96 92 97		小田垣内遺跡 在地 98 102 106 99 103 107 100 104 108 101 105 109 110

	碗・皿	羽釜・鉢
1		
1100	瓦器碗	
2	 29  30 白磁碗  31	東播系鉢  34  35
1200	 44	
3		
1300	瓦器碗	山城型瓦器羽釜
4	 64  65  66	 67 鍋  68  69
1400	青磁碗・皿	河内・和泉型羽釜
5	 80  81  82  83	瀬戸  84  85 大和型羽釜  86
1500	白磁小碗	信楽鉢
6	 111 白磁皿  112  113 染付  114  115	 126 備前鉢  127

イブが目立つ。このタイプは平等院の例を別として油煤痕はない。基準資料は西陣町遺跡や平等院洲浜などである。なお、田辺町興戸遺跡 S D03からは黒色土器 B 類碗も出土している。

2 期は洛外原型 B タイプが衰退し、洛外原型 A c タイプの模倣型もしくは、新型式である洛外で出土する D タイプの模倣型で構成されている。これに乙訓では大和と楠葉の瓦器碗、東播系の須恵器鉢が出土する。基準資料は長法寺本堂基壇である。

3 期は平安京では洛外原型 J b タイプが主流となる時期であるが、一部の地点(長岡京西陣町遺跡 R 130 焼土壙 S X 13001)を除いて洛外 D タイプの模倣型が主流となっている。基準資料は長岡京乙訓寺 R 311 土壙 S K 31118 や、淀川・木津川河床の採集資料(中近世土器の基礎研究Ⅸ 1993)である。

4 期は褐色系の洛外 D タイプの模倣型があるのと、白色系の洛外原型 G a・G b タイプの模倣型が主体となる。また、若干ではあるが洛外原型 J c タイプの模倣型が出土する。乙訓関係としては瓦器碗は楠葉型・和泉型と若干であるが丹波型がある。瓦器羽釜は河内・摂津型がある。須恵器鉢は東播系である。基準資料は長岡京跡右京第 411 次 S E 41110 と三室戸寺子院 1 トレンチ西壁土層断面土器溜まりである。

5 期は木津方面は大和模倣型の土師器皿が主流であり、一部洛外原型 I タイプの模倣型もある。信楽摺り鉢、大和型土釜、瀬戸鉢・皿、中国製碗・皿などがある。基準資料は木津遺跡 S G 01 である。^(注16)

6 期は洛外原型土師器皿を模倣したものが出土する。摺り鉢は信楽と備前で、碗・皿は瀬戸と中国製白磁皿、染め付け碗・皿がある。基準資料は勝龍寺城跡と、田辺町小田垣内遺跡^(注17)である。^(注18)

5. まとめ

以上、11 世紀から 16 世紀まで 6 期に分けた。これは大きく 4 様式にまとめることができる。

1 様式 1 期。洛外原型土師器皿 A・B・C タイプそのもの、もしくは模倣型が主体。碗は黒色土器から初期瓦器碗へ。

2 様式 2 期～3 期。洛外 D タイプの模倣型が主流。瓦器は乙訓は楠葉、宇治以南は大和が主流である。木津川河床遺跡では楠葉型 84.2%、和泉型 15.8% である。

4 期。赤土器(褐色系 D タイプ)と白土器(白色系の洛外原型 G a・G b タイプ)との判別が明確な時期。

3 様式 5 期。木津方面では大和模倣型の土師器皿が主流であり、乙訓方面では洛外 D タイプの模倣型である。洛外原型 I タイプが少量出土する。

4 様式 6 期。洛外原型 I タイプが主流。摺り鉢は信楽と備前など、すべての土器組成が中世京都と同様の段階である。

(いの・ちかとみ＝当センター調査第 2 課調査第 1 係長)

注 1 平良泰久・奥村清一郎・伊野近富他「平安京跡(左京内膳町)昭和 54 年度発掘調査概要」(『埋蔵文化

- 財発掘調査概報(1980-3)』第3分冊 京都府教育委員会) 1980
- 注2 伊野近富「かわらけ考」(『京都府埋蔵文化財論集』第1集 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987
- 注3 百瀬正恒「平安京及び近郊における土器の生産と消費」(『中近世土器の基礎研究』 日本中世土器研究会) 1985
- 注4 岩崎 誠「第2章 長岡京跡右京第163次(7ANMK I地区)調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第17冊 長岡京市教育委員会) 1986
- 注5 小森俊寛「概説」(『古代の土器3 都城の土器・陶磁器』 古代の土器研究会) 1995
- 注6 中井淳史「畿内土器様相の中世的特質」(『中近世土器の基礎研究X』 日本中世土器研究会) 1994
- 注7 百瀬正恒「各地の土器様相 近畿」(『概説 中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会) 1995
- 注8 木村泰彦「第一章 長岡京跡右京第129次(7ANN SN-2地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 1985
- 注9 杉本 宏・荒川 史『平等院 阿弥陀堂中島発掘調査報告』 宗教法人 平等院 1991
- 注10 岩崎 誠「第4章 祭ノ神遺跡第2次・長法寺調査概要」(『長岡京市文化財調査報告書』第24冊 長岡京市教育委員会) 1990
- 注11 杉本 宏「宇治市街遺跡第2次発掘調査概報」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第8集 宇治市教育委員会) 1985
- 注12 石尾政信「長岡京跡右京第411次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第53冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993
- 注13 猿向敏一「2. 三室戸寺子院跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第14集 宇治市教育委員会) 1989
- 注14 山本輝雄・久保哲正「長岡京跡右京第10・28次調査」(『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 長岡京市教育委員会) 1980
- 注15 注4に同じ。
- 注16 小山雅人「木津遺跡第4次」(『京都府遺跡調査概報』第20冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1986
- 注17 注4に同じ。
- 注18 伊野近富「京奈バイパス関係遺跡 小田垣内遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第37冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1990

平成7年度発掘調査略報

25. 石ヶ原古墳群

所在地 竹野郡丹後町大字三宅小字石ヶ原
調査期間 平成7年12月4日～平成8年2月28日
調査面積 約540m²

はじめに 今回の調査は、京都府丹後土地改良事務所が計画している「府営広域営農団地農道整備事業」に先立ち、同事務所の依頼を受けて実施した。

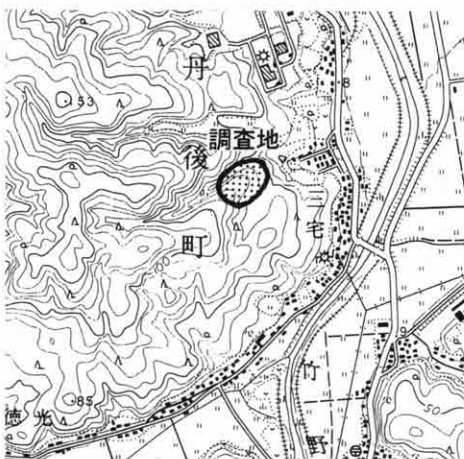
今回は、昨年度の試掘調査結果に基づき、7基の古墳(1・3～7・9号墳)の発掘調査を実施した。また、2・8号墳については古墳ではないと確認した。

調査概要 石ヶ原古墳群は、丘陵斜面の狭い平坦部に密集して造られている。分布調査の結果、現在までに15基の古墳が確認されている。調査地内には7基あり、1号墳以外の古墳は密集し、調査地の西側に古墳状隆起が存在している。

1号墳は、標高約53mの舌状にのびたなだらかな斜面上に立地するが、南側は山道によって削られている。墳丘は、旧地形を利用し、北側は墳丘に見えるように整形されているようである。墳頂部で1基の木棺直葬墓を検出し、須恵器の広口甕が出土した。これは、同一個体片が表土掘削段階から出土していたので、墓壙上の遺物と考える。

3号墳は、昨年度に調査をほぼ終了し、今年度は墳丘の断ち割り調査を実施した。3号墳は調査範囲が狭く、南側が山道で削られているため、墳形は確認できなかったが、丘陵斜面の狭い平坦地に盛り土された墳丘であった。

4号墳は、調査範囲内に墳丘裾部の一部がかかるのみで詳細は不明である。



第1図 調査地位置図(1/25,000)

5号墳は、全長約10mの円墳で、盛り土された墳丘を持つ。墳頂部で、木棺直葬墓1基を検出した。棺内からの出土遺物はなく、墓壙内から数点の土師器片が出土したのみである。

6号墳は、5号墳の南側に接して位置し、全長約8mの円墳で、盛り土によって墳丘を形成している。墳頂部で小規模の埋葬施設と思われる土壙を検出したが、遺物は出土しなかった。

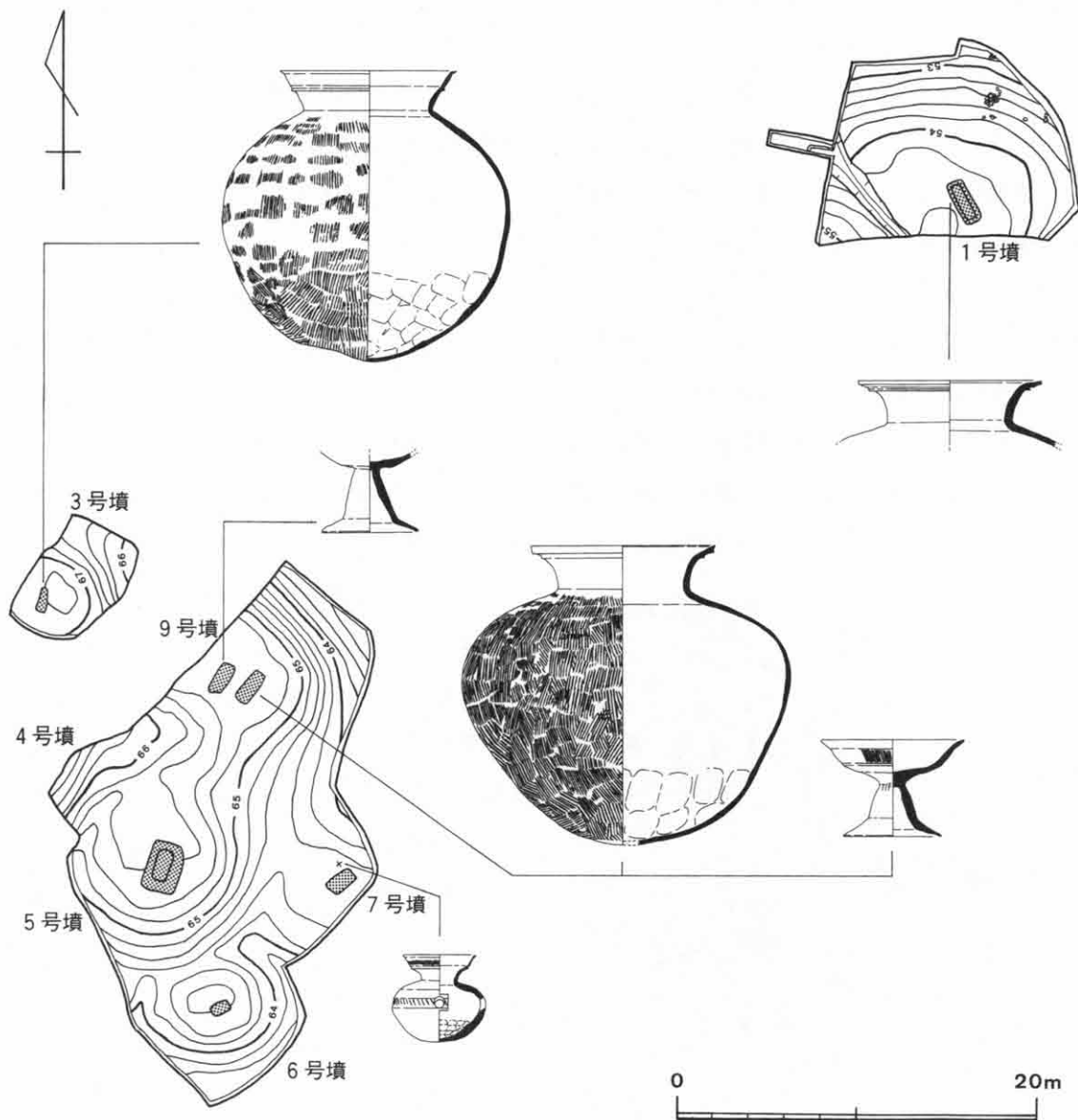
7号墳は、5号墳の東側にあり、墳丘が削平され、墳形は不明である。墳頂部で土壙墓1基を検出したが、

出土遺物はなかった。ただ、土壙墓の近辺で須恵器の甕が出土した。

9号墳は、5号墳の北側にあり、西側は山道によって削られている。墳頂部で2基の土壙墓を検出し、第1主体部とした東側の土壙墓からは、土師器の高杯と上面からの落ち込み遺物と考えられる須恵器の壺、第2主体部とした西側の土壙墓からは土師器の高杯が出土した(第2図)。

まとめ 今回の調査成果を簡単にまとめると、石ヶ原古墳群は小規模な古墳が密集する古墳群であり、地形を利用した古墳がほとんどで、盛り土した墳丘を持つ古墳は少なかった。また、埋葬施設も小規模で、出土遺物も少なく、古墳の時期を決めるのはむずかしいが、古墳の立地形態や出土した遺物から、古墳時代後期(6世紀前半)に属すると考えられる。

(村田和弘)



第2図 遺構配置図及び出土遺物(遺物は、1/8に統一)

26. 引地城跡・南有路城跡

所在地 加佐郡大江町南有路
調査期間 平成7年11月21日～平成8年2月28日
調査面積 約740m²

はじめに 今回の発掘調査は、府道福知山舞鶴線の拡幅・改良工事に先立ち、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。調査地は、大江町内を貫流する由良川を見下ろす丘陵上に位置する。

引地城跡は、昨年度に地形測量と丘陵頂部の面的な調査を行っており、今年度は、丘陵斜面部の調査を行った。引地城跡は、出土遺物から16世紀の城跡と考えられる。

また、引地城跡の北方に位置する南有路城跡は、裾部分に小規模な平坦面が4か所認められ、試掘調査を行った。しかし、調査の結果、顕著な遺構は確認されなかった。

調査概要 引地城跡の調査は、丘陵斜面部を人力で掘削し、遺構の検出に務めた。その結果、小規模な平坦面や帯郭・土塁・横堀・通路などを確認した。

小規模な平坦面は、丘陵北側斜面で複数確認された。構造的にみて、引地城跡に伴う遺構と思われる。引地城跡には、上下2段の帯郭が確認された。上段の帯郭は、北側から西側にかけて土塁と横堀が造られており、横堀の底面が帯郭につながる。下段の帯郭については、一部を調査したにとどまる。また、上段の帯郭と下段の帯郭をつなぐ通路(幅1.2m)を検出した。

また、今回の調査では、縄文時代草創期の尖頭器が出土したほか、古墳時代の遺物も多数出土している。調査地周辺には、縄文時代草創期の遺跡や古墳などが存在すると思われる。



調査地位置図(1/50,000)

まとめ 引地城跡は、全体のおよそ3分の1を対象として調査を実施した。その結果、上下2段になった丘陵頂部の主郭や丘陵斜面部の腰郭・帯郭・土塁などを比較的良好な状態で検出することができた。引地城跡は、由良川の水運などを監視するために造られた出城的な意味合いが強いと思われる。尾根続きに約500m離れたところには「本丸」という地名があり、(『大江町史』)、これとの関連が注目される。

また、今回、縄文時代草創期の尖頭器や古墳時代の遺物が出土したことは、周辺に同時代の遺跡が存在することを示しており、今後、周辺地域での調査に期待される。(筒井崇史)

27. 長岡京跡右京第511次(7ANGKN地区)

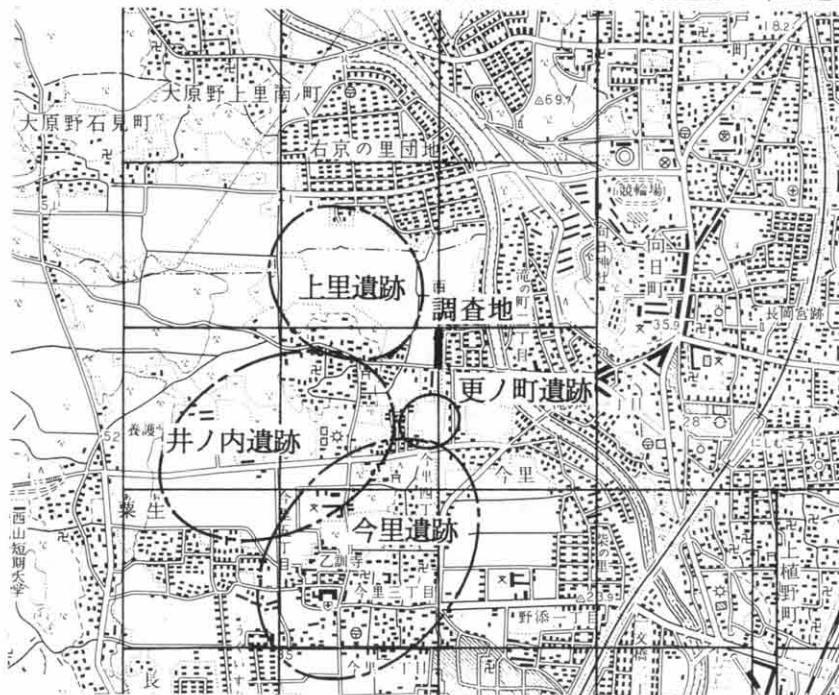
所在地 長岡京市井ノ内上印田地内
 調査期間 平成7年10月20日～平成8年2月28日
 調査面積 約1,000m²

はじめに 今回の調査は、長岡京市今里～井ノ内地区で京都府が進めている都市計画街路(外環状線)改良工事に伴って実施した。外環状線の道路建設に伴う発掘調査は、昭和53年度の京都府教育委員会による調査以後、当調査研究センターが断続的に行っている。今回は、府道善峰向日線の北側の区間で用地買収の完了したところについて、京都府乙訓土木事務所の依頼を受けて、工事に先行して発掘調査を行った。

調査地は、長岡京市地形分類図によると小畑川右岸の氾濫原にあたり、標高30～31mの水田地帯で、北西から南東方向にゆるやかに傾斜する地形を呈し、東西から住宅地が迫っている。西方には、低位段丘が東西方向にのび、段丘の北側は小畑川に合流する善峰川の侵蝕による崖面が形成され、その北方には緩扇状地形がみられる。

今回の調査地は、平城京型による長岡京跡復原図によれば、右京二条三坊一町にあたり、西二坊大路が通る位置である。二条大路を二町北に引き上げる新条坊復原案によれば、右京二条三坊三町に相当する。また、調査地の北西には、縄文時代～平安時代の集落跡である上里遺跡があり、その南方には縄文時代～鎌倉・室町時代にかけての広範囲な集落跡である井ノ内遺跡や今里遺跡が所在する。

調査概要 道路建設予定地に東西約16m・南北55mのトレンチを設定、後に北に拡張した。耕作土・床土の下に中世の遺物包含層が東側にやや厚く堆積するが、北西部では遺物包含層はみられなかった。この遺物包含層を除去するとトレンチ東側で南北方向の溝SD 51101、西側で自然流



調査地位置図(1/25,000)



自然流路 S R 51107 埋土の土馬出土状況

路 S R 51103 が検出された。そして、トレンチ西端で南北 35m、東端でトレンチのほぼ全域に広がる自然流路 S R 51107 が検出された。自然流路 S R 51107 の南端付近の上面から皇朝十二銭の寛平大寶(890年)がまとまって出土した。この自然流路内は、粗砂～礫層や粘土質が堆積し、幾度か流れを変えているようすがうかがえる。流路北端では暗灰～暗灰褐色粘質土が堆積し、埋めたてられたような状況がみら

れた。この暗灰～暗灰褐色粘質土を挟み込んだ砂堆積が溝状に南北方向にのびていたため、これを溝 S D 51102 とした。溝の堆積砂層及び暗灰～暗灰褐色粘質土から土器片とともに、長岡京期の土馬や斎串などが出土した。自然流路 S R 51107 の南部で砂礫堆積層を掘削している途中、東西方向に平行した杭列 S X 51106 を検出した。この杭列で粗砂層が止まっていることから、護岸として設置されたのであろう。杭列間の砂層に長岡京期と推定される土器が少量混入していた。また、自然流路 S R 51107 の北部の下層でも杭列を伴う溝 S D 51109 を検出した。幅 2～3m を測り、西壁では深さ約 0.4m となり、砂礫や粘質土が交互に堆積する。杭は、約 6m の範囲で南北両側に密に打ち込まれている。杭に接して、木製品の槽や丸太材などが検出され、加工木や古墳時代後期(6世紀後半)の須恵器などが出土した。トレンチ南東部では、自然流路 S R 51107 によって壊された南北方向の溝 S D 51105 が検出された。

まとめ この調査地では、平安時代以前の遺構の大半が自然流路 S R 51107 によって削られていたため、長岡京に関連する遺構はほとんど残っていなかった。今回の調査成果を簡単に記す。

①自然流路 S R 51107 の一部には、暗灰～暗灰褐色粘質土が堆積し、人為的に埋めたてられた様相を呈しており、その埋土中には長岡京期の土馬などが含まれていた。これらの仕事は、長岡京の造営に伴う可能性が高い。

②自然流路に削られた溝 S D 51105 は、南側で行った右京第 335 次調査で検出した西二坊大路東側溝 S D 33501 と溝の規模や堆積状況が類似する。また、溝の中心座標が Y = -27,894.4 を示すことから西二坊東側溝と推定できる。

③同じく自然流路 S R 51107 は、右京第 22・25 次調査で検出された自然流路に連続する可能性が高く、善峰川の旧河道と推測される。今回の調査で出土した資料や、これまでの周辺の調査状況からみて、周辺部に長岡京期以前にさかのぼる遺構が存在する可能性が高い。

(石尾政信)

28. 内里八丁遺跡

所在地 八幡市内里八丁、日向堂
 調査期間 平成7年4月20日～平成8年2月28日
 調査面積 約3,250m²

はじめに 内里八丁遺跡は、木津川によって形成された沖積平野に立地し、微高地(旧自然堤防)部分を中心に存在している。過去に実施された発掘調査では、弥生時代後期から鎌倉時代にわたる水田跡や集落跡など、多種多様な遺構・遺物が確認され、京都府内でも有数の複合遺跡として注目されている。今回の発掘調査は、第二京阪道路建設に伴い、日本道路公団の依頼を受けて実施した。本事業に伴う調査は、昭和63年度から継続して実施しているが、今年度はD地区の北半部(D1地区)での面的な発掘調査のほか、範囲確認の試掘調査を併せて実施した。

調査概要 D1地区の調査では、最終的に5面の遺構面を確認するとともに、鎌倉時代以降、平安時代後期～末、奈良時代～平安時代初頭、古墳時代中期、弥生時代末～古墳時代初頭、弥生時代中期の6期にわたる遺構を確認した。以下、D1地区の調査成果の概要を報告する。

鎌倉時代以降 島畑を南北2か所で、またその周囲では水田跡の広がりを確認した。鎌倉時代(13世紀後半以降)に造成され、近年まで連綿と利用され続けたようである。

平安時代後期～末葉 主な検出遺構として掘立柱建物跡1棟、井戸跡2基、土坑7基がある。また、調査地の南半部で幅約0.3mの素掘り溝群及び幅約1mの溝などを検出した。これらは、細かくみると、掘立柱建物跡や井戸跡など集落跡の様相を示す11世紀末～12世紀と、素掘り溝群や水路と考えられる溝など、耕作地としての痕跡を示す12世紀末～13世紀初頭のものに分かれる。

奈良～平安時代初頭 主な検出遺構としては、掘立柱建物跡6棟、竪穴式住居跡1基、井戸跡3基、土坑3基のほか、調査地西辺を南北に流れる溝などがある。また、調査地の南半部では平安時代後期～末と同様、耕作に伴う幅約0.3mの素掘り溝群を検出した。竪穴式住居跡は、8世紀後半頃のものであるが、炭や焼土が多量に出土したことから、何らかの工房として利用されたと考えられる。また、溝S D95032は、昨年度調査を行ったD1地区でもこの南側延長部が検出されており、その南端は和同開珎などが出土した池状遺構へ流れ込んでいる。



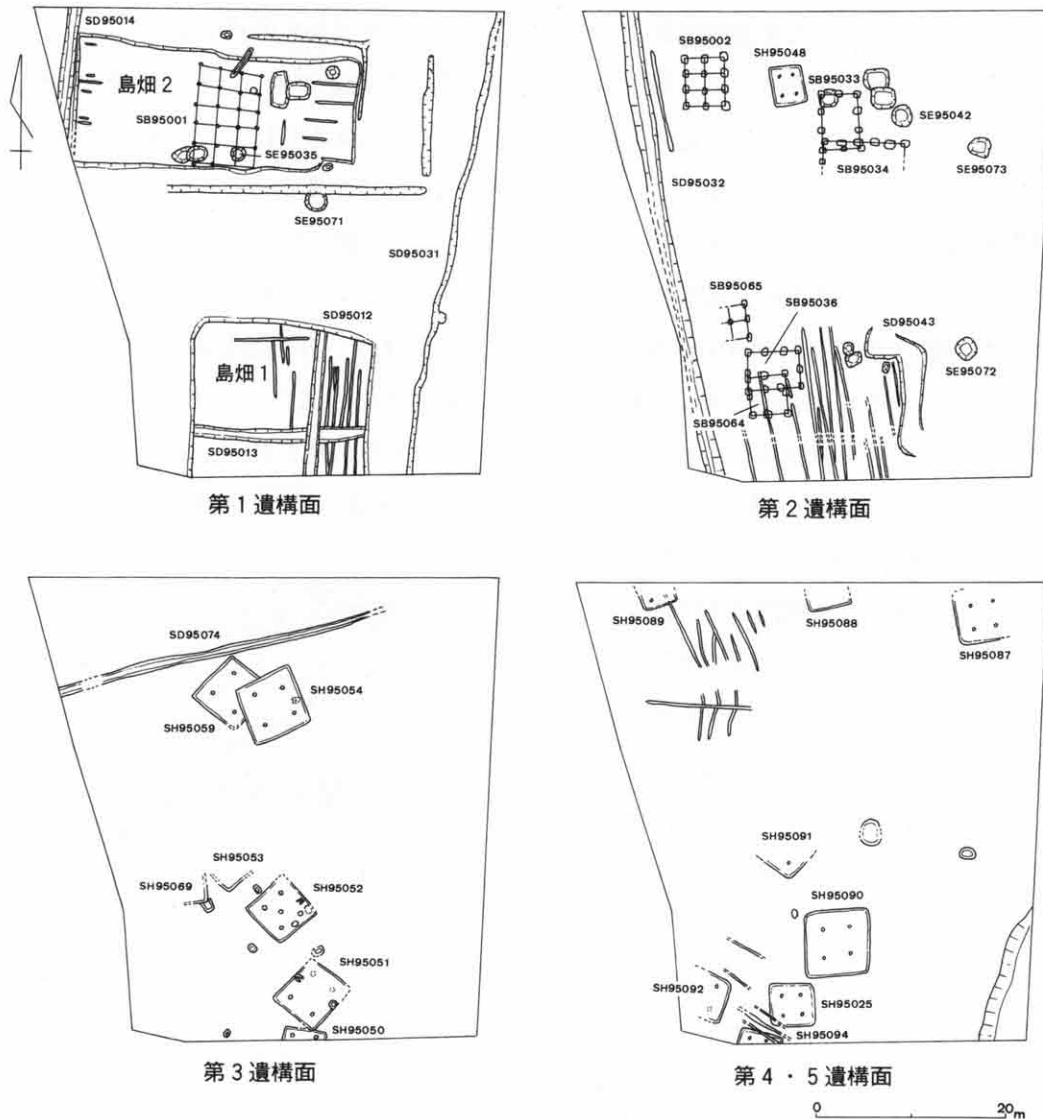
第1図 調査地位置図(1/50,000)

古墳時代中期 主な検出遺構には、竪穴式住居跡7基、溝のほか、土坑3基がある。竪穴式住居跡は、調査区の南辺中央付近から北西方向へゆるやかな円弧を描くように5基が連なって存在し、北半部では中央付近で2基を確認した。いずれも一辺6m前後の方形を呈するが、後世の削平のため全体の状況が判明するものは4基にすぎない。5世紀後半～末頃に位置づけられる。

弥生時代末～古墳時代初頭 主な検出遺構には竪穴式住居跡8基、土坑2基のほか、幅約0.3mの素掘り溝群がある。竪穴式住居跡は、いずれも隅丸方形を呈し、一辺4～4.5mを測るが、竪穴式住居跡10のみは一辺7mの大型である。また、素掘り溝群は、調査地の北西部を中心に検出した。畑作の痕跡を示すと考えられ、古墳時代前期のものと判断している。

弥生時代中期 この時期の検出遺構としては、調査区のほぼ中央からやや東寄りの部分で土坑2基を確認したにとどまる。

まとめ 以上、今回の発掘調査では、弥生時代中期から中世に至るまでの、この地の土地利用の変遷が明らかとなった。調査は、今後も継続して実施される予定である。各時期の遺構・遺物の詳細は、周辺部の調査成果と合わせ、今後十分な検討を加えたい。(森下 衛)



第2図 主要遺構平面図

29. 棕ノ木遺跡

所在地 相楽郡精華町下粕棕ノ木・柳垣内
調査期間 平成7年11月21日～平成8年2月27日
調査面積 約1,200m²

はじめに この調査は、木津川上流浄化センターの建設に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。平成7年度の調査地点は、約10万m²に及ぶ広大な浄化センター敷地のうち、その南西部寄りに計画された第1ポンプ場及び管理棟部分である。浄化センター建設予定地にその大半が重複する棕ノ木遺跡は、精華町の北東部(＝相楽郡の北端)に近い平地に立地する。遺跡のすぐ東側には木津川が北流しており、当初は、遺跡を含めた周辺一帯に同河川の氾濫原が広がっていることを想定していた。ところが、近年になってこの遺跡に接する木津川河川敷で、中世～近世を中心とする遺構・遺物が検出された。また、遺跡地周辺には条里制に伴う方田割が比較的良好に残っている。過去の木津川の流路は、現在より東方に位置していたことが予想された。

これらのことから、まず、対象地区内の数か所に試掘グリッドを設け、土壌の堆積状況を確認した。その結果、いずれの地点でも基本的には同じ層順で、砂質土と粘(質)土が互層をなして堆積する状況であり、現地表下1.5mまでに少なくとも3面の遺構面が存在することを確認した。

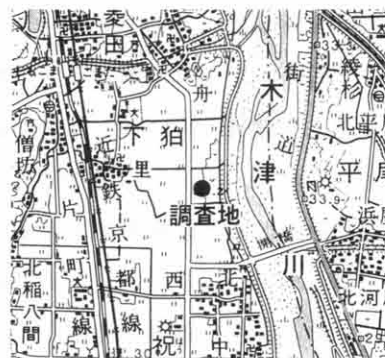
試掘調査の結果を受けて、第1ポンプ場地区は敷地内全面を、その北側の管理棟部分については、幅5mの試掘トレンチを設けて発掘調査を実施した。また、両地区とも第2遺構面での遺構の存在が最も密であるため、この面での面的調査を中心に行い、他の遺構面は部分的な範囲の調査にとどめた。したがって、ここでは第2遺構面の遺構の内容と評価を中心に記述する。

調査概要

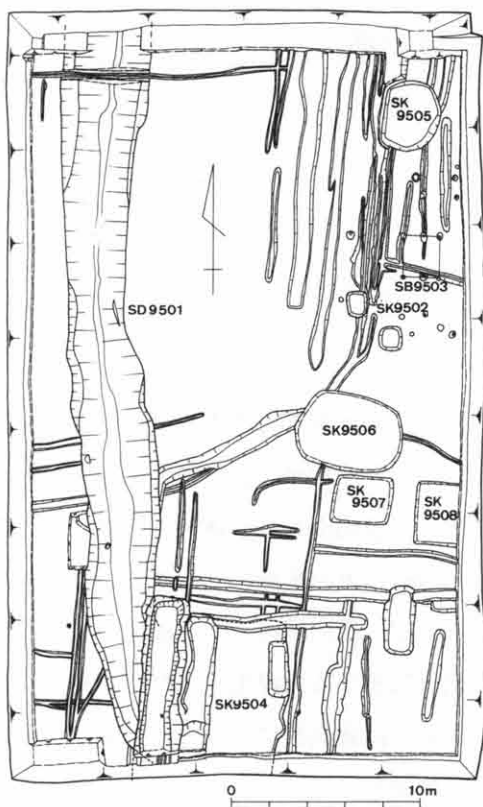
(1)第1ポンプ場地区(1トレンチ) S D9501は、調査区の西寄りを南北流するやや規模の大きな溝である(上縁幅3～4m・検出面からの深さ約0.8m)。延長38mを確認したが、両端はさらに調査区外にのびる。出土遺物は少なく、瓦器小片・石庖丁・縄文時代晩期の土器片などがある。

S K9502は、長辺1.5m×短辺1.1mを測り、南北に主軸長をもつ隅丸長方形の土坑である。土坑内最下層中から底部を欠いた須恵器片口鉢(東幡系)・大小の木製円盤(鉢の蓋と底板とみられる)・拳大の自然石数個が出土した。墓とみられる。

この土坑の東側一帯に径0.2～0.4mの円形柱穴が多数みられる。多くは自然石による礎板を持つ。このうち、建物としてまとめたのがS B9503である。2間(1.9m)×1間(2.1m)の小規模な建物跡である(床面積約4m²)。耕作溝より古い。



第1図 調査地位置図(1/50,000)



第2図 1トレンチ遺構平面図
(第2遺構面)

S K 9504は、調査区南端中央で検出したやや規模の大きな土坑である。平面形は、南側が調査区外にのびるが、おそらく南北主軸の長方形と推定する(東西8.0m)。底部は起伏に富み、全体としては西に向かうにつれ、段状に深くなる。西端の最深部(幅2m・検出面からの深さ1.5m)は、南北方向の溝状を呈し、底部付近から完形に近い瓦器碗・白磁皿・短冊形木器・鋤形木器などが、人頭大の自然石数点とともに並び置かれるように出土している。

S K 9505～08は、第1遺構面より上位ですでに確認していた土坑である。平面形は、方形・円形・楕円形とさまざまである。底部は、第3遺構面を越えて、下層に厚く堆積する精良な黄色粘土層を深く掘り込んでいる。近世以降の粘土採掘坑とみられる。

耕作溝(幅0.1～0.5mの浅い溝群)は、いずれも第2遺構面上を均等に覆う包含層(灰色粘土)を埋土とする。同層位で出土した土器類から、中世前期を下らない時期に比定できる。

(2)管理棟地区(2トレンチ) 調査区全面にわたって、南北主軸の耕作溝群が検出されたほか、西端部の第3遺構面で直線的な壁ラインを示す竪穴式住居跡とみられる遺構の一部(周壁溝など)を検出した。この遺構の覆土中から、縄文時代晩期の土器資料が若干出土している。

まとめ 今回の調査成果を簡単にまとめておきたい。

①今回の調査地は、現在の木津川本流から約300mの近距離にありながら、安定した遺構面が少なくとも3面存在することが判明した。つまり、このことは、発掘調査によって、この地点が河川の氾濫などの自然災害をそれほど受けていないことを改めて確認できたことを意味する。

②1トレンチの第2遺構面の遺構は、出土遺物や遺構間の重複関係から大別して三時期に区分できる。1期は、12世紀末から13世紀前半の時期で、環濠S D 9501に囲まれた屋敷地内に、墓S K 9502や建物跡S B 9503などが営まれる村落的景観が復原できる。2期は、13世紀後半に比定され、S K 9504がこれに属する。これは、土坑底が下層の黄色粘土層を深く掘り込んでいることから、粘土採掘坑の可能性も指摘でき、近世以降活発になる採土の開始がこの時期にさかのぼることがわかった。土坑内の遺物群は、採土に関連する祭祀に関わるとみられる。続く3期は、耕作に関わる鋤溝などが展開する時期(14世紀)で、それ以降、農耕地に変化したとみられる。

③以上のように、今回は、中世前期の遺構・遺物を中心に紹介したが、さらに下層の第3遺構面でもそれ以前の遺構・遺物が断片的に検出されており、より広範な調査によって、こうした下層の遺構の性格も明らかになると予想される。

(伊賀高弘)

資料紹介

近世京都・勘兵衛町出土の「乾山」

小池 寛

1. はじめに

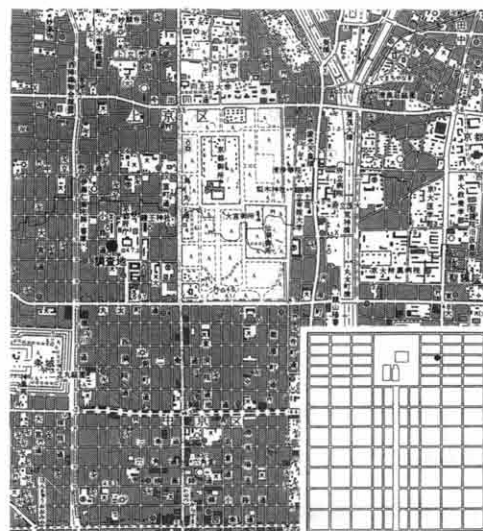
琳派の大成者である尾形光琳は、画壇の中核的な一派である狩野派の山本素軒に画を学び、本阿弥光悦や俵屋宗達の作品に傾倒することにより、画風を確立した。表題にあげた乾山は、姓名を尾形権平と言ひ、光琳の実弟である。乾山は、1689年、文人墨客に人気のあった御室仁和寺の所在する雙ヶ丘に習清堂なる隠宅を構え、また、京から乾方向の丘陵部に所在したことから、乾山と号した。御室仁和寺の所在する雙ヶ丘は、御室焼で著名な仁清の工房があり、乾山自身もそのことを十分に認識し工房を設けた。以上のように乾山は、自己の作風を確立する上で様々な芸術家の影響を受けたことが想定^(注1)できる。

現在、乾山焼は、各美術館・博物館などに多く所蔵されており、仁清焼と同じく、京焼を代表する陶芸作品として広く研究されている。また、「乾山」銘の研究も詳細に行われるに至っている。

近年、京都や大阪において、江戸時代中期から後期を対象とする発掘調査が頻繁に行われるようになり、伝世品でしか理解できなかった乾山焼や仁清焼が、他の陶磁器と共伴して出土し、伝世期間を考える上で良好な資料が得られるようになった。ここに、紹介する乾山焼は、近世京都・勘兵衛町から出土した資料であり、遺跡出土の乾山焼・碗の考古学的側面を考察しておきたい。

2. 出土地の歴史的環境と出土状況及び共伴遺物について

当該資料は、京都市上京区西洞院通下立売上ル勘兵衛町から出土した(第1図)。勘兵衛町は、北東方が丁字風呂町、西方が近衛町、南方が西大路町に囲まれており、発掘調査によって勘兵衛町と丁字風呂町及び勘兵衛町と西大路町の町境界を区切る柱穴列を検出している。また、北トレンチの北端では、近世・出水通の南側溝を検出しており、慶長年間には出水通を挟んだ北方に、琉球貿易で財を成した茶屋四郎次郎邸が所在していたことが知られている。勘



第1図 出土地位置図(1/50,000)

兵衛町の町名は、慶長年間に当地に居住した京都の富者である三勘兵衛の一人が居を構えていたことに由来しており、既に論じた中国製男子像^(注3)や朝鮮王朝磁器^(注4)の出土も、富者・勘兵衛の居住と関連することを推論したことがある。

当地には、寛保元年(1741)に編纂された『京大絵図』によると、宝林寺が描かれている。この宝林寺は、『京都叢書』によると、真宗本願寺に帰属する寺院で、山城国葛野郡川島村から慶長5年(1600)に当地へ移転した記事が見られる。その後、宝永、正徳、天明の3回の火災により焼失し、その度ごとに再建したとある。『京大絵図』には宝林寺とあり、『京都叢書』坊目誌には、法林寺と記載されているが、坊目誌の説文には、「西洞院通出水下る十六番戸にあり」と記されていることから、両者は同一寺院と考えられる。また、天保2年(1831)に描かれた『京町絵図細身大成』では、当地は空白になっているが、小川通以東、西洞院以西、出水通以南、下立売通以北には長門毛利藩邸が描かれている。以上が、出土地一帯の近世の歴史的環境であるが、次に、乾山焼の出土状況について、概観しておきたい。

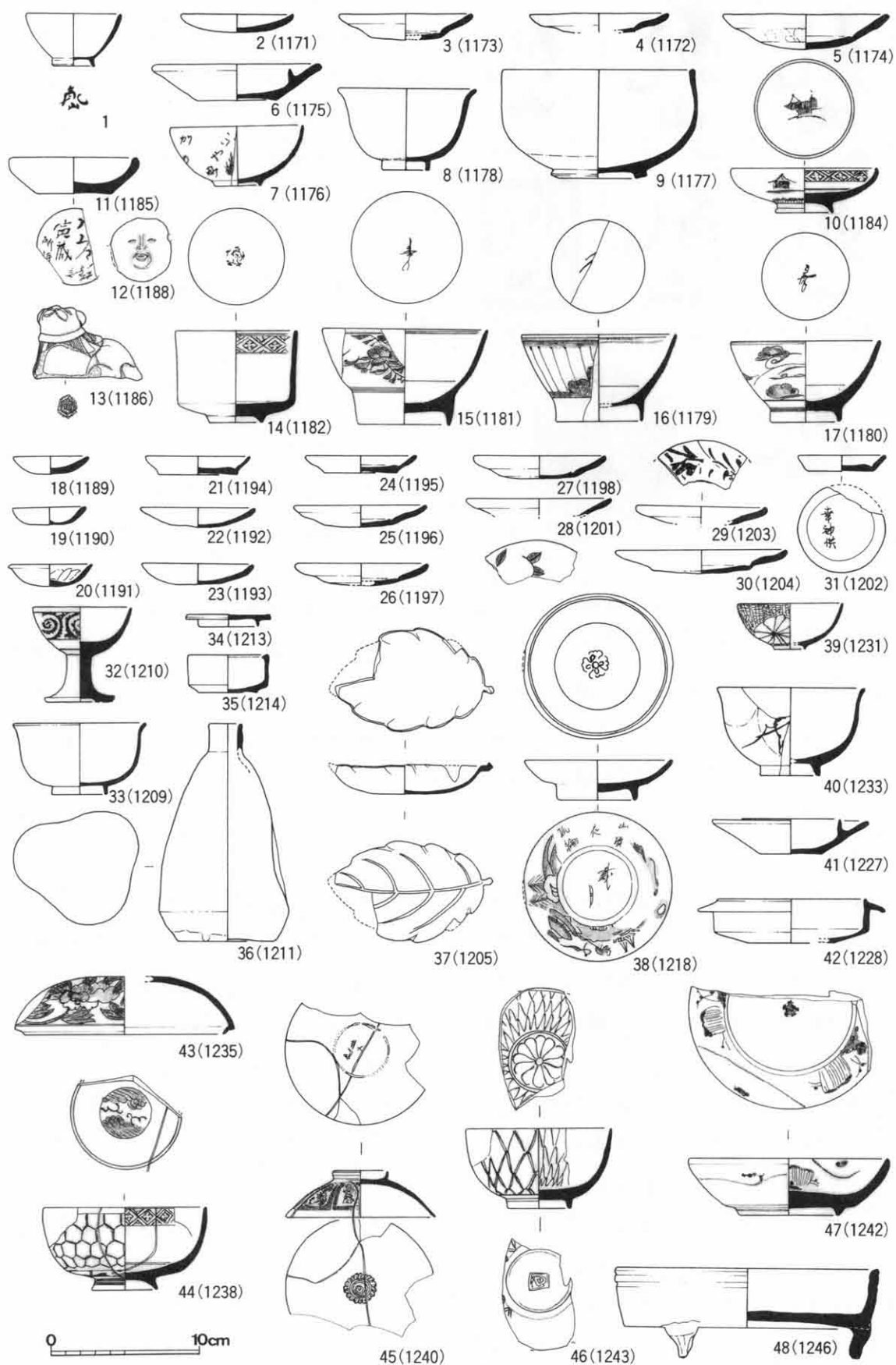
乾山が出土した土坑312は、18世紀末から19世紀前半に築かれた土塀基礎の布掘りが埋没した後に掘り込まれた土坑で、東西長軸4.6m、短軸2.4m、南辺長軸1.5m、短軸0.5mを測り、西半部の深さは約1mである。土坑内の堆積状況は、基本的に8層に分層できるものの、最上層及び最下層から出土する陶磁器類には、明確な時期差は認められない。土坑内の遺物出土状況からゴミの廃棄を目的に穿たれたと^(注5)考えておきたい。

次に共伴遺物について概観しておきたい(第2図)。土師器は、口径が5cm・8～9cm・11cm前後の3群に分類でき、底部内面に明瞭な凹線を施している。また、無釉の陶器としては、椀33や型押しによる木葉形皿37が出土している。近世京都での出土は僅かであるが、「幸神供」の墨書土師皿31の出土などから、供物用器として使用された可能性がある。一方、京焼の端反りの椀8・40や鉢9、肥前磁器の広東椀15・16、高杯32などの国産陶磁器、そして、金接ぎ及び漆接ぎを施した中国製磁器椀44・45などが出土している。端反りの磁器椀8の出土や、広東椀15・16の出土、そして、肥前磁器の高杯32の出土などから19世紀初頭に比定して大過ないところである。

3. 乾山焼・椀の概観と「乾山」銘について

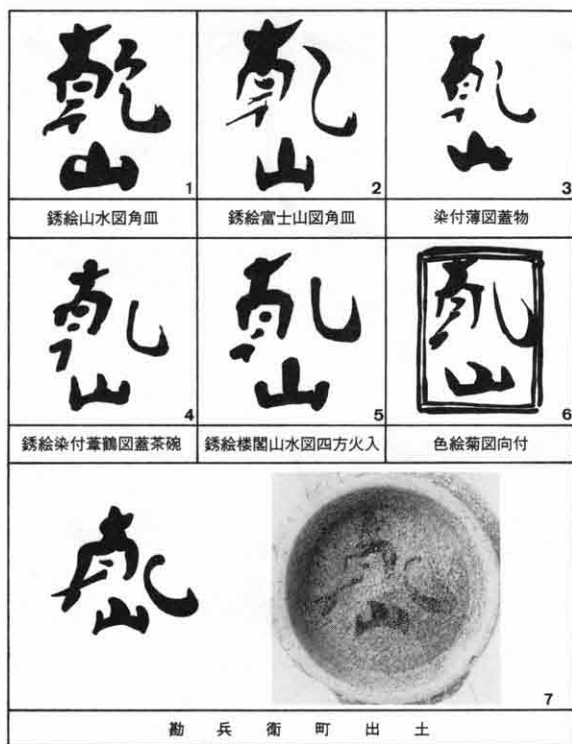
乾山焼・椀(第2図1)は、口径は6.3cm、器高は3.6cm、高台径は2.8cmを測る。やや開き気味の高台と内湾する体部からなる。軟質の素地に貫入の入った淡褐色の釉がかかる。釉の残存状況は不良であり、2次的に火を受けた可能性が高い。一方、「乾山」銘は、呉須により底部外面に書かれている。全体の残存率は約60%であるが、底部は100%残存^(注6)している。

底部外面の「乾山」銘(第3図7)は、小型の椀であることから銹絵山水図角皿(第3図1)や銹絵楼閣山水図四方火入(第3図5)のように全体的にゆったりとしてはおらず、「乾」と「山」の間隔が狭く、「乾」の偏と旁の間に「山」が押し込められた感がある。そのため、「乾」の偏と旁の中心線は、極端に八字形に開いており、第3図1～6の「乾山」銘とは、全体的なバランスが著しく異なっている。



第2図 乾山出土土坑312出土遺物実測図

1~17. 1層 18~38. 3~6層 他は坑内。() 番号は注2に使用した付番



第3図 「乾山」銘集成
注7の文献、P153の一部をトレース

山水図四方火入(第3図5)などがあり、正徳年間を中心に設定していることから、Cタイプは、少なくとも1715年以後と考えると良い状況である。この分類に準拠して当該資料の「乾山」銘を見れば、Cタイプに近似する特徴を描出できる。

4. まとめ

乾山の作風は、元禄12年(1699)～正徳2年(1712)の鳴滝時代、正徳年間の二条丁子屋時代、享保年間以後の江戸入谷時代の3期に区分される^(注8)。個人的な作品も当然含まれるが、工房の商品として製作されることがやはり多かったと見るべきである。また、絵付けも正徳6年(1716)に亡くなった光琳以外の絵師による作品も多く含まれる可能性が高い。一方、「乾山」銘については、他の類例をあげて概観したように、商標としての性格も強く、ここに紹介した「乾山」銘も商標の可能性が高い。当該資料の製作年代については、最も新しく見れば、18世紀中葉と推定でき、共伴土器群が示す年代との差は概ね半世紀を数える。おそらく、趣のあるうつわとして伝世されたことを示唆しているのであろう。

乾山焼は、仁清の実子である清右衛門などの陶工の影響や実兄である光琳らの画風の影響を受けて成立し、それは、乾山の養子である猪八に受け継がれる。乾山自身も芸術作品と商品との区別を行い製作を指揮したと考えられるが、乾山焼を総合的に研究する場合、その両側面から検討する必要がある。近世京都からの出土事例は、管見では同志社中学校体育館予定地^(注9)のS K2106の他本例も含め5例が確認されている^(注10)。同志社中学校例(第4図)は、内外面に呉須で文様を描いて

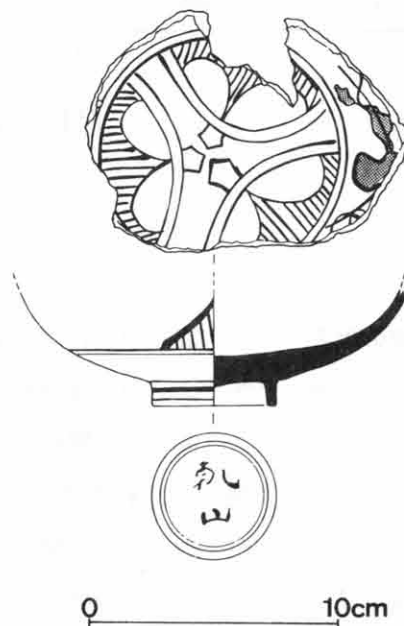
「乾山」銘を総合的に研究した名児耶明^(注7)は、「乾山」銘をA・Cタイプに分類し、AタイプとCタイプの中間の特徴をもつ銘をBタイプとした。Aタイプは、銹絵山水図角皿(第3図1)、銹絵富士山図角皿(第3図2)、染付薄図蓋物(第3図3)のように、簡略化せず「乾」を書いており、「乾」の偏と傍の中心線がほぼ平行している。概ね宝永年間を中心と捉えている。一方、Cタイプは、色絵菊図向付(第3図6)のように「乾」の偏と傍の中心線が八字形に開き、1重ないし2重の枠内に銘を記す例が多くなる。この段階の銘は、Aタイプとは異なり、機械的な書風が目立つことから、乾山自身ではなく、工房の陶工により商標として書かれた可能性が指摘されている。なお、中間的要素をもつBタイプには、銹絵染付葦鶴図蓋茶碗(第3図4)や銹絵樓閣

おり、呉須により「乾山」銘を書いている。このように、出土例は僅かであるが、大量に出土する陶磁器類を丹念に見れば、出土点数が増加することは必至である。

本稿は、乾山焼の事例報告に過ぎないが、乾山自身の人物研究や伝世品の作品研究を基本とした上で、考古学的に捉えることの必要性を指摘しておきたい。

最後に、近世京都の出土事例について教示頂いた京都市埋蔵文化財研究所・吉村正親氏、本稿執筆の契機を提供された当調査研究センター引原茂治氏に感謝する次第である。

(こいけ・ひろし＝当センター調査第2課調査第2係
調査員)



第4図 同志社中学校体育館
S K 2106出土の乾山
(注9より転載)

- 注1 佐藤雅彦「京洛文化の精華」(『乾山 古清水』 日本陶磁全集 第28巻 中央公論社) 1980
- 注2 小池 寛「平安京跡左京一条二坊十四町(左獄・囚獄司)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第63冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注3 小池 寛「平安京跡出土の中国製男子像について」(『京都府埋蔵文化財情報』第57号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注4 小池 寛「新出の朝鮮王朝磁器についてー平安京跡左京一条二坊十四町例ー」(『京都府埋蔵文化財情報』第58号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注5 注2による。
- 注6 乾山焼・碗については、本稿作成のために新たに実測したものであり、注2の文献には掲載できていない。
- 注7 名児耶明「陶器における「乾山」銘について」(『乾山の陶芸』 五島美術館) 1987
- 注8 乾山焼の時期区分については、多くの論文が提示されているが、ここでは、研究史は割愛し、最も参考にした『乾山の陶芸』(五島美術館 1987)を提示おきたい。
- 注9 鈴木重治・松藤和人「同志社キャンパス内出土の遺構と遺物」(『同志社校地内埋蔵文化財調査報告資料編Ⅱ』 同志社大学校地学術調査委員会) 1978
- 注10 山本雅和・鈴木廣司「6. 平安京左京四条四坊」(『平成5年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 (財)京都市埋蔵文化財研究所) 1996

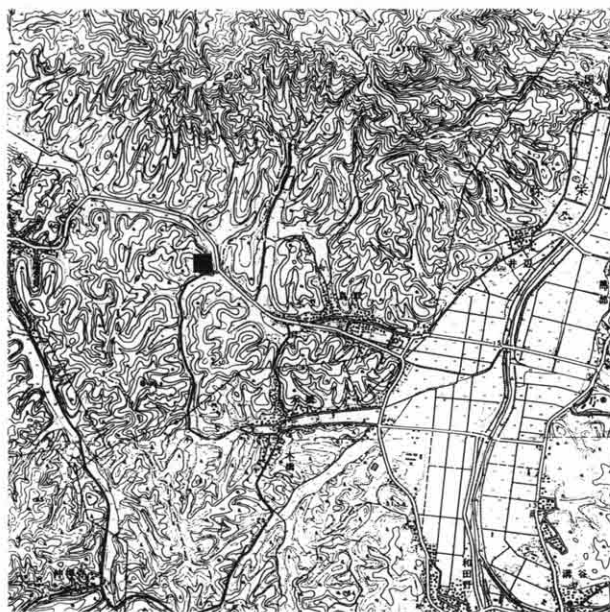
府内遺跡紹介

70. ニゴレ古墳

古墳の概要 羽衣伝説に彩られた丹後半島最大の河川、竹野川は、幅狭い侵蝕谷を形成して北流し、日本海へと注ぐ。そのほぼ中央に位置する弥栄町を、丹後半島を横断する府道網野・岩滝線が通っているが、弥栄町から網野町へ抜ける標高40m程度の低い峠のちょうど手前にニゴレ古墳は現存する。道路沿いに看板があり、その背後のうっそうたる藪が古墳である。「ニゴレ」の由来はわからないが、周辺には古墳～奈良時代の遠所遺跡群とそれに後続するニゴレ遺跡などの製鉄遺跡があり、鉄分を含んだ排水が地名となったのかもしれない。

発掘当初、ほとんどマウンドは認められなかったが、1954年の開墾に伴って多量の埴輪が出土し、峰山高校弥栄分校の郷土史研究同好会によって採取されたことが、古墳の発見につながった。その4年後、弥栄町教育委員会が主体となり、京都大学の樋口隆康氏・西谷真治氏らによって発掘調査が実施され、出土遺物は、京都大学文学部考古学研究室の保管となった。その後、京都大学文学部博物館の所蔵となり、1988年には天理参考館の置田雅昭氏を中心とする出土遺物整理を加えた報告書がまとめられた。

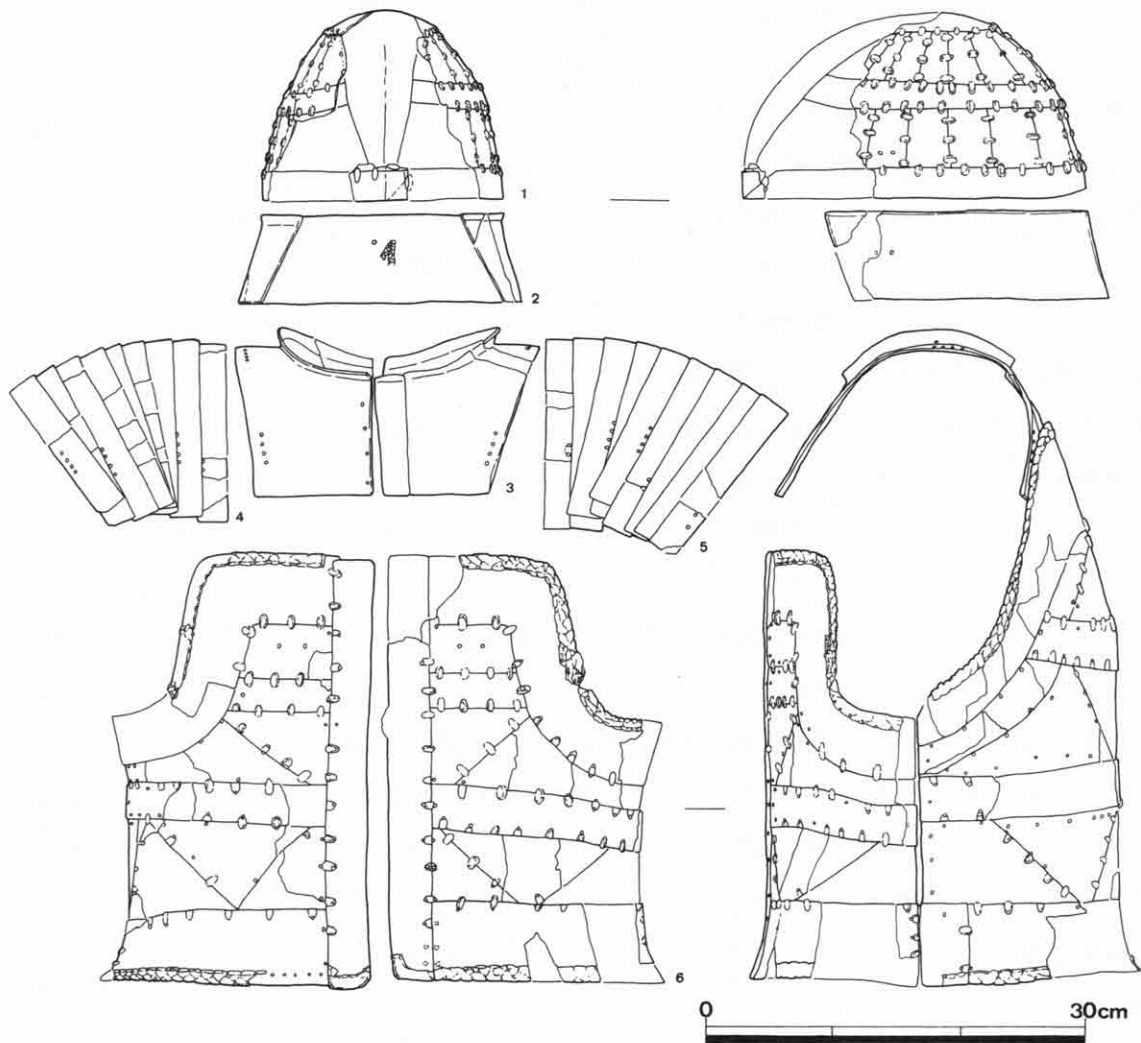
古墳は、全長20m程度の地山を削り出した不整形墳である。北側の丘陵との切り離し溝の底には幅0.8～1.7m間隔で13本の埴輪列がある。葺石・段築はない。墳頂ほぼ中央には2段墓壇に直葬された木棺を検出した。だが、主体部の東半は開墾によって破壊されている。遺骸は東枕で、



第1図 遺跡所在地(1/50,000)

頭側に甲冑を置き、左側に剣、足元に鍬束を副葬する。これは、本号で抄報が掲載された奈具岡北1号墳と酷似した副葬状況である。古墳築造の実年代は420年をさかのぼらない。

古墳の意義 ニゴレ古墳の副葬品は丹後半島では破格だが、中でも完形の鉄製甲冑は注目される。甲は、鉄板37枚を革紐で綴じ合わせた三角板革綴短甲(6)で、肩と頸を防御する付属具(3～5)が付く。1988年に綾部市私市円山古墳で発見されたものと同じ型式である。冑は、長方形の小札を綴じた衝角付冑(1)で、



第2図 ニゴレ古墳出土の鉄製甲冑(1/6) 左:正面図、右:左側面図(肩甲は側面図省略)

頸の裏を防御する1枚の鍔(2)が付く。この型式の衝角付冑は他に類例がない。その理由は、小札構成の冑が副葬品として見られる時期は、前期か、鋌留技法が導入されて以降であるが、この冑は形態・時期ともにそれらとは異なる。中期古墳でみられる、定型化した三角板構成の甲冑が一般的な中で、この冑の存在は異彩を放っている。

ところで、日本海岸にはもう一つ特殊な型式の冑がある。それは、福井県天神山7号墳、石川県辰口茶臼山9号墳にある胴巻板を持たず、細長い鉄板を革綴じした縦矧細板革綴衝角付冑である。現状では北陸に分布が限られるものの、この冑を副葬する古墳はその地域で最初に甲冑を持ち、鉄製武器、なかでも鍔の比重が高く、その鍔は小型軽量を旨として貫通力に優れた尖根式が主体となるといった特徴がある。また、天神山7号墳で金製の長鎖式耳飾があるように、その背景には、朝鮮半島からの金工技術の導入が重要な役割を果たしたことが予想される。確かに、鋌留技法の登場は画期となるが、日本海岸の限定された地区では、別の技術の伝統に乗った革綴冑の製作も行われていたことを見過ごしてはならない。ニゴレ古墳の特異な冑もこれらと共通するものとして捉えられよう。

丹後半島では、ニゴレ古墳以外に、丹後町産土山古墳、網野町離湖古墳が甲冑を副葬する古墳として知られている。いずれも実態は不明であるが、産土山古墳には脇当金具があり、離湖古墳は確実に鋳留技法導入以後のものである。ニゴレ古墳の鉄製甲冑は、産土山古墳と同時期かやや先行し、現状では丹後で最も早く導入されたものと考えられる。ただし、加悦町蛭子山1・2号墳には甲冑形埴輪があって、これが実物を写していれば、未発掘の前期古墳の中にも鉄製甲冑が眠っていても不思議ではない。だが、この埴輪の文様は、革製短甲を表現した可能性が高い。

ニゴレ古墳では多彩な形象埴輪も目を引く。甲冑・船・椅子・家があり、非常に写実的である。甲冑形埴輪は、草摺から冑まで一体で成形されるが、ここで問題としている衝角付冑は三角板を革綴じした様子が表現されており、埴輪製作者がこの小札革綴冑を見ていないことがわかる。船は準構造船、椅子は側板にかなり崩れた直弧文を刻む。これは畿内の形象埴輪と比較しても遜色のないもので、副葬された冑の型式が異なる点を勘案しても、畿内の専門工人が関与したことはほぼ間違いないだろう。

では、ニゴレ古墳が畿内と密接な関係を結ぶ背景は何だろうか。ここで、これに先行する時期の奈具岡北1号墳の存在が注意される。抄報で述べられているように、奈具岡北1号墳の副葬品は鉄製武器の比重が高く、陶質土器や銅釦は朝鮮半島との関係を直接に示すものである。ニゴレ古墳の特殊な冑から推測したように、金工及び鍛冶技術の伝来があるとすれば、奈具岡北1号墳の被葬者はそれに何らかの形で関わっていたものと考えられる。それは、後続する遠所遺跡やニゴレ遺跡のような製鉄遺跡へ継承されたのではなかろうか。丹後では前期の巨大古墳の影に隠れて中期古墳の実態が今一つはっきりしないが、奈具岡北1号墳の発見とニゴレ古墳の再評価が当面の課題となるように思われる。

古墳の案内 北近畿タンゴ鉄道網野駅より丹海バス「弥栄病院前」行きで、鳥取下車。徒歩15分。便数が少ないので車が便利。藪のため、夏期は注意が必要。

(河野一隆)

<参考文献>

樋口隆康「冑形埴輪の新出土例」『考古学雑誌』第42巻第1号 1956

西谷真治・置田雅昭「ニゴレ古墳」(『京都府弥栄町文化財調査報告』第5集 弥栄町教育委員会) 1988

71. 二子山古墳

二子山古墳は、宇治川右岸の宇治丘陵の先端部付近にあって、宇治市から城陽市にかけて広がる宇治川東部古墳群の南端に位置することで知られている。所在地は、宇治市宇治山本で、二子山と古くから通称名で呼ばれていた。実際には、2基の古墳であって、北墳・南墳と呼んでいる。1966年に二子山のある丘陵が宅地になることがわかったため、翌年から発掘調査が実施されて数々の注目すべき結果が得られた。

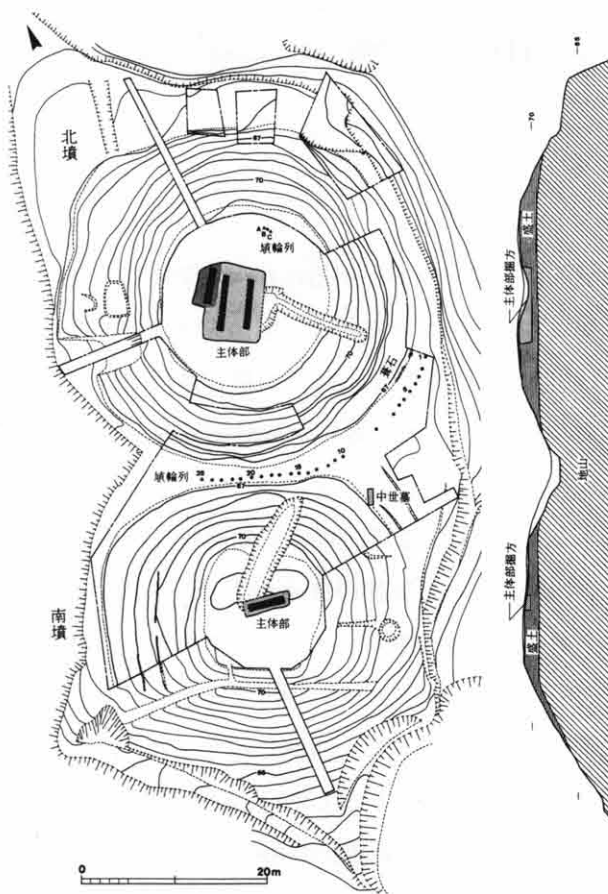
まず、北墳であるが、これは径40m・高さ4.5mを測る円墳で、墳丘の裾部分には円筒埴輪がめぐっていた。また、墳頂部には家形埴輪・盾形埴輪・甕形埴輪の破片が見つかっており、墳丘上にはこのような形象埴輪が立っていたようである。遺体が納められていた主体部は、木棺を粘土にくるんだ形式(粘土槨)や、木棺を直接土の中に納める形式(木棺直葬)で、三つが平行に並んだ状態で発見された。この三つの主体部は、東から東槨・中央槨・西槨と呼んでいるが、東槨と中央槨はすでに盗掘のため、完全に攪乱されて、主体部の端の一部しか残っていなかった。それでも、東槨の盗掘を免れたところからは、鉄斧や鎌などの鉄製品が約100点ほど出土しており、年代も3基の主体部の中で最も早く造られたことがわかった。

北墳の中央槨では、長さが3.4m以上もある割竹形木棺を直葬しており、棺内からやはり鉄斧や鎌などの鉄製品が多く出土した。鉄製品には、武器や農工具が混じっており、また盗掘坑から碧玉製勾玉・剣・甲冑の破片などが見つかった。かつては、相当量の副葬品を伴った主体部であったことが想像される。

1967年の発掘調査で最も成果を挙げたのは、西槨の発見であろう。西槨は、中央槨や東槨とは若干方向が異なっており、不思議と盗掘も受けていなかった。しかも、墓壇掘形の切り合い関係から、この西槨が北墳の中で最も遅く造られたこともわかった。西槨は、長さ3.9mの割竹形木棺を粘土でくるんだ粘土槨で、木棺の上には漆塗りの盾が置かれていた。この盾は、長さが1.5m、幅が0.48mあり、実用品であった可能性がある。副葬品も豊富で、仿製半円方形帯神獣鏡が1面見つかったほか、勾玉・管玉・切子玉といった玉類も多数出土した。また、武器類として、鉄刀・鉄剣以外に、衝角付冑と短甲がセットで見つかった。



第1図 遺跡所在地(1/50,000)



第2図 二子山古墳全体図(『宇治二子山古墳』から転載)

簾などの武具類が多数見つかった。

このように、二子山古墳の南北の両古墳では、相当数の武器類・農工具のほか、特に南墳では馬具や装飾品が見つかった。北墳の被葬者がこの地域を開発した首長のイメージに対して、南墳の被葬者は、北墳の被葬者を継いでこの地方に君臨した首長の姿がほうふつとされる。いずれも、古墳時代中期に入る古墳であるが、時期が引き続いて築造されており、南墳の方がほぼ5世紀後半頃になることがわかっている。5世紀後半は、歴史の上では倭王武のころで、ほぼ全国がヤマト王権のもとに統一され、「大王」が成立する時期といわれている。また、氏姓制度や部民制が始まる時期ともいわれ、こういった時期の首長層の墳墓としても貴重なものといわなければならない。

(土橋 誠)

<参考文献>

- 『京都の文化財』第3集 京都府教育委員会 1969
- 『宇治市史』上巻 宇治市 1973
- 『日本考古学年報』21・22・23 日本考古学協会 1981
- 『宇治二子山古墳』 宇治市教育委員会 1991
- 『発掘ものがたり宇治』 宇治市歴史資料館 1996

次に南墳であるが、南墳にも、北墳と同じように、古墳の中央から裾にかけて盗掘坑が残っていた。墳丘は、径36m・高さ4.5mの規模を持つ円墳で、墳丘上から蓋形埴輪や円筒埴輪の破片が見つかり、北墳と同じようにこれらの埴輪が並べられていたようである。盗掘坑は、埋葬主体部の一部をかすめた程度で、ほとんど残存していた。埋葬主体は、北墳と異なり、墳丘の中央で1か所見つかっただけであった。形式は、組合式木棺を直葬したもので、やはり木棺の上には盾が置いてあった。木棺に沿って刀剣類が副葬され、また木棺の内部からは四葉文鏡や玉類のほか、木棺の東よりのところで、短甲・頸甲・草摺の甲冑一式のほか、武器や馬具類も出土している。また、木棺の西の部分でも衝角付冑・短甲・挂甲がそれぞれセットで副葬され、また胡

長岡京跡調査だより・57

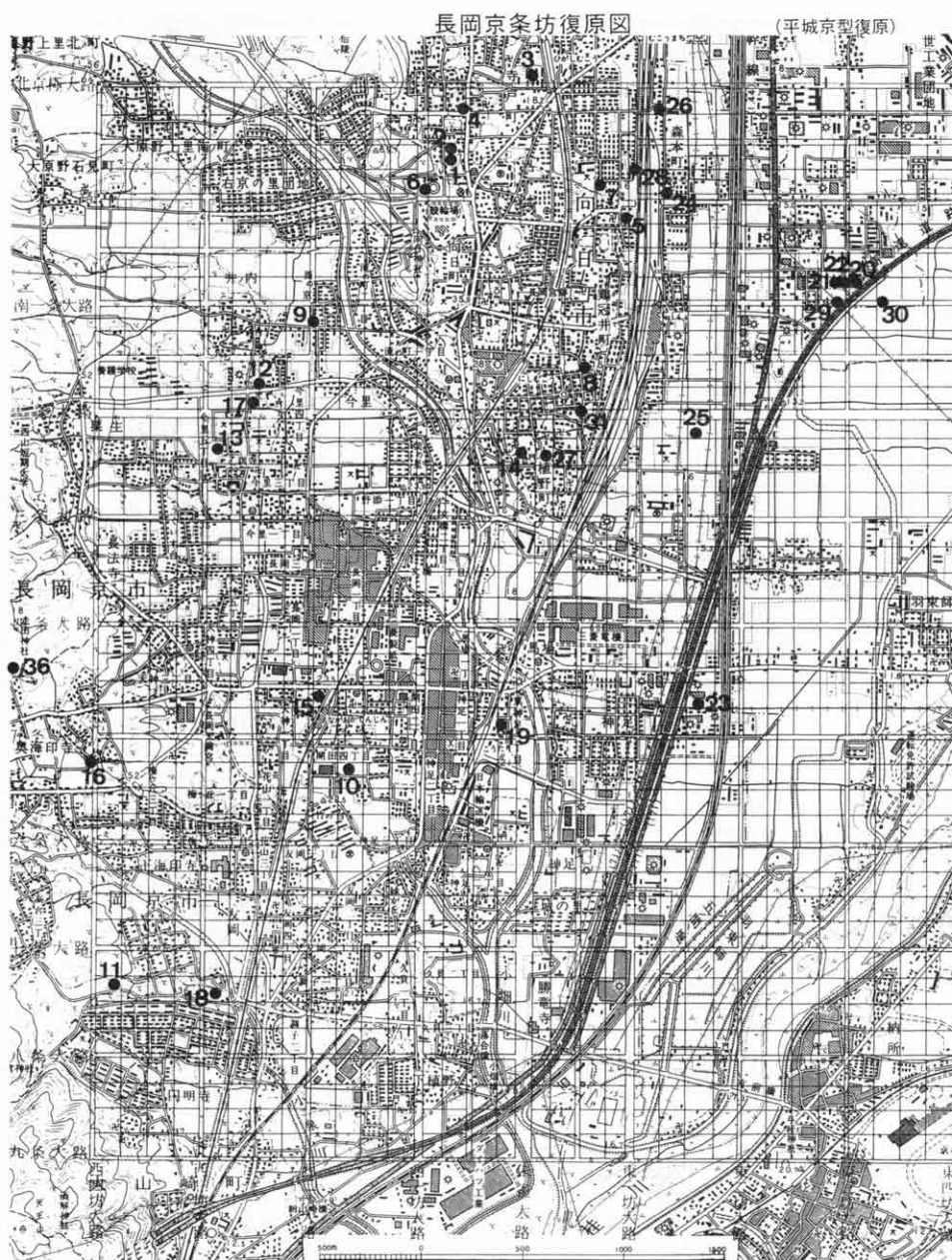
前回の「たより」以降の長岡京連絡協議会は、平成8年2月28日、3月27日、4月24日に開催された。報告のあった京内の発掘調査は、宮内8件、右京域11件、左京域12件であった。京外の7件を併せると38件となる(調査地一覧表と位置図を参照)。この内、主要な報告について調査成果を簡単に紹介する。

調査地一覧表

(1996年4月末現在)

番号	調査次数	地区名	調査地	調査機関	調査期間
1	宮内第295次	7ANBKD	向日市寺戸町南垣内8-2他	(財)向日市埋文	95.3/2~5/30 96.3/4~3/19 4/10~9/9
2	宮内第313次	7ANBMC-4	向日市寺戸町南垣内5	(財)向日市埋文	10/3~1/22
3	宮内第316次	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	10/30~6/21
	宮内第316次 (第3調査区)	7ANBKD	向日市寺戸町小佃	(財)向日市埋文	3/4~8/20
4	宮内第319次	7ANBNC-2	向日市寺戸町中垣内1	(財)向日市埋文	12/4~1/31
5	宮内第321次	7ANDMD-2	向日市森本町前田4-1・5-1	(財)向日市埋文	12/11~2/28
6	宮内第322次	7ANBNN	向日市寺戸町中野17	(財)向日市埋文	2/13~3/20
7	宮内第323次	7ANDST-2	向日市森本町下森本30-6	(財)向日市埋文	2/20~3/23
8	宮内第324次	7ANEIN	向日市鶏冠井町稲葉18-50	(財)向日市埋文	4/16~4/30
9	右京第511次	7ANGKN	長岡京市井ノ内地内	(財)京都府埋文	10/20~
10	右京第515次	7ANKNT-4	長岡京市開田四丁目608-1	長岡京市教委	1/16~1/31
11	右京第516次	7ANSTE-16	大山崎町円明寺鳥居前48-8	大山崎町教委	1/26~2/1
12	右京第517次	7ANIAE-7	長岡京市今里赤ノ上33-1他	(財)長岡京市埋文	2/13~
13	右京第518次	7ANIKI-2	長岡京市今里五丁目121-1	(財)長岡京市埋文	3/4~5/17
14	右京第519次	7ANFNZ-5	向日市上植野町西小路11-2	(財)向日市埋文	3/11~3/29
15	右京第520次	7ANKSC-5	長岡京市天神一丁目320-12	(財)長岡京市埋文	4/10~
16	右京第521次	7ANPIR-1	長岡京市奥海印寺坂ノ尻7	(財)長岡京市埋文	4/12~5/1
17	右京第522次	7ANIAE-9	長岡京市今里四丁目230-1	(財)長岡京市埋文	4/17~
18	右京第523次	7ANSTE-17	大山崎町円明寺鳥居前61	大山崎町教委	4/8~5/20
19	右京第524次	7ANMSL-6	長岡京市東神足一丁目1-1	(財)長岡京市埋文	4/22~
20	左京第361次	7ANVKN-6	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~3/8
21	左京第362次	7ANVKN-7	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~3/8
22	左京第363次	7ANVKN-8	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/10~3/8
23	左京第375次	7ANMKK-5	長岡京市神足上八ノ坪12	(財)長岡京市埋文	12/11~
24	左京第378次	7ANDSB-4	向日市森本町四ノ坪26	(財)向日市埋文	1/8~1/30
25	左京第379次	7ANFYC	向日市上植野町柳ヶ町、極楽寺地内	(財)向日市埋文	1/22~2/8
26	左京第380次	7ANDKD-6	向日市森本町上町田6-11	(財)向日市埋文	2/13~3/28
27	左京第382次	7ANFKZ-3	向日市上植野町西小路41-3	(財)向日市埋文	4/3~4/5
28	左京第383次	7ANDST-3	向日市森本町下森本17-2	(財)向日市埋文	4/3~5/15
29	左京第384次	7ANVKN-9	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	4/8~
30	左京第385次	7ANVKN-10	京都市南区久世東土川町金井田	(財)京都府埋文	6/3~

	左京第385次 (B-8地区)	7ANVST-6	京都市南区久世東土川町正登	(財)京都府埋文	6/3～
31	左京第386次	7ANFJK-7	向日市上植野町浄徳11-9	(財)向日市埋文	4/16～5/31
32	笹屋遺跡第3次	7ASBSY	向日市寺戸町笹屋10-26	(財)向日市埋文	1/30～2/1
33	北ノ口遺跡第1次	4ZKAKC	向日市物集女町北ノ口61-2	(財)向日市埋文	95.12/8 96.3/1
34	中海道遺跡第37次	3NNANK-37	向日市物集女町中条2-1	(財)向日市埋文	4/1～4/18
35	中海道遺跡第38・ 39・40次	3NNANK-38・ 39・40	向日市物集女町中条23-5・23・ 中条地内	(財)向日市埋文	4/2～5/31
36	走田古墳群第2次	4PHPHD	長岡京市奥海印寺走田1-1・2- 3・2-4	(財)長岡京市埋文	2/7～2/26
37	山城国府跡第38次	7XYS' TH-3	大山崎町大山崎高橋21-20	大山崎町教委	1/23～1/31
38	山城国府跡第39次	7XYS' CM-3	大山崎町大山崎茶屋前17	大山崎町教委	4/9～4/26



調査地位置図

▽番号は一覧表・本文()内と対応

宮内第316次(3)

(財) 向日市埋蔵文化財センター

調査地は、推定北京極大路の北40m及び仮称朝堂院中軸宮内道路の東65mのところを第1調査区、第1調査区のさらに北10mのところを第2調査区、仮称朝堂院中軸宮内道路の西10mのところを第3調査区と3か所に分けて調査を実施している。

第1調査区では、掘立柱建物跡が検出され、その柱掘形内から長岡宮式軒丸瓦7171型式が2点、7192型式が4点出土した。この建物跡の規模や企画性の点から、推定北京極大路を挟んで北側には、官衙的施設が配置されていた可能性がある。第2調査区では、逆「L」字状の溝の北肩付近から多数の平瓦が出土した。また、第3調査区では、築地の基壇と思われる南北方向の積み土を帯状に検出した。さらに、基壇を中心として東と西約3.6mの溝を確認しており、雨落ち溝と考えられる。

今回の調査により、長岡京推定北京極大路より北の地域の状況を明らかにする手がかりが得られた。今後の調査の進展を待ちたい。

左京第361・362・
363次、東土川遺跡
(20・21・22)

(財) 京都府埋蔵文化財調査研究センター

調査地は、左京南一条三坊十三町(新呼称左京二条三坊十五町)と同左京南一条四坊四町(新呼称左京二条四坊二町)の下層にあたる。弥生時代の集落を囲む2条の環濠、5基の方形周溝墓、多数の水田跡などが確認された。環濠は、北西から南東にやや弧状を描いて横切るもので、断面が「V」字形を呈する。方形周溝墓の溝内からは弥生時代中期の土器が出土した。一番南よりの方形周溝墓の周溝の四辺の中央部で、溝内埋葬の痕跡かと思われる土壌を検出した。また、調査地の西半部のほぼ全域で150枚ほどの水田を検出した。この水田は、面積の大小があるが、平均10.4㎡を測る。各遺構の時期は、特定されていないが、環濠及び方形周溝墓群は、弥生時代中期のもので、水田も同時期の可能性が高い。

水田が弥生時代中期のものであれば、環濠に囲まれた集落に隣接して周溝墓が造られ、その外側に、水田が広がるという弥生時代中期の集落の景観を復原できることになる。

(古瀬誠三)

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター組織及び職員一覧

(平成8年6月1日現在)

理事長

樋口 隆康

(京都府文化財保護審議会会長・京都大学名誉教授)

副理事長

中澤 圭二

(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)

常務理事

木村 英男

理事

川上 貢

(京都府文化財保護審議会会長職務代理・
京都大学名誉教授)

上田 正昭

(京都府文化財保護審議会委員・京都大学名誉教授)

藤井 学

(奈良大学文学部教授)

佐原 眞

(国立歴史民俗博物館副館長)

足利 健亮

(京都大学大学院人間・環境学研究科長)

都出比呂志

(大阪大学文学部教授)

井上 満郎

(京都産業大学法学部教授)

藤田 价浩

(西芳寺貫主)

堤 圭三郎

梅野 宏

(京都府府民労働部文化芸術室長)

武田 暹

(京都府教育庁指導部長)

中谷 雅治

(京都府教育庁指導部文化財保護課長)

監事

高橋 善男

(京都府出納管理局長)

吉田三枝子

(京都府監査委員事務局長)

事務局長 木村 英男

事務局次長 園山 哲・安藤 信策

総務課 課長 園山 哲(兼)

課長補佐 安田 正人

総務係長 安田 正人(兼)

主事 杉江 昌乃 今村 正寿

西村 晃 鍋田 幸世

西林 紀子

事務員 倉西 雅子

調査員 橋本 清一

(府立山城郷土資料館へ派遣)

調査課 課長 小山 雅人

第1課 課長補佐 水谷 壽克

企画係長 水谷 壽克(兼)

調査員 津村 正樹

資料係長 小山 雅人(事務取扱)

主任調査員 松井 忠春・土橋 誠

調査員 田中 彰

調査課 課長 安藤 信策(兼)

第2課 課長補佐 平良 泰久・奥村清一郎

調査第1係長 伊野 近富

主任調査員 竹原 一彦

調査員 黒坪 一樹 岡崎 研一

柴 暁彦 河野 一隆

村田 和弘

調査補佐員 橋本 稔

調査第2係長 辻本 和美

主任調査員 石井 清司・増田 孝彦

調査員 竹下 士郎 田代 弘

小池 寛 野々口陽子

奈良 康正 筒井 崇史

調査第3係長 奥村清一郎(兼)

主任調査員 引原 茂治

主査調査員 石尾 政信 古瀬 誠三

調査員 伊賀 高弘 森下 衛

森島 康雄 有井 広幸

大岩 洋一

調査第4係長 平良 泰久(兼)

主任調査員 戸原 和人

主査調査員 竹井 治雄

調査員 岩松 保 中川 和哉

八木 厚之 野島 永

センターの動向（8.2～4）

1. できごと

2. 9 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿

ブロック主担者会議（於：長岡京市中央公民館）安藤事務局次長、水谷課長補佐出席

13～14 全国埋蔵文化財法人連絡協議会

近畿ブロック会議（於：京都市）木村常務理事・事務局長、園山事務局次長、安田課長補佐出席

15 東土川遺跡・長岡京跡左京第361・362・363次調査（京都市南区）現地説明会

18 京北町文化財講演会（於：京北町役場）講師：小池調査員

20 文化庁西田調査官、東土川遺跡・長岡京跡左京第361・362・363次調査（京都市南区）現地視察

内里八丁遺跡（八幡市）下層面現地説明会

21 浦入西古墳群（舞鶴市）発掘調査開始

22 引地城跡（大江町）関係者説明会

23 棕ノ木遺跡（精華町）関係者説明会

24 第75回埋蔵文化財セミナー開催（別掲）

27 石ヶ原古墳群（丹後町）関係者説明会 長岡京跡右京第511次調査（長岡京市井ノ内）関係者説明会

28 木村常務理事・事務局長、篠窯跡群現地視察

長岡京連絡協議会

浦入遺跡（舞鶴市）発掘調査終了

（12.4～）

浦入西古墳群発掘調査終了（2.21～）

篠窯跡群発掘調査終了（1.23～）

長岡京跡右京第511次調査（長岡京市井ノ内）発掘調査終了（10.20～）

内里八丁遺跡発掘調査終了（4.20～）

棕ノ木遺跡（精華町）発掘調査終了（11.20～）

29 職員研修一同和問題職員研修・2—

3. 2 埋蔵文化財研究集会（於：金沢市）奥村課長補佐、河野・村田調査員出席

向日市文化資料館歴史講座（於：向日市）講師：中川調査員

3. 3 スライドでみる乙訓の発掘（於：大山崎町）講師：竹井主査調査員

8 東土川遺跡・長岡京跡左京第361・362・363次調査（京都市南区）発掘調査終了（4.10～）

27 長岡京連絡協議会

第46回役員会・理事会（於：ホテルニュー京都）、樋口隆康理事長、中澤圭二副理事長、木村英男常務理事、上田正昭、藤井 学、足利健亮、佐原 眞、都出比呂志、梅野 宏、武田 暹、堤圭三郎の各理事、奥田俊治、吉田三枝子の各監事出席

29 監事退任、退職職員辞令交付（別掲）

4. 1 理事、監事就任（別掲）

新規採用職員辞令交付（別掲）

8 長岡京跡左京第384次・385次調査（京都市東土川町）発掘調査開始

- 11 奈具岡北古墳群・奈具岡南古墳群・
奈具岡遺跡(弥栄町)発掘調査開始
- 16 浦入遺跡・浦入西古墳群(舞鶴市)発
掘調査開始
内里八丁遺跡(八幡市)発掘調査開始
- 17 総務課職員採用試験実施
- 22 黒部遺跡(弥栄町)発掘調査開始
- 24 長岡京連絡協議会
堤圭三郎理事、長岡京跡左京第384
次・385次調査現地視察
- 30 退職職員辞令交付(別掲)

2. 普及啓発事業

- 2.24 第75回埋蔵文化財セミナー開催(於:

京都市)一都と城―戸原和人「長岡京
の邸宅跡」、大岩洋一「戦国期の山城」、
福島克彦「縄張りから見た大俣城」

3. 人事異動

- 3.29 奥田俊治監事退任
尾崎昌之調査員退職(久御山町立久
御山中学校へ)
- 4. 1 中谷雅治理事、高橋善男監事就任
津村正樹調査員採用(京都府教育庁
から)
- 30 松尾幸枝主事退職

(安藤信策)

受贈図書一覧（8.2～4）

- (財)北海道埋蔵文化財センター
 苫小牧市埋蔵文化財調査センター
 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
 水沢市埋蔵文化財調査センター
 (財)いわき市教育文化事業団
 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 (財)千葉県文化財センター
 (財)印旛郡市文化財センター
 (財)山武郡市文化財センター
 (財)市原市文化財センター
 (財)長生郡市文化財センター
- (財)北海道埋蔵文化財センター調査報告書第91集 高岡1遺跡(2)、同第92集 キウス5遺跡・キウス7遺跡(2)・ケネフチ8遺跡、同第93集 大中山13遺跡(2)、同第94集 滝里遺跡群V 芦別市滝里4遺跡(1)、同第95集 美沢15遺跡、同第96集 オサツ2遺跡(1)・オサツ14遺跡、調査年報7 平成6年度 美沢東遺跡群発掘調査概要報告書Ⅲ
- 柳之御所遺跡発掘調査展、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第202集 上村遺跡発掘調査報告書、同第203集 猪川館跡遺跡発掘調査報告書、同第210集 馬場館遺跡・小吹野遺跡発掘調査報告書、同第211集 本内I遺跡発掘調査報告書、同第212集 上野々遺跡発掘調査報告書、同第213集 柳上遺跡発掘調査報告書、同第214集 岩崎台地遺跡群発掘調査報告書、同第215集 大渡II遺跡発掘調査報告書、同第216集 志羅山遺跡第14・25次発掘調査報告書、同第217集 荒田Ⅲ・荒田Ⅳ遺跡第1次発掘調査報告書、同第218集 大畑I遺跡・大畑II遺跡発掘調査報告書、同第219集 水吉IV遺跡発掘調査報告書、同第220集 上米内遺跡発掘調査報告書、同第221集 西田東遺跡発掘調査報告書、同第222集 土場遺跡発掘調査報告書、同第223集 田代IV遺跡・田代VI遺跡発掘調査報告書、同第224集 松屋敷遺跡発掘調査報告書、同第226集 本宮熊堂B遺跡第1次発掘調査報告書、同第227集 上八木田I遺跡発掘調査報告書、同第229集 岩手県埋蔵文化財発掘調査略報(平成6年度)、紀要 XV(平成6年度)
- 胆沢城跡 平成6年度発掘調査概報、岩手県水沢市文化財報告書第28集 柳沢館遺跡、同第29集 熊之堂・跡呂井館・中平館・梨畑・二ツ瀨遺跡
- いわき市教育文化事業団 年報6、いわき市教育文化事業団研究紀要第7号
- (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第162集 二之宮谷地遺跡、同第174集 飛石の砦跡・東平井塚間遺跡・東平井官正前遺跡・東平井土井下遺跡・西平井久保田代遺跡、同第188集 内匠日向周地遺跡・下高瀬寺山遺跡・下高瀬前田遺跡、同第194集 中高瀬観音山遺跡
- 千葉県文化財センター調査報告第241集 千原台ニュータウンⅥ、同第260集 松戸市岩瀬塚田遺跡、同第261集 船橋市古作中台遺跡、同第262集 成田市三里塚御料牧場遺跡、同第263集 成田市大袋塔之下遺跡、同第264集 新東京国際空港埋蔵文化財調査報告書Ⅸ、同第265集 新シ山・柳和田台遺跡・青山中峰遺跡・青山宮脇遺跡、同第266集 袖ヶ浦市文脇遺跡、同第267集 佐倉市六拾部遺跡、同第268集 佐倉市池向遺跡、同第273集 芝山町大谷遺跡、同第274集 流山市野々下貝塚確認調査報告書、同第275集 四街道市堂ノ後遺跡、研究連絡誌 第43、44号、千葉県文化財センター年報 No.10
- (財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第71集 高岡遺跡群Ⅳ、同第74集 一之綱I・鉄砲作遺跡発掘調査報告書、同第91集 公津東遺跡群Ⅱ、同第98集 大蛇石橋台遺跡発掘調査報告書、同第104集 白井台大名宿遺跡、同第107集 白井屋敷跡遺跡、同第108集 木村留古墳群(7・8号墳)
- (財)山武郡市文化財センター発掘調査報告書第26集 居合台遺跡
- 市原市文化財センター年報(平成3年度)、10年の軌跡
- (財)長生郡市文化財センター調査報告第29集 川島遺跡、同第30集 長尾遺跡群、同第31集 庄吉遺跡、長生郡市文化財センター年報No.9、睦沢町埋蔵文

(財)横浜市ふるさと歴史財
団埋蔵文化財センター

神奈川県立埋蔵文化財セン
ター

富山県埋蔵文化財センター

(財)岐阜県文化財保護セン
ター

(財)瀬戸市埋蔵文化財セン
ター

(財)滋賀県文化財保護協会

(財)栗東町文化体育振興事
業団

(財)枚方市文化財研究調査会
桜井市立埋蔵文化財センター

(財)和歌山県文化財センター
岡山県古代吉備文化財セン
ター

(財)広島市歴史科学教育事
業団

(財)徳島県埋蔵文化財セン
ター

(財)香川県埋蔵文化財調査
センター

(財)愛媛県埋蔵文化財調査
センター

福岡市埋蔵文化財センター

深川市教育委員会
岩手県教育委員会
栃木県教育委員会

足利市教育委員会
前橋市教育委員会

鴻巣市教育委員会

千葉市教育委員会
市原市教育委員会

化財報告書第八輯 石川横穴墓群B支群発掘調査報告書、本納城外郭跡-2
雑色杉本遺跡発掘調査報告、古梅谷遺跡、川和向原遺跡・原出口遺跡

『眠りからさめた古代』、平成7年度かながわの遺跡展「謎の敷石住居」、か
ながわの考古学第5集 神奈川の考古学の諸問題(Ⅱ)

富山県埋蔵文化財センター年報 平成6年度

岐阜県文化財保護センター調査報告書第12集 長吉遺跡・普賢寺跡、同第14
集 仲迫間遺跡

(財)瀬戸市埋蔵文化財センター調査報告第11集 東拝戸A窯跡、同第12集 赤
重窯跡

いにしへの渡りびと、25年のねんりん、慈恩寺・金剛寺遺跡、尼子遺跡、北
落古墳群Ⅱ、大通寺古墳群、湯ノ部遺跡発掘調査報告書Ⅰ、芝原遺跡・出路
遺跡

栗東町埋蔵文化財発掘調査 1994年度年報

枚方市文化財年報15、枚方市民俗文化財調査報告4 旧川越村
大和の大王の埴輪

川辺遺跡発掘調査報告書、根来寺坊院跡、西庄遺跡発掘調査Ⅰ

岡山県埋蔵文化財発掘調査報告104 津寺遺跡3、同105 斎富遺跡、同106 百
間川原尾島遺跡5、同107 南溝手遺跡2、同108 中池ノ内遺跡、同109 田益
新田遺跡・西山古墳群、同110 絵図遺跡・南方遺跡、同111 西大沢古墳群・
畑ノ平古墳群・虫尾遺跡・黒土中世墓・茂平古墳・茂平城、同112 田益新田
遺跡・青谷5号墳、同113 宮地遺跡・大木遺跡・大木古墳群・粧田山城跡・
大村遺跡ほか、同114 百間川兼基遺跡2・百間川今谷遺跡2

(財)広島市歴史科学教育事業団調査報告書第15集 広島城関連遺跡発掘調査
報告、同第16集 串山城遺跡発掘調査報告、同第17集 黒谷遺跡発掘調査報告、
古代の布づくりと土器づくり体験
埋蔵文化財速報展「縄文の彩り」

四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第十九冊 綾南奥下池
南遺跡、同第二十冊 飯野・東二瓦礫遺跡、同第二十一冊 川津下樋遺跡、同
第二十二冊 川西北・七条Ⅱ遺跡 川西北・鍛冶屋遺跡

埋蔵文化財発掘調査報告書第59集 一般国道11号重信道路埋蔵文化財発掘調
査報告書、同第60集 一般国道196号松山環状線埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅲ
福岡市埋蔵文化財センター年報 第14号

内園6遺跡

岩手県文化財調査報告第97集 岩手県内遺跡発掘調査報告書

栃木県埋蔵文化財調査報告第115集 十三塚遺跡、同第126集 小佐越遺跡、同
第137集 谷館野東・谷館野西・上芝遺跡、同第152集 寺野東遺跡、同第160
集 金山遺跡Ⅲ、同第182集 横倉遺跡

足利市埋蔵文化財調査報告第30集 平成6年度埋蔵文化財発掘調査年報

大屋敷遺跡Ⅲ、中原遺跡群Ⅳ、荒砥青柳Ⅱ遺跡(6E31)、五反田Ⅱ遺跡、柳
橋遺跡(6A68)、平成6年度 市内遺跡発掘調査報告書

鴻巣市遺跡調査会報告書第7集 伝源経基館跡、同第9集 鴻巣市の近世社寺
建築

埋蔵文化財調査(市内遺跡)報告書 平成7年度

平成7年度 市原市内遺跡発掘調査報告

富津市教育委員会	平成7年度 富津市内遺跡発掘調査報告書
東金市教育委員会	平成7年度 東金市内遺跡発掘調査報告書
北区教育委員会	北区埋蔵文化財調査報告第17集 袋低地遺跡・道合遺跡、同第18集 志茂遺跡・神谷遺跡、同第19集 田端西台通遺跡Ⅲ・田端不動坂遺跡Ⅲ
日野市教育委員会	日野市埋蔵文化財発掘調査報告20 平山遺跡1、同21 田中藤重による共同住宅建築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書、同23 日野市埋蔵文化財発掘調査輯報Ⅶ、同26 南広間地遺跡5、同28 (株)大京Ⅰ・Ⅱ共同住宅建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
伊那市教育委員会	舟窪西遺跡
婦中町教育委員会	各願寺前遺跡発掘調査報告、小倉中稲遺跡発掘調査報告
勝山市教育委員会	勝山市埋蔵文化財調査報告第9集 大島田遺跡、同第11集 白山平泉寺遺跡
岐阜市教育委員会	岐阜市遺跡詳細分布調査報告書、平成5～7年度 岐阜市埋蔵文化財調査報告書、平成7年度 市内遺跡発掘調査報告書
浜松市教育委員会	浜松城跡 考古学的調査の記録から
菊川町教育委員会	菊川町埋蔵文化財報告書第30集 堀田遺跡Ⅲ発掘調査報告書、同第31集 高田ヶ原遺跡第6次・第7次発掘調査報告書、同第32集 後久遺跡発掘調査報告書、同第33集 堀田東遺跡発掘調査報告書、同第34集 小太郎砦発掘調査報告書、平成6年度 文化財事業年報 第2号
豊橋市教育委員会	豊橋市埋蔵文化財調査報告書第26集 高井遺跡、同第27集 外神遺跡、同第28集 王郷遺跡
稲沢市教育委員会	稲沢市文化財調査報告X LⅣ 稲沢市内遺跡発掘調査報告書(Ⅱ)、北市場町地内埋蔵文化財発掘調査報告書
大津市教育委員会	大津市埋蔵文化財調査報告書(24)大谷南遺跡発掘調査報告書
能登川町教育委員会	能登川町埋蔵文化財調査報告書第35集 斗西遺跡(4次調査)・法堂寺遺跡(5次調査)、同第36集 林・石田遺跡、同第37集 横受遺跡(第2次)・中村堂遺跡(第3次)・法堂寺遺跡(第7次)
阪南市教育委員会	阪南市埋蔵文化財報告XⅨ 阪南市埋蔵文化財発掘調査概要X
豊中市教育委員会	豊中市文化財調査報告第37集 豊中市埋蔵文化財発掘調査概要
岸和田市教育委員会	岸和田市文化財調査概要21 平成7年度、岸和田市文化財調査概要報告2 久米田古墳群発掘調査概要Ⅱ、岸和田市埋蔵文化財発掘調査報告書2 上松宮之遺跡、同3 岸和田城遺跡
泉南市教育委員会	泉南市文化財年報1、第8回歴史の華ひらく泉南シンポジウム 仏教の受容と古代国家、岡田西・氏の松遺跡発掘調査報告書 泉南市文化財調査報告書第28集、泉南市民俗資料調査報告2 泉南市山間部言語調査報告、同3 泉南市信達葛畑・信達楠畑地区民俗資料調査報告
兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所	兵庫県文化財調査報告第31冊 筒江遺跡群Ⅰ、同第96冊 坂井寺ヶ谷遺跡、同第108冊 堂田・八反長遺跡、同第115冊 相野古窯跡群、同第116冊 初田館跡、同第118冊 柏原陣屋跡、同第119冊 岡遺跡、同第120冊 長尾・沖田遺跡(Ⅱ)・岡ノ平遺跡、同第121冊 浄谷遺跡・南山古墳群・玉津田中遺跡南大山地、同第122冊 国領遺跡(Ⅱ)、同第126冊 内場山城跡、同第128冊 大田町遺跡、同第129冊 石垣山古墳群・石垣山遺跡、同第131冊 下加茂遺跡、同第132冊 御坂遺跡、同第134冊 六角遺跡、同第135冊 玉津田中遺跡、同第136冊 山崎山古墳群発掘調査報告、同第137冊 大池7号墳、同第141冊 西脇古墳群、同第144冊 加佐山城跡・慈眼寺山城跡、同第145冊 小田城跡発掘調査報告書、同第146冊 高田小山ノ下遺跡発掘調査報告書、同第148冊 真南条上3号墳
中町教育委員会	中町文化財報告10 貝野前遺跡
御所市教育委員会	橘原遺跡Ⅱ 御所市文化財調査報告書第18集、名柄遺跡第4次発掘調査報告

榛原町教育委員会	同第19集 はいばら 野の花四季、榛原町内遺跡発掘調査概要報告書 1993、1994年度、榛原町遺跡調査集Ⅰ 榛原町文化財調査概要15
和歌山市教育委員会	和歌山市文化体育振興事業団調査報告書第11集 鳴神Ⅳ遺跡第4次発掘調査概報、同第12集 鳴神Ⅵ遺跡第6次発掘調査概報、同第13集 太田・黒田遺跡第26次発掘調査概報、和歌山市埋蔵文化財発掘調査年報1、同2
山口市教育委員会	山口市埋蔵文化財調査報告第52集 山口市内遺跡詳細分布調査、同第53集 宮の前遺跡
久留米市教育委員会	上津・藤光遺跡群Ⅰ 久留米市文化財調査報告書第80集、日渡遺跡 同第85集、上津・藤光遺跡群 同第86集、安武地区遺跡群Ⅷ 同第87集、東部地区埋蔵文化財調査報告書第13集 同第88集、筑後国府跡 平成5年度発掘調査概要 同第89集、ヘボノ木遺跡 平成5年度発掘調査概要 同第90集、神道遺跡第15次発掘調査 同第91集、大善寺北部地区遺跡群Ⅲ 同第92集、津福古賀畑遺跡 同第93集、野中三十六遺跡 同第94集、津福西小路遺跡 同第95集、久留米城外郭佐々木家屋敷跡 同第96集、平成6年度 久留米市内遺跡群 同第97集、ヘボノ木遺跡 平成6年度発掘調査概要 同第98集、安武地区遺跡群Ⅸ 同第99集、筑後国府跡 同第100集、史跡 御塚・権現塚古墳 同第101集、大善寺北部地区遺跡群Ⅳ 同第102集
宗像市教育委員会	富地原森 宗像市文化財調査報告書第40集
大野城市教育委員会	大野城市の文化財 第27、28集、大野城市文化財調査報告書第43集 水城跡1、同第44集 牛頸塚原遺跡群、同第45集 小水城周辺遺跡、同第46集 牛頸屏風田遺跡
津屋崎町教育委員会	津屋崎町文化財調査報告書第10集 在自遺跡群Ⅱ
遠賀町教育委員会	遠賀町文化財調査報告書第7集 尾崎・天神遺跡Ⅲ、同第8集 豊前坊古墳群・経塚
土浦市上高津貝塚ふるさと歴史の広場	縄文土器の一生
栃木県立博物館	写ーコピー文化再考ー
浦和市立郷土博物館	浦和市博物館研究調査報告書 第23集
国立歴史民俗博物館	国立歴史民俗博物館研究報告 第64集
千葉市立加曽利貝塚博物館	貝塚博物館紀要 第23号
船橋市郷土資料館	地域研究資料1 地形図
芝山町立芝山古墳・はにわ博物館	平成7年度 芝山町内遺跡発掘調査報告書
東京国立博物館	須恵器集成Ⅰ(近畿篇)本編
出光美術館	出光美術館 館報第92、93号
大田区立郷土博物館	企画展「考古学トイレ考」
世田谷区立郷土資料館	平成7年度企画展 喜多見の遺跡
調布市郷土博物館	調布市埋蔵文化財調査報告31 蟹沢横穴墓群
氷見市立博物館	氷見の祭りと年中行事
福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館	特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅴ、特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡平成6年度発掘調査環境整備事業概要(26)、一乗谷朝倉氏遺跡資料館紀要1994
敦賀市立博物館	敦賀市立博物館 紀要第10、11号
静岡市立登呂博物館	静岡市立登呂博物館 館報第6号、登呂の弥生人4
浜松市博物館	川の前遺跡、若林・村西遺跡
名古屋市見晴台考古資料館	片山神社遺跡第2次発掘調査報告書
斎宮歴史博物館	史跡斎宮跡 県道南藤原・竹川線発掘調査報告、史跡斎宮跡 平成4～6年度

大津市歴史博物館	発掘調査概報
大阪府立近つ飛鳥博物館	土に刻まれた歴史－近江の古代を掘る
岸和田市立郷土資料館	仁徳陵古墳－築造の時代、大阪府立近つ飛鳥博物館 館報 1
吹田市立博物館	春季特別展 泉州の寺社縁起
播磨町郷土資料館	平成 8 年度企画展 禅僧雲居希膺
香芝市二上山博物館	館報 平成 7 年度
	ふたかみ 3 1993(平成 5)年度香芝市二上山博物館年報・紀要、よみがえる二上山の 3 つの石
橿原市千塚資料館	平成 7 年度特別展『橿原遺跡とその時代』
奈良国立文化財研究所飛鳥資料館	山田寺 飛鳥資料館カタログ第11冊
和歌山県立紀伊風土記の丘管理事務所	紀伊風土記の丘年報 第22号、古代の塩作りと海
大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館	大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館報告書第13集 六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅱ、同第15集 六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅲ、同第17集 六郷山寺院遺構確認調査報告書Ⅳ
ミュージアム知覧	ミュージアム知覧館報第 2 号
東北学院大学学術研究会	東北学院大学論集－歴史学・地理学－第28号
山形史学会	山形大学史学論集 第16号
筑波大学歴史・人類学系	筑波大学 先史学・考古学研究第 7 号、笠間市西田遺跡の研究
早稲田大学本庄校地文化財調査室	大久保山Ⅳ
日本大学史学会	史叢 第54・55合併号
青山学院大学史学研究室	胙台遺跡・北台遺跡
立教大学学芸員課程研究室	Mouseion 41
法政大学文学部考古学研究室	伊藤鉄夫・陽夫考古学資料目録Ⅱ
東海大学史学会	東海史學 第30号
愛知学院大学文学会	愛知学院大学論叢 文学部紀要第25号
滋賀大学教育学部	滋賀史学会誌 第 7、9 号
関西大学文学部考古学研究室	寺谷銚子塚・小銚子塚古墳測量図
大阪大学文学部	待兼山論叢 第29号
大谷女子大学資料館	社・上中遺跡 大谷女子大学資料館報告書第33冊
大手前女子大学	大手前女子大学論集 第29号
奈良女子大学	奈良女子大学構内遺跡発掘調査概報Ⅴ
奈良大学図書館	奈良大学紀要 第24号
天理大学附属天理参考館	天理参考館 資料を語る
岡山理科大学図書館	自然科学研究所研究報告第21号
岡山大学埋蔵文化財調査研究センター	岡山大学構内遺跡発掘調査報告第10冊 津島岡大遺跡
加計学園埋蔵文化財調査室	加計学園埋蔵文化財調査室発掘調査報告書 1 津島東 3 丁目遺跡第 1 地点・清水谷遺跡
熊本大学文学部考古学研究室	高畑赤立遺跡、用見崎遺跡
鹿児島大学埋蔵文化財調査室	鹿児島大学埋蔵文化財調査室年報Ⅸ・Ⅹ、釘田第一地点(鹿児島大学教養部)遺跡発掘調査報告
宮城県多賀城跡調査研究所	宮城県多賀城跡調査研究所年報1994 多賀城跡、多賀城関連遺跡発掘調査報告書第20冊 桃生城跡Ⅲ

国立国会図書館	日本全国書誌第5、8、16号
(株)名著出版	歴史手帖 第24号2～5号
(株)講談社	歴史発掘⑨ 埴輪の世紀
(株)メル プランニング	〈グラフィティ・日本謎事典④〉 奈良1,300YEARS AGO
雄山閣出版(株)	須恵器集成図録 第2巻 近畿編Ⅱ
府中病院内遺跡調査会	武蔵台遺跡Ⅲ
葛飾区遺跡調査会	葛飾区遺跡調査会調査報告第31集 葛西城ⅩⅧ
久保田遺跡調査会	久保田遺跡
(財)府中文化振興財団	府中市郷土の森紀要 第9号
(財)韓国文化研究振興財団	青丘学術論集 第8号
宮内庁書陵部	書陵部紀要 第47号
玉川文化財研究所	羽沢大道遺跡発掘調査報告書、東谷戸遺跡発掘調査報告書、瀧之前遺跡発掘調査報告書
黒川地区遺跡調査団	新作二丁目遺跡発掘調査報告書、中村遺跡D地点、黒川地区遺跡群報告書Ⅶ
(財)古代学協会	古代文化 第48巻第2～4号、古代学研究所研究紀要 第5輯
高砂市教育センター	ふるさと文化財冊子1 高砂市ふるさとの文化財
姫路市立城郭研究室	城郭研究室年報 第5号
奈良国立文化財研究所	古代都城制研究集会第1回報告書 古代都城の儀礼空間と構造、奈良国立文化財研究所学報第54冊 平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告
重点領域研究『遺跡探査』事務局	第4回研究成果検討会議論文集
奈良県立橿原考古学研究所	橿原考古学研究所年報20 平成5年度、龍王山古墳群 奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第68冊、奈良県遺跡調査概報 1990、1992、1993年度、郡山城の発掘調査 1989年度概報、平城京左京三条一坊十四坪発掘調査報告、平城京左京二条二坊・三条二坊発掘調査報告、加守廃寺概報
埋蔵文化財天理教調査団	布留遺跡三島(里中)地区発掘調査報告書
朝鮮学会	朝鮮学報 第157、158輯
(財)なら・シルクロード博	TOMBS A AND C SOUTHEAST NECROPOLIS PALMYRA SYRIA SURVEYED IN 1990-92
国際交流財団	
宮内庁正倉院事務所	正倉院年報 第18号
訪中団	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック海外研修 第四回文化財保護研究者訪中団の記録
広島県草戸千軒町遺跡調査研究所	草戸千軒町遺跡発掘調査報告書Ⅳ
博物館等建設推進九州会議	文明のクロスロード Museum Kyushu 通巻51、52号
(財)京都市埋蔵文化財研究所	平安宮Ⅰ 京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊
(財)長岡京市埋蔵文化財センター	長岡京市埋蔵文化財調査報告書第7集
京都市文化市民局	京都市の文化財(第13集)
大山崎町教育委員会	大山崎町埋蔵文化財調査報告書第13集 下植野南遺跡
田辺町教育委員会	稲葉遺跡第2次・興戸遺跡第7次発掘調査概報(田辺町埋蔵文化財調査報告書第13集)、興戸遺跡第12次・興戸古墳群発掘調査概報(同第19集)
宇治市歴史資料館	平成6年度 宇治市歴史資料館年報、宇治文庫7 発掘ものがたり宇治
京都府企画環境部	京都の自然200選(歴史的自然環境部門)
精華町	精華町史 本文篇
和束町	和束町史 第1巻
京都府立ゼミナールハウス	第6回セミナー 生態学からみた安定社会ー里山とその自然の持続的利用

京都府立嵯峨野高等学校

「京都文化論」

麻生 優

シンポジウム『洞穴遺跡の諸問題』発表要旨

石井清司

物語日本の歴史・第12巻 後醍醐天皇と足利尊氏、同第13巻 南北朝の動乱、同第14巻 室町幕府と応仁の乱

奥村清一郎

昭和53年 正倉院展目録、法華経の美術、特別展 国分寺、日本の仏教を築いた人びと、特別展 正倉院宝物目録、昭和58、59年 正倉院展目録、湖西線関係遺跡調査報告書、上海博物館 出土文物 青銅器・陶磁器

堅田 直

情報考古学—パソコンが描く古代の姿

谷本 進

淡路洲本城

樋口隆康

シルクロード考古学第4巻 西域発掘誌

松井忠春

文化財パンフレット第28集 仙台の遺跡、The Second Pacific Basic International Conference on Korean Studies Archaeology Seminar、黄金の都 シカン発掘展

三浦純夫

史跡石動山環境整備事業報告書Ⅱ

編集後記

情報60号が完成しましたので、お届けします。

本号では、平成7年度調査のうち、陶質土器などが出土して注目を集めました奈良岡北古墳群の発掘調査抄報を掲載しました。また、本号は、年度当初の情報でありますので、今年度の調査予定と、前年度調査のうち、成果のあった調査についてまとめを載せました。ご高覧下さい。

なお、府内遺跡紹介については、今年度は古墳を中心に取り上げていく予定です。ご期待下さい。

(編集担当=土橋 誠)

京都府埋蔵文化財情報 第60号

平成8年6月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

〒617 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877 (代)

印刷 中 西 印 刷 株 式 会 社

〒602 京都市上京区下立売通小川東入
Tel (075)441-3155 (代)



KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER